

6
73

近世名士圖



忠文會發兌

伊藤痴遊著

近世名士譚

東京

株式會社

忠文舍發兌

明治
41 6 24
内交

序

如し人の現々講談界に於ける成功者を問ふ者あらば、予は伊藤君痴遊の々を舉げて之に答へん、蓋し君は藝術界に於ける中年者としての成功者たるのみならず、已に黒人として優に一頭角を抜く、是れ君が天稟の辨才然らむと云ふと雖も、所謂中年者にあらずんば、焉んぞ能く之に至らむや、然り君の今日ある、實に中年迄に蓄積せる素養と非凡なる精力の賜たる也。

(1)

想ふに講談の妙は、能く話中の人物面目を躍如たらしむるに在り、その之に至るは、先づ自ら其人物を咀嚼し、之と同化し、而してそれを發揮するに適當なる藝力を有する者にして能くすべきのみ、已に咀嚼し、同化するの素養なくして其人物面目を躍如たらしめんとす、抑もまた難哉、宜なり滔々たる談者流、大石内藏之助を演じて、却て聽客をして博徒の親分を聯想せしめ、由井民部を擬して、湯屋の三介と誤解せしむるものあることや、伊藤君の獨

り成功を擅せしにせる所以、爾餘の口頭演藝家諸君の碌々依然たる所以、實に之に職由せずんばあらず。

(2)
近世名士譚は君十八番中の十八番と稱せらる、予聽ひて感嘆禁ずる能はず、屢々上梓を勸む、近者漸く刻成を告ぐるを聞く、予は讀者諸君が伊藤君獨特の洒脫なる口吻と、奇拔なる筆力とを一時に玩味するの機會を得たるを喜ぶ、回顧すれば、予が桃中軒雲右衛門師の膝下を辭して東都に出で、友人子女と糊口に窮して陋巷に雌伏するや、君一心亭辰雄師と引いて寄席に上らしめ、以て予が苦境を救ひ、爾來指導鞭韃の惠を垂れ玉ふこと茲に五年、獨り悲む身は依然たる藝界の舊阿蒙にして君の好意の萬一に酬ゆるを得ず、一心未だ銷磨し盡さずと雖も劍に杖いて南方の風雲に乗ずる能はざるを、筆を投じて悵然たるもの久し。

五月廿二日

於東亞月報樓上

宮崎滔天

拜序

(1)

拜啓
序文をこの御申越 何が扱て筆持たぬ
こと茲に十年 南無大師 金剛力は出
しても筆は動かす 序文などいふもの
が出来さうにない 断らふにも再度
の矢文、與市も困る局面 代筆の格に
もあならず まゝ三度笠 すつぽり
冠つて別紙のごとし はしがきははぢ
かきさし 古いやつがね早々
二十四日夜

伊 井 生

拙著、遺稿、侍史

在原の業平朝臣と、役名をうぬが名の頭にのせてすましたもの。是が役者の商賈であるからは、その御役者たる僕が、苟も近世名士傳であらふとも、序文ぐらゐで識者を氣どるは何でもない。

(1) 何が扱て、藝は理窟ではない、然りとて又脱線のできぬ一ト筋の軌道はある。其處で話術も無論藝であるからには、末の雫や本の露、落れば同じ谷川の水、流れにせかれて圓轉滑脱、その妙と快の趣を味はしむるは、話も畫も芝居も文章も、くどいやうだが、落れば同じ谷川の水で、藝は藝でなくてはなるまい。近世名士傳も、ずらりずんと並られば記傳記録、判して之を論ずれば、とくれば歴史の講義だ。脳を痛ませるは學校の御掛り、苦しめぬやふに飽かぬ様に、三寸の舌一箇の筆、要を摘んで事件の推移と人物の性格を浮出させる、其處がやさしい様でむづかしい、藝の味だ。番茶一杯にも焙じ加減も湯加減も、其湯のさしかけんも又吞み加減もあるのたものを。本書は話術の妙域に

(2) 達して居られる痴遊兄が。其至藝から割出して書いた近世名士傳であるから、僕はよまぬ前から立派な藝術品として尊ぶのた。よく事實は小説より面白いと、書出す冒頭がすでに小説で、テモなく惣菜料理と看板を掲げうし、ほのト味を食はせる格だ。自然々々と無闇に自然が持映される御持節柄たが、生じや牛苞は噛れぬへ。願くは、蔭に板前の腕を振はせて、それで自然のいひしれぬ味にぶつかりたい。人工は自然の前には價值がないといふが、其孱弱い人の力で自然にせまつて神の力を窺ふ處が面白いじやないか。人の力も價值があるよ、ソウく貶したもののじやない。神の力は神の力、人の力は人の力、又獸の力は獸の力だ。昔時獨乙に何某とかいふ練物師があつて、蛙を造る事に妙を得て居つたが、材料はなんでも、手工さへ達して居れば、といふので犬の糞で蛙を造つた。世間が氣付かぬうちには、此奴は妙たと手から手に渡つて珍重したが、其種が、犬糞と分つて、皆が鼻を摘んだといふ咄



伊藤 遊 編 像

(3)

しがあるが、是は近世名士を材にとつて、事實は小説より面白いといふ主義によつて、作り成した此書であらふから、本末良好、面白い事は撰舉承諾で保證する。然し是から讀んで見た曉に、只事實々と其ばかりを並らべたやうな智慧のない代物であつたら、よし千萬の人が何と賞めても、僕一人は此本に重きを置かない。サア皆様方、僕が保證した腹が勝つか、負けるか、どうですか、僕と一トツ賭事して此書を読んで見ようじやありませんかと、云爾

伊 井 蓉 峯 生

目次

- 一 桂小五郎……………一
- 一 板垣 民選議院論の發端……………三一
- 一 岩倉 赤坂喧嘩の遭難……………五九
- 一 幕政 板垣退助……………八五

板垣死すとも自由は死せず

評曰く板垣は生きて自由は死す



桂小五郎

痴遊 伊藤仁太郎著

其一

(1)

維新の三傑と言へば、誰れも知る西郷大久保木戸、その一人の木戸孝允が、未だ桂小五郎の昔、思へば文久の夢物語、歳も若いに毛利藩の臍煎、京都邸の政務座役であつた時、手一杯に朝廷を搔廻して、公卿と浪士の間、一勢力をつくつて居たが、何しろ血氣の時分であつたので、何事も控へ目に爲ることが出来ない、思の儘まにやつて退ける、自然の勢ひで、長州は薩州と提携するの、一番得策である、それには、長州が既に握つて居る勢力の幾分を、薩州に分け與へなければ不可なのだ、然るに、桂は一切の勢力を一人で占めて、更に他藩へ分けてやらぬ、殆んど盟主の如く、頭から笠にかゝつて、傳令的にやりつける、何うしても、不平は起る理由だ、殊に薩

藩の憤慨は普通でない、當時、薩藩の京都邸は、高崎佐太郎奈良喜八郎の二人が、大抵なことは切つて廻はして居る、佐太郎は今の正風のごとで、今こそ和歌杯を咏んで、何とかでありけらしと言ふやうなことを吟つて居るが、この時代の佐太郎は、一箇の志士であつた、尤も父の五郎右衛門といふ人が傑物であつた、前年島津家に、お家騒動のあつた時、切腹を仕て死んだ人である佐太郎も十四歳の青年でこそあつたが、遠島仰せつかつた位で、この父の訓育があつたから、まさに遣人のうちではあつたに違ひない、喜八郎は今の沖繩縣知事繁のごとである、これは又た格別に、猛烈な性質の人で、同じ文久年間に、島津久光が勅使大原三位重徳を、警衛つて江戸へ下向した歸途さ、東海道川崎在の生麥まで來ると、英國の士官が三人、馬上の儘まで、行列の先きを駆けぬけた『エー避けッ、エー避けッ』と行列整しくやつて來た先供の頭取が此喜八郎、これを見るや、バラ／＼とかけ出て『さてッ』聲はかけたが、英國人は構わず駆けぬける、怒氣一時に溢れた喜八郎は、透さす透さす逐ひかけながら、ヤツと氣合もろ共、腰を拵ると、秋水一閃、忽ち一人を斬つて落す、驀直にかけぬける奴を、躍りかゝつて又一刀、これも『アッ』と叫んで落馬する、残る一人は、馬を飛ばして逃げ出す、逐ひすがりさま、抛げつけた血刀、狙ひは外れて道側の松樹へ立つた、逃げ歸つた士官がこのことを報告する、之れが至難しくなつて、嚴重な掛合が起る

幕府では一應、使者を派して調べる、島津家の答辯さらに要領を得ない、終に英國と島津家の直接談判にはなつたけれど、いつ迄経つても、結果がないので、終に英國は數隻の軍艦を以て鹿児島へ攻めかけた、結局は一勝一敗、英國も呆れて、幕府へ強硬談判の末が、幕府から償金を出すことになつて、事件の治まりはついた、この一件から、奈良原は豪い勢力家になつて、京都邸の輻利になつたのである、此二人が、長藩の仕方に憤慨して何とか方法を廻らして、長藩を蹴込うと思ふけれど、如何しても、桂の方が一日の長者で、殊に権力家のごとで、如何とも致しやうがない、流石の二人も、之れには閉口した所が、恰も此時、或機會に依つて、會津藩の秋月梯次郎廣澤安任と會見することになつた、會津藩の提掇、長藩の失敗は之れからである。

其二

會津の城内に秋月壁と言ふのがあつた、これは秋月梯次郎が、毎日登城を仕て、自分の控席へ來ると、腕を拱んで、眼を閉ぢた儘まゝ熟考へ込む、寄りかゝる壁が、何時も決定つて居るので終には頭髮の當る所へ、髪の毛が沁込んで、黒くなつて了つた、それを城内の人が名付けて、秋月の思案壁と言ふ、漸々人から人に傳つて、秋月壁と呼ぶやうになつたのである、深沈寡黙にし

て、識見と腕力二つながら、兼備した人物である、後に明治の代となつてから、容保父子の處分論が大分やかましくなつて、来た、桂が既に木戸と改姓して、参議となつた時、その勢力も、一段と強かつた、恰度病氣にかゝつて、箱根の湯治場へ行つて居た、其所へ一人の虚無僧が遣つて来て、木戸へ面會を求め、木戸が逢つて見ると、これが秋月である、驚いて其來訪の次第を聞くと、秋月が涙を流して、藩侯の命乞をする、無言で聞いて居た木戸が、たツた一言「よろしい、お引受を仕やう」文久年間の舊怨を忘れて、木戸が會津の爲めに力を盡し、今日に至るも、其子孫は華族である、承知した木戸の豪いのは、言迄もないが、承知させた秋月は、一層豪いものである、かゝることは、些細な事の争ひに、永く怨恨を忘れぬ小人に聞かせて遣りたい、千歳の後にも傳ふ可き美談であらうと思ふ。

この秋月と廣澤の二人が、奈良原高崎の二人に逢ふたので、忽ち話が進んだ、双方ともに長州藩に不平がある、長州藩を蹴落したい希望は、何ちらも同一であつた、併し、この聯合は、全く長州に對する感情ばかりで出来たのである、議論から言へば、決して聯合の出来る筈が無いのである、會津は純然たる佐幕派、しかも其中堅である、薩藩は幕府に對して、不快の心を有つて居るものゝ一である、今これが一つになるといふのも、偏に長州に對する感情丈けのものに過ぎない

幕府は唯だ、之れを動機として、毛利を斃して了うつもり、薩藩は一時長州を蹴落して、その專恣を戒め、併せて朝廷の實權を握らうといふのである、然れば、この聯合の長く續かう筈は、勿論ないのだ、そんなことは、双方よく知り抜いての聯合だから、實に不思議なものさ。

流石の桂も、之れには不注意であつた、まさか全然知らない理由もなかつたらうが、畢竟軽く見て居たので、終に足を掬はれたのだらう、會津の提掣が成立つと、コソコソ朝廷へ手を廻す、公郷の中にも長州に不平のものがある、まづ之を手に入れる、意外に人数もある、有力なものも居る、計畫も大概は成つた、さア宜しいといふので、實に手際なものであつた、唯だ一晚に長州排斥が行はれて毛利大膳太夫は禁裡守護の役を罷められ、その上、國元へ逐返されることになる、會津桑名の二侯が、淀侍従を案内にて夜半の登城、天明に右の御沙汰が下る、それを桂はどのものが知らなかつたと言ふのも、全く敵を侮つた油断の結果である、急報を得て、これは大變と、桂が堺町御門へかけつけると、この時は既に會津の堅めがついて、その旗印杯が、土塀の上へ翻へつて居る、何の彼れ等が、それッ履破つて通れ、と焦る藩臣を漸く制して桂は引返す、後れて續々かけつけるものを悉く制止して、河原町の邸へ引上げさせる、變を聞いて、追々つめかける浪士、見舞に來る有志の人々、毛利邸の混雑は非常なものだ、多くは血氣に逸る武士

の動もすれば抜けば駆けも成兼ねぬ有様毛利侯は歸國して居られた時のことで、周防岩國の城主吉川盛物が、萬事の指圖役、桂は顧問といふ格だ。

「ハッ……申上げます」桂は振向て『何事』三條様始め公卿方七名、甲斐々々しき服装にて、おいでに相成り、桂殿に面會したしと申し居られます、如何取計ひませうか』流石の桂も、暫らくは腕を拱んだ儘。

其三

長州藩が朝廷の信用を博したのは、諸藩に先んじて、攘夷の實行を爲したのが、原因となつたには違ひないが、公卿の中に、所謂長州派なるものがあつて内部から其後援を爲したのも、朝廷の信用を博する、最大原因であつた、殊に最も親密に、桂と往來したのが、三條中納言實美、三條西中納言季知東久世少將通勝四條侍從隆謨王生修理太夫基修錦小路右馬頭頼徳澤主水正嘉宣の七卿である、従つて、佐幕派の此七卿を憎むこと、尋常一様でない、七卿は飽迄も決心を仕て長州と苦樂を俱にするの覺悟、倒幕の目的は、何處までも貫徹せねば止まぬと言ふ、決心の此に在るが爲め、自然に議論も手段も突飛んで来る、若い威勢のよい公卿は、多く其味方になつて、

(6)

専ら長州の爲めに務める、桂は心ひそかに、まづ此様子では大丈夫、倒幕の目的は、近きうちに果されるものと、稍や安心の起つたのは、油断の出る基、文久三年八月十八日の夜、會津桑名の臨時登城、それには長州に不平の公卿が内應もすると言ふやうな次第で、遂々形勢一變、長州は禁裡守護職を罷められたのは、前回に述べた通り、同時に七卿の邸へは、清水谷宰相が勅使として、朝廷の御沙汰を傳へる、長州と結托して妄りに朝命を矯め、時期を計らず攘夷を主張し、天下を動搖せしめた、と言ふのが罪案である、之れに依つて當分禁足他人との面會を差止むることであつた、七卿の驚き容易ならず、直に馳せて應司關白の邸へゆき一談判と思ひしことも關白の不在なりし爲め何の甲斐もなく、空しく歸邸を待受ける所へ、又々勅使がやつて来て、朝廷は散々な不首尾となつた、今は如何なる處分を受くるか、甚だ不安心の状態となつて、止むを得ず一同打揃ひ、河原町の長州邸へ遣つて來たのである。

(7)

長州邸には、吉川盛物毛利讚岐守を始め、桂小五郎以下の家臣、別に浪人も有志も打交りて、その混雑は普通でない、今や評議の真最中、靜かに考へて徐ろに計畫を立てる杯のものは一人もなく、腕を撫り拳を握つて、悲憤慷慨するばかり、會津二藩の堅めた御門を、履破ぶつて打通れとか、此秘策に與かつた公卿共を、三條破へ引出して打ち斬れとか、それは一豪い議論ばかり

で、斯うと言ふて纏まつた考案を述べるものは更に無い、結局が吉川侯の意見を聞きたいと言ふことになつた、流石、各家の末裔の監物、その意見は、會薩に出し抜かれて、事此に及んだ以上は、一時引上ぐる外はなからう、今日で暦日の盡るものではない、更に回復の策を設けて、再び遣つて來ても遅くはない、まア今日の所は平穩に引上げるが善い、徒らに焦慮つて自ら敵の術中にかけて込むが如きは、智者の爲可きことで無いと、言ふのであつた、血氣に逸る人々は、甚だ不平である、此上は桂の意見こそ、聞きものであると、片唾を呑んで待ち受ける、桂は一向平氣なものである、變を聞いて堺町御門へ駆けつけた時こそ、顔の色も變つて少しは狼狽の氣味もあつたが、今となつては、思案も定まり覺悟も決いた、平日の通り少しも變つたことはない、一同の質問に應じて「拙者は吉川侯の御意見の通り、此際に處する道、その外には御座るまい」さつぱり言切つたので、一同も最早致方はない、終に其通り決定して了つた。

愈よ斯くと決定つて、歸國の準備に懸る、折柄やつて來たのが、三條以下の七卿である、桂は客間に於て面會することになつた。

其四

百事についても内氣な實美、桂に逢ふた時は、顔色を變へ吐息を漏らすばかり、桂は笑みを含みで「今朝の事變、定めて御心勞の儀と、お察し申します、打揃ふての御見舞、忝けなく存じ申す」七卿は桂の容子を見て案外に思ふた、さては我等の身の上の、かくなりたるを知らぬのか、澤嘉宣は膝を進めて「桂氏、未だ御存じないのぢやな」ハ、ア御存じないとは「我等七名、朝廷の御勸氣を蒙り、既に謹慎の御沙汰を受けました、此上は如何なる御處置を受くるか、思へば果敢なき身の上で御座る」桂は眉を上げて「フーム、それは意外で御座る、まさかと思ひしは、拙者共の油断、何共申譯も御座らぬ」互に暫時は語もない、「此上は何と成さる御積りか」壬生卿は「されば、一時京地を連れて、花咲く春を待つの外はなし、頼るは貴藩ばかり、何分よろしく頼ひ申す」桂は腕を拱み思案に沈む、實美聲を激まして「御不承知か、我等七名今や之くに所なく、頼るに人なし、貴藩の覺悟一つで、七名の死活は定まるのぢや、それとも何か……イヤ、しばらく……拙者の覺悟は既に決定つて御座る、唯だ何として連れ申さうか、その工面一つに苦み申すのぢや」東久世卿は「た連れ下さると決定つた上は、お引上げの同勢を一途になつて、正々堂々と立退きたいのぢや、他に工面はあるまい」ウム……よろしい、ならば御望みの通り覺悟の態を見て、桂も漸く安心した、これから吉川監物毛利讃岐と對面、その他のものにも、それ

く面會して、愈よ立退きとなる。

吉川侯と桂の意見では、同じ立退くにしても長防二州に於て卅六萬石を所領とする、流石毛利の一門はと、後世に迄言傳される丈けの、立退きを仕たい、それには正々堂々と、隊伍を整へて白晝公然引上げやうと言ふのである、若し之れをば、彼是れ言ふやうなら、それこそ一戦を試むるも武門の面目、然れば、何處までも、陣拂ひの格で、各自小具足に身を堅め、武具の用意怠りなく、士氣昂奮して天を衝くの有様であつた。

此時に、毛利家から關白鷹司通熙に差出した、上書は斯言ふであつた。

這回堺町御門の御固め免除せられし上は、専ら國許海防盡力致す可きに依り、讃州鹽物を初めとして、其他兵卒に至る迄、只今歸國仕り候

尤攘夷之義に就ては、彌々御依頼遊ばさるゝ段難有奉存、舉て必死の力を盡くし勅旨を奉じ、尙ほ又嘆願奉る儀は、積年正義精忠にて人望もあらせらるゝ、三條殿を初めとして、有志純粹の公卿御方を御答めありとのこと、驚嘆之外候はず、然るに件の方々は、何分にも攘夷の先陣御懇願に在らせらるれば、此度我々國許へ御供仕候
哀れ、七卿の忠節を御諒察遊ばされ御復職御沙汰祈願致候(以下略)

巧く書廻してある、一片の外交文書のやうな風がある、然るに、桂が更に出發の用意をせぬ、唯だ人々は、落着いたものだ、と思つて居る、獨り吉川侯は不審に思はれて、一室に桂を招いて何故に支度をせぬかと問ふた、桂は「拙者は御供を致兼ねまする『なんと……俱々歸國はせぬと申すか』左様に御座りまする、實は立退いた後々のことも承知いたし度、後日の計策を致しまするにも……『尤ものことぢやが、それは頗る危険のことに思ふ、其方ならずとも、他に人もあらうに』『イヤ……其御配慮下されますとは、難有きことに存じまするが、他人に頼めぬ秘密も御座りまする、殊に空矢の百本よりは、急所の一矢が……』『ウム……』よう判つた、然らば跡に残つて思ひの儘に致して見よ」此に於て桂は獨り残ることになつた。

そのうちに、出發の用意は充分出來た、小銃組六百五十人を三手に分け、槍組を其間に配置し大砲二十門を曳て、眞先は來島又兵衛、吉川侯の左右は、撰りに撰つた強者二百餘人、つゞいて讃岐侯、七卿の周圍は、浪人組の一團、七卿は紫色の直垂に黄赤白杯の思ひくゝの縮緬を以て、襷十字に綾取り、長刀小脇にして馬に跨り、悠々として引上ぐる、同勢二千三百餘人、山崎の街道から陸路を取つて兵庫に向ふ、流石に立派なものであつた、會薩の二藩も、手を引いて此行列を通して了つた。

其五

(12)

長州派の引拂ふた跡の京洛は一時火の消へたやうに静まり返つた、必ず無事には引上げまい、掛合ひも衝突も多少はあらうと、豫期したものは會薩の人ばかりではない、誰れも皆な左様思つて居た、所が、容易と引上げて了つたので、これには案外の思ひを仕て、何事か計畫のあるには違ひないと、警戒は益々嚴重になつた、新選組は非常な勢力で、京洛の市街は、此隊士の取締りを受くることになつた、新選組の名を聞いては、泣く子も黙るといふほどの、それは豪いものになつたのである。

誰れ言ふとなく、斯ういふ風説が高くなつて來た、長州藩士の桂小五郎は、何うも歸國した様子がない、一人足を留めて何か計畫する所があるらしいとのことで、その風説が段々高くなる、中には桂に酷肖たものを見かけた杯と言ふものもあるやうになつた、佐幕派の心配は普通でない長州の恐ろしかつたのも、之れを逐拂ふのに、非常な勢力を要したのも皆な桂あるが爲であつたその桂が、京洛に残つて居ると言ふに至つては、言語道斷沙汰の限りである、何とかして捕へなければならぬ、後患を爲すものは彼れである、といふので終に新選組に、その命が下つた。

(13)

祇園島原先斗町と、花柳の智識のみ、意外に進んだ京都の半面は、他郷から入込むもの、懷裡を絞るに忙しい、それを覺悟で、金の切れ目に戀の糸を引付けやうと焦る若殿原、三本樹の藝妓に幾松と言ふのがあつた、素性は然る可き武士の家に産れたもので、幼き時に父を喪ひ、母の手一つに育てられ、重なる不幸に故國を出で、流れくつて京洛に來り、終には美人薄命の謠に漏れぬ、今の境遇とはなつたのである、遊藝は言ふも習なり、讀書も並外れて出来る、るれに堅いが噂さの曳手數多の全盛を極めるればかりは昔も今日も變らぬ、男嫌ひと聞ては、何とかして口説き落さうと、必死に通ふものが多い、何時でも否哉は申しません、さアに使ひ下されと、拙げ出されては兎角手の出ぬものである、幾松の男嫌ひは漸く人から人に知れ渡る、それでも何うかと通ふものあり、中には其心の美しいのを買ひに來るものもある、桂も初めのうちは、その心を買ふ一人であつたが、合縁奇縁は神様の惡戯とでも言はうか、いつか二人は情交になつて了つた、男嫌ひの評判が高かつた丈けに、桂のことが知れると、その騒ぎも普通でない、さきに彈かれた連中が、岡焼半分と呼んで見る、勝手な熱を吹いて鬨る、困るだらうと思ひの外、本人は却て大得意の態で、しッべい返しに素惚けに、果は誰れ一人として、手出しもせず悪口も言はず、彼れは桂の情婦ぢやと、誦らめをつけて、眞の勝負から招ぶ人ばかり、此に至つて桂も愈々藝妓の

情夫に成済した譯だ。

藩士一同が七卿と具に京洛を落ちた、跡へ残つた桂は、これから會薩の動靜を窺ふ役廻り、腹帯しめてかゝらうとすると、意外にも新選組の警戒嚴重にして、容易に外出も出来かねる始末、これには流石の桂も閉口した、一夜ひそかに邸を逃れて、漸くにやつて来たのが三本樹、幾松の家を訪ふて、まづ此家に隠れることに仕た、久振りでの差向い、八寸の膳を四寸宛に占領して、盃の遣取りも始まつた、他人入らずの樂みは、苦勞の中で又一段のことであらう、折柄表の戸を、ドン／＼／＼ドシンと、はげしく叩くものがある『こらッ……幾松』聲は儘かに武士のやうだ、幾松は疾くも、ふツと行燈の火をふき消す、表では益々はげしく、戸も割れるばかりに打叩く、桂は夜具戸棚に這入むだ。

其六

幾松の家へ来たのは、桂の不覺であつた、凡そ京洛にあるものとして、二人の關係を知らぬものはない、桂の在所を捜すものゝ、幾松の家に氣の注かぬ筈はない、それに思ひ及ばぬほど迂闊の桂でもなかつたが、それが又理屈ばかりで壓せない男女の情、又た一つには、幾松の商賈を利

用して、ソレとなく會薩の様子も探つて居る、旁々幾松を訪ふ必要はあつたのである、然るに新選組からは各所へ密偵が出してある、その一人の報告に、武士風の男が幾松の家へ這入つたこと、さてこそ桂なれ、はやく駆付けて捕へると、居合せた三四人、飛ぶが如くにつけた、中の容子を窺うては見たが、よく判明らない、氣早の一人が割れよとばかりに戸を叩く、容易返事をせぬ、益々荒らく叩くと、やがて幾松の聲で『ハイ……誰様でする』これッ……はやく開けろ『もう晩うなりましたゆゑ、明日た出でやす』馬鹿を申すな、はやく開けんと蹴破るぞ『そないな亂暴しやはつては不可まへんがな』然らばはやく開ける『ハイ、今開けますがな』下女を用事に託して、外へ出したのが僥倖、幾松は度胸を握へて、戸締りを脱す、待つ間も遅しと、各自抜刀の儘ま、ドヤ／＼／＼と闖入する、幾松は立塞がつて『マア、お待ちなはれ、貴君方は何といふことや、他の家に……』『エー黙れッ……桂が居らう、桂を出せッ』桂はんは此頃、さつにお見限りで、ちやつとも來やはりまへんがな『嘘を申すと許さんぞ』大概他に増花の出來やはつてたいでが無いのちやろと思ひやすと、口惜しうて／＼なりまへんが『何だ、惚けとは怪しからん今迄二人で話して居つたらう』そりや話は仕て居りました『誰れか、その對手は』一人で『その一人は誰れか』ミツちやも妾じやがな『馬鹿なッ、一人で話が出来るか』そりや出來ますわ』薩

膳すゑて二人のつもりで、話は一人で掛待だす、オホホホホ」飽迄も人を嘲弄した、武士を武士臭しとも思はぬ、女としては大膽な態度「よし、家捜しするぞ」そりや、御勝手や「それ」と一人が指圖する、バラ々々と坐敷へ履込む、つゞいて幾松も、火鉢の前へ陣取つた「マア、まちなはれ」何ぢや「もし、家捜ししても桂はんが、居やはらなかつたら、何と仕なはる」居らねば、それまでのことぢや「それは卑法や、おまへんか」卑法とは「女ばかりの家へ、立派な武士はんが、しかも夜中にふみ込んで、家捜しして思ふ人が、居やはらんから言ふて、黙まつて歸りやはつては、第一お腰の刀に對して、すみすまいがな」理の當然に武士はグツとゆきつまる、しかし、對手は女である、構はず家捜しする、夜具戸棚へ手をかけた「これはツと」驚く幾松、思はず立上つて遮ぎらうとする、之れを抑へつける、中の夜具を投げ出す、といふ騒ぎ……幾松も覺悟してヂツと眼を閉ぢ下を向く「ヤツ……居らんぞ」ナニ、居らん」代るく「覗き込む、人影すらも見へない、幾松も之れを耳にして、初めて我にかへる「ハテ不思議な、どうして彼の方が」と思へど、斯うなれば最う安心、呆れて立つた武士を、冷笑のうちに見上げた「桂はんは居りましたかえ」ツーム「藝妓は仕て居ても一人、家捜し迄して、その儘までは歸りやはるまい何としやはるか」イヤもう散々にやりつけられて、武士は這々の體で逃げ出した、桂の居らな

つたのは、何よりだが、さて斯うなると、また一つ心配を増して、何處へ逃げたか、その安否も知らなげりや、心が濟まぬ、幾松の苦心は、いぢらしいほどである。
桂は、幾松と武士の掛合のはげしいうちに、隙を見て戸棚から這出し、二階へ出て、窓から屋根へ、屋根から屋根と、終に姿を隠したのである。

其七

京洛大路の往來も途絶へ、祇園神社の鐘の音も、一層寂て物凄く、加茂川の流れも何時しか眠る丑滿時、思へば大膽な婦人の獨歩き、三條の大橋の東詰から、石崖を下りて来るのは、例の幾松である、甲斐々々しく小襦端折り袴に立つて、手を拍つさへも四邊を憚かる、合圖と見へて「ヘン」と咳拂ひ一つ、橋の下から出て来た一人、闇に透して「幾松か」「ハイ」はらくと側へ寄る、さぐりながらに手と手を握り合つた、身には若布の行列に均しい襦袢を纏ひ、頭髮も亂れて見苦しい、汚臭い手拭で頬冠りを仕た、乞食姿の桂小五郎、如何に目的あつてのこととは言へ、苦心のほど思ひやられる「毎夜のこと、嘘を迷惑ぢやらう」「なんの、妾は貴君の爲ぢやさかい、ちやつとも構やへんが、貴君が辛いことやらうと、それを思ふと涙が出来ますわ」「お前の親切は決し

て忘れんよ』とア、お待遠でヤツたらう』腰に下げた包物を解き、中から取り出す竹の皮の包、小五郎は幾松の手を取つて、橋の下へ連れ込んだ、着て居た酒菰を脱いで、砂利の上に敷て、二人は差向ひになつた、幾松の心を籠めし、握飯を然も甘さうに喰らう小五郎の姿を見て、幾松は思はず顔を背けて泣泣『お前泣いて居るの……』否、泣いては居りまへん』拙者は喜んでお前の間に生命をつないで居る、まだこのさき何如な苦みがあるか知れんぢや、泣くといふことがあるか』ハイ、泣顔見せて濟みまへん、どうぞ許してや』許さんも許さんもない、今夜に限て何故そんな弱い氣を出したのぢや』そんな苦い辛い辛いことも、貴君の爲めなら堪忍もしやう、かうした逢瀬も樂みの一つ、けれども今宵は、泣すには居られまへんわな』うりや何うして』どうしてツて、貴君もう京洛の地には居られまへんぞ』エツ……拙者が今夜のうちに立退いて下はれませ』今夜のうちは性急な、シテ何ういふ理由か』實はな、今宵呼ばれた酒樓の二階で、隣り座敷の高話、それが貴君のことや』フム、何といふて居た』この頃、三條大橋の下に居る乞食の、阿房陀羅を誑つて居る、あれは何うも桂に酷背て居るやうぢや、若しも左様なら捨ては置けぬとそれから跡はヒソ〜話、さア妻は氣が氣でなく、漸と眼を貫うて三本木へ歸ると、マア貴君、恐ろしい家の周囲は、武士がつけて居ますやう、それから知巳の家で、この辨當を造らへて持つ

て來たのです、ねもう貴君は、京洛には居られませんやう、妻は思ひますがな』言ひ終つて跡は涙にくれる、流石の桂も、しばらくは腕を掛んで考へに沈む』イヤ、よく知らせて呉れた、よろしい、それでは今夜のうちに立退う』はんまに、それが宜うたます』これから桂は出立の用意、と言つた所で、乞食の出立、別に支度もない、幾松は持つて來た旅費を渡す、今これ別れば、もう何時逢へるか分らない、こんな危険しい世の中に、多くの敵を有つ身の、何處で何ういふ災難に遭うかも知れない、さなきたに生別の悲さは、死別にまさるといふ、それさへあるに、死別を兼ねての別れかと、思へば胸も張裂くばかり、流石氣丈の幾松も、桂の膝にしつかと縋り、聲を忍んで嗚咽あげる、如何な豪傑も、この道ばかりは別なもの、桂も暫時嘆息の語はなく、聞ゆるものは前を流るゝ水の音ばかり……

數日の後、桂は但馬國出石の城下に着いた、これから魚屋の帳附になつたり、荒物屋の婿になつたり、しばしは氣樂な町人の生活、そのうちに形勢一變、京都は再び勤王派のものとなつた、毛利藩にも、幾多の騒動があつて、これも終には高杉晋作の一働きで、全く佐幕派は閉息して丁つた、思ひがけぬ幾松が迎ひに來る、事情も悉く判明つた、それから二人連れ立つて、故郷の長州に向ふことになつたのである。

土州の坂本龍馬が、非常に苦心して、漸く成立つた薩長聯合、その出来たのが、恰も長州征伐で、幕府が手を焼いた後のとであつただけに、この聯合は、一層に倒幕派の勢力となつたのである、これには無論、桂も参加して相談した一人である、尤も此時は既に木戸準一郎と稱して居た、長州國內の異論を抑へたのは、全く高杉の力であつたが、外に出ての交渉は、殆んど木戸一人の力であつた。

幕府に大人物のなかつた爲めに、時機を圖らず征長軍を起して、大味増をつけて了つた、反對に自分の方から、媾和を申込むと言ふ大失態、イヤハヤ幕府の威信は、全く地を拂つて零となる長州の鼻息は素晴らしいことになつた、加ふるに、薩州との聯合が成立つ、諸藩の款を通ずるものも漸々多くなるといふ有様、形勢は刻一刻と進んで来て、藩長士の三藩主から、政權返上の建白書が、慶喜公の手許へ舞込む、貧乏籤を曳いたのは慶喜公である、十五代の將軍と肩書は豪いが、徳川の流れも涸れて、土も石も願になつた時に、引受けた將軍株、恰で價値の無なつた株利株のやうなものだ、その上に、將軍を罷めろとの勧告、實に慶喜公は、お氣の毒なものさ、所

が此人普通の將軍でない、ナカ／＼わらい所があつて、この建言を採用した、勿論、その間には幾多の事情も経過もあつたが、兎に角、採用したには違ひない、大英断とは斯ることを言ふのであらう、一篇の辭表は朝廷へ捧呈された、待ち構へて居た公卿や、倒幕派の人々、それこそおいでたど手を拍つて喜ぶ、朝廷からは早速お聞届けの御沙汰が下る、慶喜公は直に大阪城へ移つて、謹慎の身となつた、倒幕派は、此に於て時を得顔に跋扈する、果ては、慶喜公に對して、領土返納論が起る、必ず拒むに違ひない、もし拒むたら構はんから、遠勅の罪人として、嚴罰を加へろと、斯ういふ有様になつて来た、慶喜公も、將軍は罷めたが、まさか、領土まで返納しろとそんな難題は出まいと思つて居たのであつた、が此議論が漸く勢力を有することになると、流石に憤激して、此命は飽迄も拒むことに覺悟する、會津桑名の二侯は、無論のこと斯る命には服するなといふのである、それに、此くの如く徳川家を追究するのは、朝廷の御眞意でなく、その實は、薩長の爲す業と思へば、一層氣も焦り心も激して、もはや兵力を以てするも苦しからず、宜しく上洛して、君側の奸を除く可し、薩長を屠らすれば天下を奈何といふ、恐ろしい見幕で、まづ哀訴嘆願の爲め、使者を出すこと再三、そのうちに、越前の松平慶永と尾州の松平慶勝とが、朝廷の内使として大阪城へ来る、城内の混雜は容易ならず、慶喜公も、この使者に對しては、断

平として謝絶をする、同時に部下の兵を率ひて上洛の支度にかゝる、このこと早くも京都へ知らせる、公卿も徳川の決心堅きに驚いて、稍や逡巡の状が顯はれる、倒幕派の参謀西郷吉之助、大久保市藏、廣澤兵助、木戸準一郎等は、朝廷へ詰め切りで、慄へ戦く公卿を透し慰め、一方には、薩長の兵を一つにして、鳥羽伏見に關門を設け、逆茂木をつくり、大砲を備へつけて、萬一の變に備へるといふ騒ぎ、けれども、大阪にある徳川の兵數は二萬に達し、勢力ナカク悔る可からず、之れに反して、薩長の兵は、僅かに三千内外、戦争は必ずしも兵力の多少に依らずとは言へあまりに數の隔絶して居る爲めに、膽力のない公卿や、腰の弱い倒幕派は、稍や動揺して來た、獨り此際に毅然として居たのは、岩倉具視外數名の公卿であつた、西郷木戸等は、漸く之れを頼として、辛ふじて硬論を持するといふやうな譯で之れとても、必勝を期してのことではない、行懸り上、此處で尻込みしては、再びかかる機會をつくることは出來ぬ、騎虎の勢ひ、行ける丈けは行かふと云ふ迄のことである、然るに、時運は倒幕派に傾いて、伏見鳥羽の一戦は眼にあまるほどの大軍を募兵を以て打ち破つた薩長の働き振り、形勢は愈よ茲に定り、錦の御旗は、東海東山北越の三道に、勇しく翻へることになつて、トコトナレ節は到る處に誦はれ、進軍の喇叭は六十餘州に響渡る、時しも慶應四年改元して明治元年の五月、江戸上野臺の戦ひに、幕府の根據

は、一掃され將軍は水戸に退隱して、朝命を待つ身とはなつた。

其九

攘夷論も心のドン底から出たものには違ひないが、果は實行の遂げられぬと言ふことも解り、世界を通じての議論でないと言ふことも悉皆解つたけれど、今更さうと言ふこともならず、解らないやうな顔を仕て、飽迄も攘夷論で押し通し、それを材料に使つて、倒幕の目的を果した手際は、流石に豪い所がある、將軍の慶喜公が、尻尾を捲いて水戸に謹慎をする、旗下八萬と稱して二七十年の間、威張り通した直參も多くは腰も魂も抜けて、僅かに上野に籠つた人數の三百か四百、それも漸く一日の開戦に過ぎず、降りしきる五月雨の中に、奮闘血戦した甲斐もなく、忽ち破れて江戸は全く官軍の手に落ちて了つた、奥羽には會津侯が奮張つて居るやうなものゝ、その運命も大概は知れて居る、函館の五稜廓には、榎本釜次郎大島圭介等の殘黨、壘を高ふし壕を穿ちて、よく戦ふと言ふ噂はあれど、これとても先の見へ透いた話で、最早やがて天下は靜平に歸す可き筈と、誰れしも期して居た通り、會津の落城と共に、奥羽の事は此に收り、榎本の降伏に依つて、蝦夷の波風穩かに、はや泰平の基礎は定まつた、倒幕の功、天下一統の勳は、果して誰れに

歸するであらう、言ふ迄もなく、それは薩長の二藩であると言ふことになつた、表面から言へば、土州もある肥前もある藝州もある、他にもいろいろあつたが、しかし拔群の大人物がなかつた、爲めに、盡した功もそれほゞには擧げられず、言はゞ様の下の力持に過ぎなかつた、大勢で寄つて集つて、薩長に土持を仕たやうな譯で、王政復古と同時に、薩長の勢力は隆々として、旭日も爲めに光を奪はるゝやうの有様、尤も木戸大久保西郷の三傑があつて、百事は其切盛をする、足並もよく揃ふてゆく上に、朝廷の御信任は厚く、政府の方針は此三人の手に決せらるゝことになつた假し多少の不平は起つたにしろ、壁に尻を放るほどの甲斐もない、骨を折つて徳川を倒して更に又、茲に新しい徳川政府が出来たやうなものである。

桂小六郎も今は木戸孝允と改めて、參議の職に就く、多年の苦心はあつたにもせよ、無上の榮達と言はねばならぬ、幾松も此時は落籍せられて、木戸令夫人となり濟した、木戸は賞典祿も千五百石を頂戴すると言ふ難有い身分になつたのである。

江戸が東京と改まつてから、風箏一たび京都へ立歸らせ給ふことになつた、三傑初め供奉して、京都へ這入つた、御用も大概相濟むでからあと、誰れが發意か知らぬが、何處か一樓に會飲して、昔話を仕やうのことになつた、この日に限つて、一切官等の區別なく、昔の有志浪人の格で、

面白く飲まうとのとだから、實に奇談珍聞も多く出た、酒盃は頻りに廻る、談笑は湧くが如く、昔の浪人時代に立返つてからのとだから、その無邪氣さ面白さ、隠し藝の有らん限りを盡くす、最早大分酒もまわつて、酔ひ倒れたものも二三人はある、この席に呼ばれた、藝妓のうち、木戸の前に酒の對手を仕て居る、相當の年配の、髮の薄くなつた、顔に小皺のある所から見ると、四十の阪を幾つか越へた女で、頻りに木戸の顔を見ては、小首を傾け、何事か思案に沈む容子、誰れも皆な酔ふては居るが、女には眼のない所謂英雄の奇合、はやくも其藝妓に眼をつけたものがある、さア問題になつた、それから、それへと話は傳はる、言はれて氣がつくと、成程妙だ、木戸の對手をする容子が違ふ、顔ばかり見て居る、これは變だといふので、そのうちの一人が立つて來た「こら、オイ」突如手を取つた「あれ、そないにせんでも行きますわな」ちよつと用事がある、此方へ來い」手を取つてズン／＼引張つてゆく、次の室へ襖を開けてはいる、跡をピタリしめた、これが伊藤俊介、今の博文である、跡では一同のワイ／＼はやし立てる聲が起る、藝妓は年丈けに左迄驚きは仕ないが、あまりの不意打に、少しは恐縮の態である。

伊藤博文は抑も俊介の昔から、金銭には冷淡であつたが、女色にかけては其頃から豪傑であつた、その俊介に別室へ捕虜になつたのであるから、容易ならざることとして、一坐の哄笑と喊聲は、ワツ／＼といふ騒ぎ、暫らくすると二人は出て来た、俊介は彼の藝妓を、緊かと抑へて動かさない、一座の哄笑は再び起る、暫らく静かに願ひたい、少し報告するところがある、この藝妓が、木戸公に對して……」藝妓は顔色を變へて「あなた、マア、いけまへんがな、ないしよ、やよつて、はなしたのでおまツかな」エー、黙まつて居れツ」さては何か面白い秘密のあるところ、一座のうちには、出て来て藝妓を制するものもある、俊介は大得意になつて「この女が、木戸公を見て何となく、情ある容子を見せたのぢや、此に於て、拙者は今別室に於て詰問したのぢや、所が意外の事を言ひ居る、それは斯う言ふ理由ぢや」あれツ、マア、あなたは不可まへんがな」又も藝妓は乗出さうとする「これツ、黙つて居れ……惚れたら惚れたと言へ別に理由があるなら、あると言へ、貴様の木戸公を見る眼が違ふ、何ういふ理由ぢやといふたのぢや、然るに此女の曰くぢや、木戸公の顔が、阿房陀羅の乞食坊主に似て居るから、見て居たといふぢや、木戸公も悪いものに似て居たもんぢやないか、アツハ……」報告が済むと、藝妓は恐縮して伏俯して丁ふ、一座は腹を抱へて笑ふ、木戸は之れを聞くと均しく立上つて、彼の藝妓の傍へやつて来た「これ、ちよ

ツと来い」その手を取る「あれ、どうぞ堪忍へて下はれ、悪氣があつて言ふたのぢやないのや、ホンマにどう思つたもんだすから、伊藤はんが、しやべりやはるもんやから、悪いのでたます、妾は……」マア宜い、言譯はせんでも、怒りやせん、少し聞きたいところがあるのぢや」無理に手を取つて、自分の席の前へ座らせた、一座の視線は二人に注いで、満場寂として水をうつたやうになる、木戸は膝を正して、盃を取つた「さア、一ぱい呑め」どうぞ、堪へて下はれ、あなたをなぶつたのやないによつて……」ちやから、怒つては居らんと云ふに、分らん奴ぢや、マア一ぱい呑め」藝妓は慄へながらに、一ぱい呑んで返盃する、木戸は之れを受けながら「今の伊藤の話した通りか」ハイ」詳しく聞かせて貰ひたいものぢや」どうぞ、それは御免を……」イヤ、ゆるさん、話さぬうちは許さん、詳しく話せ」再三の押合に、藝妓も我を折つて「よろしうたます、物語いたしますによつて、どうか悪い所は堪らへてや」ウム、それはよし、話せば勘辨する」七年ばかり前の夢でおますが、妾に一人の情夫がたましたのや」これは驚いた、冒頭まづ惚けた「毎夜、座敷を濟ませては、その情夫の家へ通ふて、夜明けに歸つて来るのや、三條の大橋まで来やす時分に、漸く太陽がた昇りやすのや、橋の上で拜んで居りますと、それはく汚い姿の乞食はんが、出て来やはつて、木魚を叩きながら、阿房陀羅をうたひなはるのや、それが巧くはおまへ

んが、文句は皆な新らしい、時世のよをよみ込んでおますのや、見苦しい姿は仕ておますが、何處もなく威のある、どうも武士はんの成の果と見たのやす、さアた氣の毒で堪まりまへん、少しばかり包んで上げやすと、喜んで挨拶なさる言語の端は、もう立派な武士や、それから毎朝通るとその時には、必と出て居やはりましたが、そのうちに見へなくなりました、失禮のとやが、その乞食はんには、あんたが酷く背て居やはりますので、つい思はず見惚れて居りやしたのや」木戸は思はず膝を進めて、藝妓の顔をヂツと見詰めた。

其十一

「フーム、それでは……お前が其時の婦人であつたか」餘りに意外の語、藝妓は唯だ木戸の顔を打守るばかり「お前の話しは眞實のことか」押返して問ふた「そりや最う眞實のことだする」その男の顔に見覺へでもあるか「その御方はんの顔に大けな疵の痕がありましてな、それが貴君の顔にもありまッがな」ウム「大けな眼のピカリ／＼して居りまッがな」感嘆まつたと言ふ容子の木戸は思はず手を出して、藝妓の手をヂツと握る「どうぞ、た許しや」イヤ、その時の婦人は、お前であつたか、私は其乞食坊主ちや」エツ……それでは、矢張り貴君が「さうぢや、た前の惠

みを受けた、阿房陀羅坊主ちや」意外の意外、藝妓は言ふ迄もなく、一座は水をうつた如くなつて、視線は悉く木戸の顔に注がれた。

木戸は幾度か感嘆の聲を漏して「實に意外ぢや、た前に再び邂逅ふとは思はなかつた、恩人の顔を見忘れて相済まんよ」俊介は已れの悪戯から、却つて此興味ある奇遇に驚喜して「これは意外ぢやつた、木戸公の經歷は大概知つて居つたが、これ丈けは今聞くのが始めてぢや、願くば其當時の物語を承知はりたいものぢやが」一座のものは異口同音に之れを迫る、木戸は微笑を含みながら「よろしい話さう」盃を取つてグツと呑乾した「斯う言ふ譯ぢや、儲か文久三年の八月ぢやつた、大久保公も此處に居られるが、會津と薩州の聯合に、マア一ぱい陥穽られたのぢや、數年の間、京都に勢力を握つて居つた、我藩も此聯合の成立した、利那の油断に遂々朝廷の御勘氣を蒙り京都を立退くことになつて、三條公初め七卿のお供して、國元へ引上げることになつたのぢや、拙者は其時に一人跡へ残ることになつて、探偵の役廻りぢやつた、所が拙者の顔が存外知れて居るので、さア危険で堪まらん、種々に工夫をしては見たが、幕府の詮索が厳しい、終には乞食姿になつたのぢや、三度の食事は幾松の持運びに餓を凌ぎ、人目を忍んでは、佐幕派の秘密を採つて居るうちに、新選組の隊士が遂々氣がついたのぢや、幾松の家の開闢は、隊士が各自姿

を變へて絶け廻すと言ふ有様、果は幾松の食送も絶へて、食事にも差向へる、貯蓄も無いので、これには拙者も困つた、そこで一工夫しての阿房陀羅經ぢや、固より素人の巧からう筈はない、聞くものも一笑に葬つて錢は投げん、餓は迫つて来る、所が一朝のことで、姿も貌も粹な婦人が通りかゝつて、錢を投げて呉れた、これが一文や二文ぢやない、ア、特志の婦人もあるものと、心のうちに感じたのぢや、然るにその翌朝も同じこと、二日三日とつゞくうちに、愈よ一身の危急が迫まつて来た、幾松の働きて、一夜ひそかに京都を脱け出して、それから先きも、段々の苦心、幾多の月日を経て、まア今日の會合と迄なつたのぢや、そこでこの婦人の恵んで呉れた錢がその時は生命綱、今も忘れずア、彼の時はと思ふともある、圖らずも其婦人に、此處で逢ふといふのも不思議な譯ぢや、しかし、これア拙者はかりぢやない、君等も同じやうなとあらう、少し代つて物語つたら何うぢや、アツハ、ハ、ハ、ハ、大久保は例の重口で「オイ、木戸……その阿房陀羅經ちうもんを、うたつて聞かせんか」一座手を打つて哄笑する、まさか、木戸も今となつてはうたへん、終は酒と笑ひで其日のことは了つた、この藝妓は、これが縁になつて澤山の金を貰ひ、一生を安く送ることになつたといふことである。

木戸民選議院論の發端

其一

國會が開けてから、最早彼は二十年近くになつた、今から思へば、面白いことや、滑稽のことや、腹立たしいことや、涙の落つることや、それは、種々の物語があるのだ、一面から見れば當時の政治家なるものゝ情態も知れるし、却々愉快な話もある、惜い哉、我邦では未だ是等のことを書いたものが無い、僕にした所で敢て其全般を盡くすと言ふのではないが、マア自分の記憶に存する丈けを述べて見やう。

明治六年の征韓論は、歴史上の一大事實である。明治政府が、武動派と文治派と、最初から開闢のうちに組織されたことは、少しく歴史に通ずるものゝ知る所である、之れ無きも何時か一度は必ず破裂の運命は来る可き筈であつた、それが終に征韓論に依つて、大破裂を致したのである、しかし、今は征韓論の原因や性質を述ぶる場合ではないから、それは言はぬが、民選議院設立の主張が、強く響いたのは全く之れからである。されば滿更因縁のないことでも無い。

征韓論は武動派と文治派との衝突には違ひないが、更に他の方面から言へば、西郷隆盛と岩倉具視との喧嘩とも見られる、板垣退助後藤象次郎副島種臣江藤新平の四参議が、西郷派に屬して居た、けれども、此四参議が果して、征韓論を精神的に唱へたのであるか、否は疑へば疑へるが、その詮索も必要は無からう、唯だ文治派の中にも、不平を抱くものがあつて、機會さへあれば破裂しやうとの、意氣は動もすれば顯はれんとしつゝあつた、折柄に初まつたのが征韓論、西郷を擔ぎ上げて、岩倉木戸大久保の一派に當らんとした、その計畫は巧かつたが、的事と何とかは向ふから脱れる、岩倉の勢方は日に強さを加へ、今は義理にも西郷に背けぬ筈のもの迄が、岩倉派になつて、激論數日に渡つて決せず、彼是れするうちに、大勢は非征韓に傾いて來た、三條公迄が最初の誓言にも似ず、頗る曖昧の態度になる、曖昧であつた大隈が、岩倉派に奔ると、言ふやうな譯で、終に最後の閣議は大衝突、西郷は之れが爲めに辭表を捧げて去る、此に於て、騎虎の勢ひ四人の参議も、西郷への義理、表面から言へば、政治家の面目として、辭表を捧げて退閣して了つた、さア斯うなつた日には、事實に於て、西郷派の失敗に違ひない、岩倉派は思つたよりも沈着いたもので、雨降つて地堅まる新内閣の組織も、まづ滞りなく出來たその代り、島津久光のやうなチョン髭も退入れば、勝安房のやうな狸も飛び込むと言ふ始末であつた。

西郷は慨然として薩州へ歸る、跡に残つた、四参議は何とかして身の振方をつけなければならぬ、残り欲しき思ひのする内閣は、存外に鞏固な容子、この儘まに手の出せないやうでは、二度と世間へ顔向けも出來ぬ、毎日のやうに、越前堀の副島邸へ集合しては、善後策の相談にかよつたけれど格別の妙案もなく、其口く送つて居た、が併し政府に對しては、飽迄も對抗することに決した、唯だ其方法に於て苦心を仕て居るのである。

今日も例の如く四人集まつての小田原評定、所へ取次ぎのものがやつて來て『ハッ……申上げます』副島は振返つて『何ぢや、斯様の人が参りまして、お目通りを致したいと申して居りますが、如何いたしませう』差出す名刺を受取つて見ると、古澤滋小室信夫の二人である、英國から歸朝した許りの評判男、豫て四参議とは前からの交際がある、歸朝してから未だ一度も逢はないので逢ひに來たのだらう、副島が謝絶らうとするを、板垣が遮つて『マア兎に角逢つて見やう、英國歸りの面白い新説もあらう』と言ふので、面會することになつた、意外にも此會見が、民選議院の設立を建白する運動の原因になるのである。

古澤と小室の二人に就て、少し説明を仕て置きたい、古澤は土州の出生で、學問は漢學もあり洋籍にも通じ、文章杯は立派な大家である、ソレで辯舌も流暢な、所謂瘴の所へ手の届く申分なき辯舌家である、強て其欠點を言へば、金錢に眼のない、貪つて飽くとを知らぬ人であつた、一たび自由黨に身を投じたが、此欠點ある爲めに永續がせなかつた、その前に立憲政黨を去つたのも、全く之れが爲めである、成島柳北が會て朝野新聞紙上で、星亨愚而不知失財古澤滋得而貪錢と喝破したことがあつた位だ、自由黨を出てから、井上馨の配下となり、更に轉じて今は山縣系に屬して居る、前年石川縣知事になつた時、縣會で不信任決議をされて、遂に逐拂はれた、奈良縣知事に轉任すると、奈良縣會でも、そんな疵物は御免蒙ると言ふので、こりやア又面白い、人を喰つた遺方で、榮轉願と言ふ運動が起つた、それから更に不信任決議となつたので、またもや山口縣へ轉任、此處も縣會との折合が悪くて逐拂はれて、知事營業も之れで終了、それから翻譯や著述で其日を送つて居る、この人の弟で——兄とも言ふ不詳——岩神昂と言ふものがあつてこれは却々霸氣のある男で、明治十一年の陸奥宗光、大江卓、林有造等の謀叛に與して暗殺掛を受持つて、十年の禁獄に處せられたが、今は井原と姓を改めて、何でも何處かの知事をやつて居る等だ、龍頭蛇尾は此兄弟の特色か、岩神が此くの如くあつて古澤も民選議院の主唱者でありな

から、今日では却つて憲法中止論杯を擔ぎ出して、物笑ひの材料をつくつて居る、小室信夫は阿波の徳島の人で、政治界に志を得ず、去つて實業家の仲間入りをした男である、十年の西南役が罷んでから、三菱の岩崎が暴富を極める、海上の權利を壟斷する、動もすれば政府の命令でも拒まんほどの勢力これではならぬと、品川彌次郎西郷從道の二人が、専ら盡力して、三菱の頭を抑へる爲め、別に之れと匹敵す可きものをつくらうとのことで、その計畫が成立つて、新たに出來たものが、共同運輸會社であつた、小室は選ばれて、この會社の重役となつたのである、これから小室の名は、實業界へ知れ渡つて、一時は盛んに遣つたものであつたが、根據にして起つた運輸會社が豫算外の大損失で、政府の保護は續かなくなる、加之にピーオー會社の競争は起る、此に於て、民間の有力家が仲裁にはいつて來た、政府でも實は困つて居る所、岩崎も此分でゆけば折角の財産も滅茶々々になつて了うのだ、運輸會社の方でも、政府の保護が危ないとなること、何うして遣り切れるものぢやない、そこで之れが三方困難と言ふ理由で、終に仲裁が續まる、會社を合併して一つのものに爲ることになつた、今の郵船會社が即ちソレである、こんなことになつて見ると、小室は甚だ詰らぬことになつたのだ、乗出たばかりで斯くの始末、晩年の頗る振はなかつたのも、決して無理は無い、此人の弟が、文士として有名な、今は故人になつたが、案

外堂主人小室信介である、民権百家傳や、新淨瑠璃や、一時は世人の視目を引いたものである、殊に自由艶舌女文章と云ふ小説は、書生の間に傳唱されたものである、三義共同の競争の時分には、兄信夫の意を享けて、海坊主退治の相談と言へる題で、さかんに岩崎の攻撃を遺つたものだ、しかし、これも晩年が宜くなかつた、小室信夫に古澤滋、この二人のことは、先此位にしてさア之れからが愈々民選議院論の勃興になるのである。

其三

今では洋行歸りも、餘り價値は無いが、昔は大層なもので、洋行歸りと言へば兎に角、幾何かの相場は昂つたものだ、殊に明治六年頃の洋行歸り、他からも羨くするが、自らも又高く留つて却々安賣を仕なかつたものである、小室も古澤も、御多分には漏れぬハイカラ氣質、充分値賣の出来るものと、胸算丈は決定して居たが、愈々歸國して見ると、さうもゆかず、何の事情か政府は鼻の先きで遇つてさらに買ひに来やうともせぬ、洋行歸りの豪く思はれるのは難有いが今日のやうに開化して居ない、百事舊式の時代では、流石の洋行歸りも、政府を離れては仕事が無い、唯だ空しく日を送つて居る、時に初まつたのが征韓論、その成行を見て居るうちに大破裂、

西郷は歸國、四參議は副島邸へ日々の會合、此機會に巧く泳ぎ出さうと、相談の上で、二人揃ふて遣つて來たのである。

議論縱横事毎に舌端火を走らすものは板垣退助、豪放不羈にして野心満々たるは後藤象次郎、寡黙重厚長者の風あるは副島種臣、精悍氣鋭動もすれば軌を脱せんとするは江藤新平、四人集まつて、四人ながら、性質も出身の事情も異つて居るのが妙だ、維新の風雲に際會して、一躍參議の椅子を占めたかと思ふ間もなく、今度の政變で野に下つたのであるから、氣ばかり焦つて議論多く、一向相談の埒が明かぬ所へ二人の來訪は此上もない好機會である。

「やア、よく來たな」まづ口を切つたものは後藤、二人は鄭重に會釋する、古澤は「お邪魔ではないのですか」「否、別に何も無い、悠々話すが可からう」これは板垣であつた、これから酒肴が出る、さかんに議論も出れば、快談も續々ある、最も耳を傾けられたのが洋行中の失策話であつた、談話は何時か、征韓論のことに及ぶ、二人は頻りに政府の處置を非難し初めた、古澤は少し乗地になつて、今度のこととは全く先生方の失策ではない、元來政府の組織が善くないからだ、征韓論の是非は既に決して居る、國民の意向に問ふたら、無論征韓になるだらう、議論に於ても征韓の方が優つて居る、それが斯くの如き失敗に終ると言ふのは、政體そのものと罪である、國民

の意向を顧みぬから不可んだ、これが若し英國の如き政體であつたならば、決して先生方の失敗にはならぬのです。實に惜む可きことである』批評は盡きず、古澤頻りに快辯を揮ふ、江藤は「その英國の政體とは、何ういふ風になつて居るか、充分の説明を開きたいものぢや」古澤は得たり顔「君民同治すな、上に一人の天子を戴き、人民の意見から割出された内閣が其下にあるのです、人民の意見は、議院といふものがあつて、それに人民の總代が集まる、討論研究した後の多数意見が、則ち人民の意見として内閣に傳へられる、内閣は之れを以て政治の方針を定めることになつて居る、その議院のことをパリーリヤメントと言ふのです、それですから、この議院の向背に依つて、内閣が更代する小さいのを加へれば、三つも四もあるが、まづ二の大きな黨派がある、一つをリベラルバーチーと言つて、一つをコンセルバチーブと言ふのです、これが國民の意見を代表して居ることになつて居るのです、それには各自主張があつて、その主張の下に團結して居る、國民の向背に依つて、何方か政府に入つて内閣を組織するのです、それから天子は、全く政治の責任外で、内閣が全く責任を負ふのであるから、如何なる失敗があつても、天子には其責任が及ばない、實に安全な政體である、マグナカータと言ふものが出来て居て、それ等のことを取極めてあるのです、今度の征韓論が、英國で初まつたのなら、決して先生方の失敗にはならん

其四

假し失敗に仕た所で、それは國民の意見からであるから寝心がよい、また何か問題が起れば取つて代ることも出来る、我邦では左様はゆかぬ、岩倉と大久保木戸の政府ですからな』四人の膝は段々進んで来る、古澤に代つて今度は小室が説明する、談話は益々佳境にはいつて来た。

その年齢から言へば、副島が最長者で四十五、後藤が一番下の三十五、江藤が三十九の板垣が三十六、と言ふやうな譯だから豪いことは言ふやうなもの、火事場に均しい維新の際なればこそ、功名も立てられ出世も仕たが、若し泰平の世に生れたのならば、何をす間もない筈だ、殊に讀書といつた所が、漢學仕込みの頭腦から、やれ政體のそれ政治のこと、やかましいことを言つたさて、實際問題に就ての議論は出来やうが、政治學杯に履込んでの意見と來ては、とても駄目のことだ、然れば古澤や小室がまくし立ての説明の、何れほど感動を與へたかは、今日より之れを想像する位のもものではなかつたらう、此日の會談を初めとして、これからは猶ほ引續いての會合、究極が政體の改造論を以て、政府に迫まらうといふに一決した、此に於て、古澤が筆を採つて、數日の後に脱稿したものが、則ち世に名高き、民選議院設立の建白書なるものである。

今日の智識を以てすれば、何でもない平凡の議論ではあるが、その時代としては、實に堂々たる正論、侃諤の卓説として、人を敬服せしめたものである、字句の妥當ならぬ所は、副島が筆を加へて、此に一篇の建白書は出来上つた。

愈々捏出といふときになつて、署名人を四人とするのは善くないと言ふ議論が出た、それは征韓論に就ての不平參議が、忿忿漏しの仕事と見られては、折角の苦心も水の泡になるから、誰れか加へやうと言ふことになつて、古澤小室その他に、岡本健三郎を加へることになつた、土佐出身の人で、役人もやつたが不平で罷めて、外國人對手の仕事をやつて居た男である、斯うなると又怒が出て来て、現に役人を仕て居るものを加へたくなる、段々相談の結果、由利公正が善からうとなつた、東京府知事の肩書のあるものが連署すれば、それを面白い、と言ふので遂々由利を説きつけて、之れをも加へることになつて、建白書は其筋へ捏出されたのである。

由利公正とは如何なる人か、越前の松平春嶽の家臣で、三岡八郎と言つた人が、則ち由利公正である、愈々討幕軍を江戸に下すことになつて、諸般の準備は出来たが、一番大切な金に差問へて、何しろ新政府のことで、奈何することも出来ない、東海道の征討軍支けは、西郷が三井を説きつけて何うか斯うか出發することには仕たが、その跡の始末は、何ともすることが出来ない

其處で、三岡が一時の苦策で、京坂の豪商を御所へ呼つけて、冥加金を出させることに仕た、本人の財産に應じて、それ／＼割頭けたのだから、豪商の驚きは普通でない、三岡は勤王論の一點張りで、怒鳴りつけて纏りはつけた、その後、さらに建築して、太政官の金札なるものを發行して、政府の財政の基礎を曲りなりにもせよつて了つた、その功勞といふものは、實に第一に推す可き筈であつたのを、出身が越前であつた爲めに、思ふたほどの論功行賞にも與らず、僅に東京府知事と言つたやうな譯で、心中頗る不平で居た、所へ四人からの誘引があつたから、一も二もなく同意したのである。

さて、建白書を出した跡で、此反響が何んな風に現はれて来るか、唯だ、そればかりを見て居る、然るに、更に何等の反響もない、政府では建白書を受取つた限り、世間からは勿論反響はない、發表を仕ないのだから、これは反響のないのは當然だ、さア斯うなると、胸の火は一付に燃へて、その煩悶は容易でない、此處しばらくは睨み合ひの状態である、

一日のこと、板垣邸へ一人の使者が來た、それは木戸孝允からの使者で、板垣が面會すること、差出されたのが木戸の書面、開いて見ると、是非一夕會談したいから、その趣きで板垣の都合を問合せの文意である、さては建白書の一條だなど、板垣も察したので、明日を約して木戸邸へ訪

問する旨を答へて使者を歸した。

其五

(42)

板垣退助に就て少し述べて置かう、一時は民権自由の神様と迄持囃された板垣も、今では殆んど、其生存さへ認められぬほどに沈衰して了つて、社會の輕薄なる爲めか將た自身の不徳なるがゆゑか、それは暫らく別問題として、愈々國會を開設した迄の功勞に至つては、決して何人も板垣に及ぶものゝあらう筈は無い、人間萬事金の世の中、板垣は金の無かつたのが價値ではあつたが一面から言へば、金の無い爲めに、全く事志と違ふて、果は今日の境遇となつたのである、政治家に金は要らぬと言ふが、或程度まで必要なものは又金である、大隈が榮へて板垣が衰へたのは、金の有無が之れを然らしめたのである、その代りに、大隈は常に金のことに就て、世の非難を受けるが、板垣は一向に左様いふことは無い、あれば借金で訴へられる位のもので、貧乏に甘んずる次第でもなからうが、何うも此人にはかりは貧乏神が絶え纏うやうだ、併し、その貧乏が苦になるかならぬか、いつも元氣で議論して居る所は、流石に板垣であると思ふ、此項の貧乏は殆んど極度に達して、時に其日のことに差向へることがあるけれども、矢張り金持の嫌うやうな

(43)

議論ばかり仕て居る、昨年の春、發表した華族一代制論に就て、常人に出來ぬ感服な語がある、元來が華族廢止論であつたが、自身が假令強られたにもせよ、華族になつて了つたので、主張の上には頗る困難を感じた、殊に段々の經驗から、一時に廢止論を唱へるのは、却て事を至難しくする所以であると覺つて、せめては一代論から遣りつけてゆかうと、數年前から考案を凝らし、此に初めて發表する運びにしたのである、所が何うしても、其費用が出來ない、費用と言つた所で、大したことはないのだ、華族その他の人々へ送る可き、一代制論の印刷物をつくる、その費用二百圓許の金が、何うしても出來ないのだ、取立てに骨の折れる所から、五十圓位の金でも容易に貸し人がない、板垣は無頼着に執事に金策を命じる、出來ぬと怒る、板垣が借るといふに貸さんものがあるか杯、いふて怒ることもある、けれども貸人はない、これには板垣も閉口して居た、所へ、話に來たのが、茨城縣の代議士根本正といふ人である、話が此ことに及ぶと、根本が元來アメリカ仕込みの、平民主義と來て居るから、こりやア面白い、先生が自身に先づ一代制を實行してかゝらうといふ、これほど立派なことはない、宜しい其金は私が寄附しやうと、直に二百圓を差出した、さア板垣は嬉れしくて堪まらない、早速着手した、驚いたのは執事で、實は金の出來ないのを僥倖として居たのだ、こんな意見を發表すると、銅像の寄附金の集り方に影響

する、銅像は其年の暮に出来る筈であるから、それから後のことに仕たいと思つて居たのである、所が根本の爲めに、コンナことになつて了つたのだ、尤も、或人が板垣に對して、銅像の寄附金に關係するからと言ふて、意見發表の延期を勸告すると、板垣の答へが斯うである、銅像は萬一出来なくても、それは板垣の主張に何等の關係も有たぬ、併し此議論を發表せぬと、己れも七十ちやから、いつ死ぬか解らぬ、板垣が華族になつて、嘗て唱へた四民同等論が、同時に眼を眠つたと言はれては、昔の同志に對して、誠に相濟まぬ次第である、一代制論は廢止論を去ること頗る遠しであるが、まづ目的に向つて一步を進めるのであるから、黙して死するのには憚ると言ふのであつた、何處までも正直な人で、今のやうな、虚偽を以て人間の正道の如く心得て居る世の中には稀れに見るの潔士である、然るに、此意見を發表したが、更に反響が無かつた、谷干城が天下無比の愚論を以て、喧嘩をふきかけた外には格別のこともなく、煙の散するが如くに消へて了つた金のない人の主張は、如何なる名論卓説も、今の世には容れられぬと見へる、情けないのである。さて、これからは板垣の出身を略説して見やう、國會開設最初の主張者に對しては、此券を省く譯にゆかぬ。

其六

天文十六年の八月、信州上田原の戦闘に討死した、板垣駿河守信形は、甲州武田家廿四將の一人で、世に名高き武將であつた然るに、此戦死は事精あつて、自ら求めたのであるから、前夜に於て、死後とは悉皆處分した、愈々戦死の當日となつてから北原羽左衛門、都築久太夫の二人が、駿河守の一子正信を擁して、戦地を遁れ國を離れて、遙々と遠州掛川にやつて來た、掛川の城主が、山内對馬守一豊と言つて、所領は三萬餘石である、其家臣に乾備後と言ふのがあつた、それが、駿河守と舊交のある間柄、即ち之れを頼つて來たのである、備後も駿河守の最期を聞いて、快く正信を引取つて呉れた、彼是れするうちに星霜は經つて、山内は土佐國高知の城主に轉封する、今迄の貧乏大名とは違つて、廿五萬石の大身となつて、此時には、正信既に乾の姓を留して、乾正信と名乗つて居た、一豊私に之れを聞いて、千二百石を與へるとなる此に於て、正信は全く山内家の臣となつて了つたのである、所が、此正信に嗣子が無い、藩の作法として家祿を減じて三百石となした、然れども、名家の末裔の徒らに絶へんを受へて、一豊は自分の從弟に當る山内刑部一照の二男正行と言ふものを、乾の相續人として、正信亡き後には、その家を継が

せることにした、正信から十代目、乾猪之助、これが板垣退助である、去れば板垣の祖先は、駿河守としてあるが、實は正信に至つて、山内家の血を以て、家を建てたのだから、板垣は山内の一族と言ふも苦しからないのである、慶應四年に討幕軍を率ひ、錦旗を預つて、木曾路から甲府へ抜ける時、人心を鎮撫する上からも必要であり、旁々祖先の姓に復して、此に板垣退助正形と名乗つたのである、これが、板垣の家についての略歴である、詳しいことは何れとして、今は之れだけにして置く。

却説、板垣は木戸の案内に依つて、濱町の邸へ木戸を訪ふた、木戸は豫ての約束でもあり、待ちかねて居る容子「やア……御足勞で相濟ん」しばらくちやつたネ「當方から、お訪ねせんければならんのちやが實は御出を願ふた方が都合でな」イヤ……我輩も此方が勝手ちやよ」挨拶は之れで済む、準備の酒肴が運ばれる、談話は段々佳境に入る、木戸は膝を進めて「頃日提出れた建白書の一條ちやが、拙者も實は、アレでなければ不可んと思つて、洋行の節に、ふかく感じたのちや、伊藤に申付けて、之れだけは充分に調査してある、朝朝の後も猶ほ取調べて居る位ちや足下等より建白書が出たので、さては、一本まいられた哩と、心私かに感じたのちや、英吉利の文は悉皆しらべ上げてある、都合によつては参考の爲めに貸してもよい、足下が誠心彼の建白

書の通りやつてゆかうと、言ふなら、拙者も大に同意する譯ちやが、まア、それについて一度逢ふて見たいと思ふて、お出でを願ふたのちや」意外なる木戸の話に、板垣も心の内で「ア、矢張り木戸は木戸丈けに深い所がある、流石に洋行中、はやくも此點に着目したのは感服だ、こりやア善い伴侶が出来た、この男を逃しちや駄目だ、うまく聯合してやりつけやう」とはやくも決心して「それは意外のことちやつた、貴公が、それ迄に進んだ考を以て、實地の調査をやつて居られやうとは思はなんだ、しかし、他の人は何うちやらうか、大久保や岩倉は「さア……其處ちや」

其七

木戸と大久保とは、自然立脚の方面が、同一である爲めに、所謂、兩雄並び立たずで、いつとは無しに、感情の衝突が起る、殊に洋行以來の兩者は、殆んど、或處に於ては、敵同士の如き觀があつた、理性の非常に發達した、而かも謹嚴にして寧ろ狹隘なるが如き大久保と、感情の強い常識に富だ馴れ易くして飽性なる木戸と、この甚太しき性質の齟齬せる兩者の、亭閣の上で、いつ迄か並んでゆけ可き筈が無い、岩倉大使の隨行員として、歐羅巴へ廻つた時、頻りに木戸は歸

朝を促される、それが、折悪くも大久保の米國から中歸りに、歸つて又やつて来た後のごとて、木戸は疾くも、何か大久保の策にてもあるらしく感ずる、その他に、もう一つの事情は、乾兒の伊藤俊介が、何時か大久保に取入つて、木戸に疎ましくなつて来た、俊介に言はせれば、理窟もあらう事情もあらう、しかし、假令何んなことがあるにしても、俊介が木戸に背く杯のことが、ある可き等のものでない、俊介の出身が、元來卑しいので、昔は士分の交際が出来なかつたものだが桂小五郎家來俊介と書ッばなしで、伊藤と云ふ姓さへも書かれなかつた、これが桂の引立てで、士分の交際も出来る、自分に才氣もあつた所から、漸々賣出しもすれば、出世もしたのである、然るに、眼先の見へる男だから、木戸よりは、大久保の方が、何うも大成しさうに思はれる、政治家としては、大久保の方が其器である、見抜いた所から、動もすると、木戸の命に背くやうになつた、木戸も疝癪まされに、飢突を喰はすことがある米國行の船中で、終に大破裂して、俊介は全然木戸の手を離れて了つた、自然の勢ひ大久保の腰にぶら下ることになつた、人もあらうに、大久保の配下になることは、木戸の忿怒は愈々はげしくなつて、歸朝の時分には、大久保木戸は、最早調和の見込なき迄に、感情は衝突して了つたのである、ソレに、木戸は常識に富んで居る丈、進歩的思想が、絶へず政府の改革を促がして居る、大久保は之に反して、保守的の頭腦が

堅いから、仕事が何うしても遅々として進まぬ、これも又木戸と常に衝突する一つである、併し大久保は、政務の實權を握つて、西郷の退職した後は、殆んど大久保の政府なるが如き傾向があつて、木戸の感觸は益々悪くなるばかりであつた、その代り民選議院に關する調査は、之れが爲めに却て存外進むやうな譯で、折柄建白書が出て来た、木戸は單り微笑んで、さてこそ板垣を迎ふる迄の決心になつたのである。

「實は臺閣でも、此建白に就て、却々激論があつたのぢや、大久保は例の大事取りでな、岩倉も足下の知る通り、畢竟が、公卿の利口者、到底天下の事を談するに足らん其所でぢや、足下等から建白の出たのを僥倖に、調査をすることに仕たが、こんなことには、少才の働いた俊介が、一向不可んのぢや、しかし、そりや何うでもよい、唯だ足下等が、果して誠心之れを唱へるのか一時の不平に驅られて、政府を苦めるに過ぎんのか、その邊の心が解らんから、兎に角、足下に逢ふての上で、いづれとも決定しやうと思ふが、遠慮のない所を話して貰ひたいのぢや」板垣は木戸の話を聞いて、實に意外の思ひを仕た、臺閣の内部、而かも首腦ともある可き部分に、之れ迄の暗朝が激闘して居やうとは思はなかつた、木戸の一言一句、すべて皮肉に、大久保等を痛罵して居る、語氣の上から察するも、頗る面白いことである「イヤ、話は能く解つた我輩等の誠心は

彼の建白書にある通りぢや、天下國家の爲めに、眞に之れで無ければと言ふので、提出した理由なのぢやから尊公がソレで進まうと言ふなら、俱にやつて見たいと思ふ』よし、それぢや一途に進まう、しかし、この秘密は勿論守つて貰はんきやならん、が、もう一つは、この建白書を署名者の外へ漏されては困るのぢやそれが約束出来やうか。』

其 八

板垣は思はず膝を進めて『そりやア、秘密に仕て出来んことはないが、何も左様秘密にするとはなからうぢやないか』イヤ、その理由があるのぢや『如何いふ理由かな』徳川政府を倒してから未だ年所を経て居らぬ、頑冥不靈の徒が、臻る所に出没して、動もすれば事を起さんとして居る、彼等の沈黙して居るのは、唯だ機會を窺ふて居るので、若し此建白のことを聞けば、直に之れに乗じて来るに違ひない、左様なれば、不平の徒が一時に蜂起して来る、これは大に注意せんきやならんことぢや、それに、尋問の方でも、未だ却々保守的思想のものが多から、今俄かに之れを唱へた所で、容易に行れさうにも無い、持つて行きやうに依つては、却つて害を爲すかも知れない、第一に大久保が至難しいのぢや、悉皆臍立を仕てからでなければ、迂濶發言すこ

とは出来んのぢや、併し、秘密さへ守つて呉れば、必ず遣つて見せるが、如何ぢや足下の見込では『そりやア、守るも守らんもない、左様なことなら無論秘密にするが、何うぢやらう、そんなことで纏まりがつくであらうか』何とか纏まりはつくるが、秘密だけは是非守つて貰ひたひ』『よろしい、その點だけは引受けやう』これで相談は決した、跡は酒宴にうつる、充分の歡を盡して板垣は歸途についた。

途中も、板垣は獨りニコ／＼もので、何だか最早民選議院の出来たやうな気が仕て愉快で堪まらぬ、が、木戸の話の跡を辿りながら、段々考へて見ると、木戸位に進んだ思想を有つて居るのですら、未だ彼のやうに、頑固ないことを言ふて居る、民選議院を興さうとするのに、秘密も何もあつたものぢやない、宜しく進んで天下に同志を求む可きである、大久保にしてからが、まさか天下の公論となつた上は、無下に反對もなるまい、殊に今日となつては、最早佐幕派も勤王派もない、況て藩閥の手ばかりで、政府は抑ゆ可きものでない、民選議院論が即ちソレである、然るに、木戸の頭腦は、今日の話に依ると、矢張り、内部の軋轢や、勢力の争いから、流石の木戸も、堪まり兼ねての民選議院論、これぢや面白くないが、しかし、木戸と結んで、大久保岩倉に對抗するのの一策である、斯う考へて歸つて来た。

「エー、ちよつと申し上げます『何ぢや』最前から此御方が来訪になりました、お待ち受けて御座います』執事の差出した名刺を探つて見ると、英人ブラックである、『フーム、餘程待つて居るのか』御不在の由を申しました所、それでは歸邸まで待つと申しますので、おまたせして置きました、板垣は暫時考へて『よし、今逢ふから』衣服を改めて客室へ来る、待ち兼ねて居たブラックは『オー、板垣さん』立上つて手を握る『おまたせして失禮でした』私し、アナタ歸りますと澤山まつありました『何か用事ですか』少しばかり、アナタ聞きたいとありました、話いたしました時間ありますか』時間あります、話して下さい』アナタ政府へ建白しましたか』ハア』それ、パーリヤメント開くとありますか』これには板垣も驚いた、もう知れたのか、機敏なものである、と深く感じて『左様あります、パーリヤメント開くとこの建白しました』政府まだ許しませんか、これ至難しいとありませう』イヤ、至難しいとありません、キット出来ませう』たしか出来ませう、アナタ保證しますか』保證します』それよろしい、まことよろしいとあります、その建白します、書面見るとよろしいありますか』板垣も之れにはチョット行詰つた。

其九

其頃には、もう新聞雑誌が、大分流行出して来た、横濱毎日、曙、日眞新事誌、東京日々、郵便報知、公文通誌、朝野、明六等のものが、サカンに印刷頒布されて、少しく文字あるものは、皆な見て居たものである、勿論今日の如く、ひろく一般には行はれなかつた、従つて印刷部數の如きも、少きは二三百、多きも千部位の所であつた、明六雑誌は、學者の機關で、執筆者は森有禮西周杉亨二神田孝平津田眞道西村茂樹福澤諭吉等の連中であつた、東京日々は福地源一郎岸田吟香の二人が、専ら書いて居た、報知は栗本勉庵、毎日朝野は一段下つては居たが、相當の勢力はあつたものだ、板垣を訪問した英人ブラックは、日眞新事誌を發行して居たのである、此人の伴の一人は、落語家になつたブラック、他の一人は、今現に下之關市の、サミユール商會の支配人をやつて居る、親子ではあるが、働く方面が餘りに違つて居るので、親のブラックのことは、殆んど世間から忘れられて了つた、けれども、此男が民権家に與へた利益は、却々多大なものであつた。

ブラックが是非見せて貰ひたいといふ、その建白書は、木戸と約束して、他のものには示さぬことになつて居る、板垣も之れには少し閉口した』どうも、それは少し困ります』見せられませんか』ハア』何故ありますか、何故見せませんか』他の人には見せないことになつて居ます』ハ

「ア、見せられません」ブラックは小首を傾けた「秘密のことありますか、パーリヤメントの建
 白秘密のことあります、パーリヤメント秘密開きますこと、世間にあります、ただ日本ばかり
 アツハ、、、痛罵冷嘲、板垣は胸を抉られるやうな心地、民選議院が秘密で出来る筈がない
 建白書は秘密にするが、何も民選議院迄が秘密だとは言はぬ、それを斯う皮肉に出られては、板
 垣も堪まらない「板垣さん、アナタ日本の政治家あります、最も公平の政治家あります、パーリ
 ヤメント開きますこと、誠によろしいことあります、その建白秘密にしますことよろしくありま
 せん、澤山人に見せます、それ丈け味方出来ず、見せません、ソレ丈け味方出来ません、今の
 政府、もしパーリヤメント開きませんことあります時、人に見せません、見ます人喜びますか、秘
 密々々見せます、見ます人秘密々々します、味方殖へます、ソレ何故いけませんか」ブラックは
 諄々として説くのである、言ふ迄もない、板垣の心も又そこにあるのである、私に考へた、木戸
 とは約束したが、何も天下に公表する次第ではなし、一人一個の眼に映じたからって、何も差障
 へはあるまい、木戸が彼のやうに受合つた所で、それが果して行はれるか如何か、ブラックの言
 ふ如く、必ず信する譯にはゆかぬ、これが日本人と言ふではなし、英人であつて見れば、政府に
 對して野心もある譯でもない、寧ろ見せてやらうか、と板垣の心は動いて来た、ブラックは愈々

快辨を揮つて説付ける、板垣も終に覺悟して「よろしい、見せませう」立つて次の室へ入る、や
 がて持つて来たのが建白書である「他の人には見せられません、アナタ丈けあります、よろしい
 か」よろしい、難有う」開けて見たが分らない、語學は立派にやるが、日本の文章まで讀切れる力
 はない、ブラックは頗る恐縮の體、英吉利の文字かきましたのありませんか「ありません」よろ
 しい、私し英文に翻譯いたします、今晚丈け借りてゆきます、いけませんか「板垣は喜んで「英
 文に翻譯しましたのを、私の方にも一冊もらいたい、それよろしいか」よろしい「それなら、た
 もちなさい」ありがたう」ブラックは匆々に立上つて、板垣の手を握る「サンキュー……グッド
 バイ」さアこれが飛んだ間違になるのである。

其十

ブラックに別れてから三四日経つと、木戸から書面が来た、開いて見ると、非常に憤激した文
 意で、足下の如き虚偽の人とは一致が出来ぬ、足下が民選議院論を唱へるのは、誠心之れを唱へ
 るのでなく、この主張を犠牲にして、現政府を根本から破壊せんとするものである、それなら、
 それで宜いから、正面より堂々と論陣を張つて来るがよい、然るに、足下の道方は、陰險卑劣で

ある、到底君子人の齒す可きものでない、過日約束したことは、一切御免蒙る、足下は足下、拙者は拙者、各自欲する所に依つて進まうと言ふのであつた、何の爲めに斯くの如きことを言ふて来たのか、それは少しも解らぬ、けれども皮肉の文句を列べて、随分無禮のことが言ふてある、元來感情のつよい板垣のことであるから、嚇つと怒つた、固より其事情を確かめてから杯いふ、そんな迂廻いとはして居ない、直に返書を認めて木戸に送つた、申越のとは委細承知、何等の事情があつてのことか知らぬが、過日會合の際の語氣に依つて、豫め今日あるとは覺悟の上である、民選議院は足下の力に待たずとも、必ず開いて見せる、薩長藩閥の因縁今の如く、ふかく足下の臆にまで泌込んだ上は、却々公議輿論を精神とする、民選議院杯に同意の出来る筈はない、これからは、些しも假借せず、ドシ／＼やツつけるから、そのお覺悟あつて然る可し、とやツつけたのである、木戸は之れを讀むで、益々怒ると言ふやうな理由で、終に二人の間は、收拾するとの出来ぬほどに迄、大破裂を仕て了つた、折角に進まんとした大事も、此に於て、一たびはうたかたの水の泡となつたのである。

後日になつて見れば、木戸の怒るのも滿更無理ではなかつた、しかし、事情を言はずに、頭ごなしに叱りつけられて見れば、板垣にしても怒るのは當然である、若し二人が處を抑へて、會見

したならば、或は直に疑は解けて、一層面白い運がついたかも知れぬ、さうならなかつたのは、何うも残念ではあつたが、當時の二人の境遇から見れば、まア斯ふなるのが自然であつたらう、木戸は世間から見ても、誠に結構な身分でもあり、政府でも重き位地には居つたが、同盟の折合悪しく、殊に大久保岩倉との關係が、非常に窮窶になつて、自己の意見は多く行はれない、西郷等を逐出したばかりで、まさか自分が飛出すともならず、鬱々として日を送る、此境遇になれば、誰れにしても、神経ばかり昂ぶつて、邪推がふかくなり、氣も短くなる、従つて物事に念を押すと云ふとが少くなる、情を制する力に欠けて來るので、斯ういふ間違も出来るのだ、板垣に至つては猶更のこと、木戸から比ぶれば一層不遇で居る所から、疝癢も激しいのである、後日から見れば子供のやうであるが、人傑といふものは、動もすると子供染た所のあるものだ。

板垣から建白書を借りて返つたブラックは、固より之れを秘密にする考なものであるのではないから、直に日眞新事誌の上に出して了つた、木戸は之れを見て怒つたのである、板垣は之れを知らないから、木戸の無禮を怒つたのである、面白いぢやないか、むかッ腹立ちが二人寄つての、怒り比べは實に面白いことであつた、然るに、之れが爲めに、建白書のことが全國へ知れ渡つた、之れを讀んで多少理解し得るものは、文字もあれば、理窟も言ふものであるから、日を逐ふて、板垣の所

へ同意の通知をするものもあれば種々のことを照会して来るものもある、この時は、板垣も新事誌のことを、既に知つた時であつて、今更ら、木戸との關係の至難しいことを覺悟した時であるから、却つて全國に同志の存外多くなつたことを喜んで、機會を見て大に遊説を試みようと、心ひそかに期して居たのである。所が岩倉赤坂喰違の遭難から、愈よ政府との感情が齟齬して仕舞つたのは返へすゝも残念な次第であつた。



岩倉赤坂喰違の遭難

其 一

木戸と板垣の衝突から、折角に進みかけた、民選議院の設立も、一時沙汰止みの姿となつた、然れども、之れが爲めに、民選議院とは如何なるものであるか、と言ふ研究が始まつた、洋書を解する人々は、さかんに會合を催して、その説明やら鼓吹やらで忙しくなつて來た、新聞雑誌の上でも、頻りに此事の消息を掲載すると、言ふやうな譯で、政治思想の勃興は之れからである、民権とか自由とか、權利とか義務とか、新しい文字の世に出かけたのも、之れと同時にである、左れば、民選議院のことこそ、全く手違ひとはなつたが、封建時代より養はれて、自卑自屈の精神が、稍や一變したのも事實であつた、今から考へれば、随分幼稚な理屈を捏ては居たのだが、併し、精神的に唱へられたので、その反響は意外に力あるものであつた、東京府下の實業家までが、この事に注意を拂ふやうになつて、學者を招いで、其講義を聞くといふやうな有様で、或時、府知事の久保一翁を招待して、宴會を開いたことがあつた、その時、一人の實業家が、民選議院に就ての見込を聞くと、一翁立ち上り筆を採つて『時経なば、雪間ながらも咲出ん、民の心の

花に霜哉』と認めて渡した、まア斯ういふ風潮ではあつたのだ。

然るに、此時分から不慮の風説が、頻りに傳播せられて、一時は閣臣も、非常に恐怖心を起して、護衛をつけるやら、夜間の外出を止めるやら、戦慄もので居たが、そのうちに、段々風説も薄らいで来て、警戒もゆるくなつて、油断大敵、この間に乘じて、いつしか暗殺の陰謀は、着々其歩を進めつゝあつた。

如何なる場合と雖、暗殺は結構などとは、決して言へる筈がない、けれども、暗殺の伴はぬ歴史は、那邊の國にもないであらう、されば、暗殺の否認されるのは、ホンの表面のことで、その實は、口で言ふほど悪いとではないと見へる、既に頃日も、來島恒喜を殉難志士のうちに加たいて、史談會から被害者の大隈重信に承知を求めたといふ奇談もある、井伊大老を櫻田門外に要撃した、水戸浪士は贈位の御沙汰へ蒙つたではないか、之れから考へて見ると、暗殺の悪いと言ふことは、唯だ其一代丈けのことで、矢張り、必要に驅られて當然起る可き、社會現象の一つと見て、敢て異むには足らぬことと思ふ、或暗殺の行はれた結果として、其社會が果して幾何の利益を得たか、將た害を受けたかといふことは、自から別問題である、従つて、暗殺にも至當に不當の別は生じて來るであらう、國と國との間に、戦鬪の絶滅せざる限りは、個人の殺傷

沙汰も、左様酷くは咎められまい。

征韓論の大破裂から、征韓派の爲めに睨まれた閣臣のうちで、岩倉右大臣ほど、奸佞邪智の曲者として、殆んど憎忌の燒點に立つたものは他にないのである、勿論、征韓論を打破つて、西郷等を幕閣から驅逐したのは、岩倉具視であるから、その憎忌の、彼れ一身に集まるは、自然の數で止むを得ない、また、岩倉自身に於ても、それ丈けの覺悟はあつたに違ひない、奸物岩倉を居れ、どの叫びは榮る所に擧つて居る、他の閣臣からも、注意は屢ばあつたのだが、元來、傲岸不屈の彼として、他の心配するほどでもなく、護衛の如きも、最初から連れず、單行きを仕て居たのである、兎に角、悉らい所はあつたに違ひない。

其二

岩倉具視は公卿出身に似合はず、非常に精力のさかんな、機變の才ある、傲岸不屈にして、勇氣の満々たる人であつて、長袖者流といつて、公卿は劈頭から、弱いものとして輕視つけられたものであるが、彼れに限つては、決して左様でなかつた、一度は佐幕派に與した咎を受けて、官位を解かれて、岩倉村に閑居の身の上となる、同時に迫害は、四方から起つて來た、けれども、

彼れは一向平氣なもので、敢て其罪を謝さんともせず、格別痛痒の感じがないやうであつた、然るに、勤王派の勢力は、日を逐ふて旺んになつて来る、それを餘所に見て、今は閑居の身の、寧ろそ氣散じな暮しを仕て居る、或時、庭内を散歩して居ると、垣根越に何か投げ込んだものがある、彼れの肩に當つて、ばつたり地上に落ちる、徐かに顧ると、何か襦袢に包んだもので、近付いて拾ひ取り、上から探ると、柔かい細長いものだ、中を開けて見ると、意外千萬、生血の滴る人間の片腕、大抵なものなら、キヤーとかスーとか言ふのだが、そこが岩倉、更に平氣なもので、人知れず密と、庭の隅へ埋めて了つた、こんなことは毎度のことであるが、人にも語らず、自分丈けで承知して平然して居る、そのくせ別に警戒もせなかつたのは、流石であると思ふ、かくて、歲月流るゝが如く、慶應の末年になつて、薩長の聯合が成立し、形勢全く一變して、慶喜は其機を罷められ、一たん大阪城へ退いたが、幕臣の憤激容易ならず、大兵を率ひて再び京都に入らんとし、朝野騒然として懼れを抱くといふ次第で、到底普通の公卿では相談にならぬ、此に於てか、岩倉を復職せしめて、この衝に當らしめんとの議が起つた、多少の異論もあつたらうが、終に復職といふことに決した、尤も、その前から勤王派のうちで、ひそかに彼れを往復して居たものがあつて、これが頻りに復職に盡力したので、奏効も自然はやかつたのである。

歴史で見ると、討幕の密勅が、まことに平易く述べられたやうに書いてあるが、その實は却て至難かしかつたのだ、第一に其密勅の、お取次をするものがないのである、衰へては居たが、未だ幕府の勢力も侮ることは出来ない、殊に大阪城内には、三萬餘人の大兵あり、薩長の聯合甚だ堅しといへ、兵數からいへば幾かに三千、討幕の密勅杯を取次いで、萬一敗けても仕た目には、それこそ一大事と、兎角逡巡して手を出すものがない、巡り巡つて岩倉の手に渡ることになつた、閑居幾年、一步も岩倉村を出なかつたが、大勢の傾向位は看破する力がある、成敗は計り得ずとも、機は既に熟して居ると、はやくも確信して、この取次ぎの大役を果した、大久保市藏廣澤兵介等が、授けられた密勅は即ち之れである、劔の刃渡りにも均しい、この猛斷は、彼にして初めて爲し得るのである。

征韓論に對しては、表面に於てこそ、内治派と稱し、内治外征の比較杯に、世の耳目を引つて居たが、實は武勳派をして、此上に猶ほ外征の誇を得せしめたならば、それこそ、由々しき一大事である、西郷一派の勢力を阻止へて置かない時は、將來恐る可きものがあると信じて、終に西郷等をして、退職の止むなきに至る迄せめて、征韓論を、ぶつ潰して了つたのである、それについて、大久保の力の與かつて大なりしは勿論であるが、岩倉にしてなかりせば、決してあ

の成功は見られなかつたであらう、左れば征韓派の憤怨は、最も多く岩倉の一身に注がれたのである、奸物具視を驚さずんば以て瞑す可からず、と腕を撫つて、半夜ひそかに劔を磨ぐものもあつた。

其三

西郷等の退閣後は、政治の實權、今は全く岩倉と大久保の手に歸して了つた、一切の仕事は、此二人から割出されてゆくのである。

時に、明治七年の十一月十五日、この日は、常例の御用を終つてから、御陪食の御沙汰が下つた、これは始終あることで、この御陪食中に、無禮を許すの御沙汰がある、浮世の雑談が始まる、畏れ多くも

聖上に於かせられては、この雑談の中に、世間のことを知らしめられるのである、また、下情に通せらるゝこと、御歴代中に於て、當今の 聖上ほどの御方は、多く在らせられぬこのことである、されば、時としては非常の皮肉を仰せられて、左右のものが恐縮することもあり、と漏れ承まはる、それについて、斯ういふことがあつた。

或時、宮中に夜會があつた、食卓についた連中は、皆な一代の名門ばかり、無禮講のこととて、奇談珍説湧くが如きのうちに、各自へ 金盃を賜はるることになつて、金盃は 聖上の玉手から順次に、臣下へ巡る、勿論御酒下されである、巡ぐり巡つて終に、御前の盃臺にたままるのだ、蜂須賀侯の前に、金盃が巡つて来た、湛々と受けて、グーツと呑み乾して、次へ巡す可きを、何と思つてか懐中へ入れやうとする、一同の視線は之れに注ぐ、蜂須賀侯は平然したもので「金盃頂戴と申す上は、持ち歸るが至當ぢやらう、これは遠慮なく頂戴いたします」大に洒落たつもりで、理窟落のしやれをやつた、笑聲は彼處此處から湧くやうに起つた、遙に御覽遊ばした 聖上に於かせられては、龍顏殊に麗はしく、左右を顧みたまいて「あれ見よ、蜂須賀が彼のやうのことを仕居るぞ、流石お家柄ぢやのう」之れを承はつて、一同思はず顔を見合はせる、蜂須賀侯は、面色を變へて、金盃の處置に窮する、イヤモツ散々の體で引下つた、流石お家柄とは、頻る振つたぢやないか、矢矧橋の一件を御存じで在らせられるのは恐縮の至りである。

却説、岩倉は御陪食も相済み、暫時休息の後、宮中を退りて、馬車に乗つたのが、もう點燈の頃、馬を急がせて通りかゝつたのが赤坂見附俗に云ふ喰違である、この頃では一切取拂つて、道路もひろくなつて了つたから、見當もつかないが、その時分には、人呼んで、首纏りの松とい

ふのがあつた、何故こんな不祥な名がついたかといふに、年の暮れになつて、金の工面には盡き果て、家へ歸れば餅も掲げない、妻子にはせがまれ、借金取りには怒鳴られる、ア、つまらないなア、とボンヤリ此松の下へ来る、往來へズツと出て居る大きな枝に眼がつくと、何となく死にたくなつて、ツイふら〜と首を縊つて了う、こんなのが一年に幾人あるか解らない、そこで、之れを首縊りの松と言ふのである。

此處まで、岩倉の馬車は遣つて來た、最前より土堤の蔭に隠れ待つ、人影の七つ八つ、各自長い刀を携へて、身軽の扮装、聲をひそめ、呼吸をこらへて、待つ所へ、馭者の太郎が、打つ鞭音のシューツ〜と、寂蕪を破つて開ゆる『それツ』と何者か、合圖の一聲、バラ〜とかけ出る曲者、夜間に閃めく刃の電光……。

其四

當初、征韓論の起つた時、西郷等の覺悟は、無論出兵のことと決定て了つた、其所で、池上四郎を北清地方に使はし、地理を實地に視察せしむることになつた、四郎の父は醫を業とする人で、四郎に謀らすして其嫁を迎へることを決し、約束が成立つてから、之れを四郎に告げた、四郎は黙

して父の前を退き、直に走せて、嫁の實家河野某方に行つて談判に及んだ、父は何ういふ約束を仕たかは知らないが、本人の拙者は、甚だ不満である、これから大に修業して、世の中に出るつもりだから、貰ふにしても、それからのことである、今日の所は、まづ謝絶申す、といふのであつた、河野と云ふ人も、却々分別つた人で、これを承知したといふ話がある、ちよつと青年の書生には出来ないことだ、西郷の信用厚く、維新の戦功もあつて、終に少佐に迄なつた人である、板垣は西郷から聞いて、池上の北清行を知つた、此に於て、土州からも一人遣りたいと云ふとを申込む、武市熊吉か其選に當つた、話が段々進んで來て、朝鮮は別の人に視察させるとになる、桐野利秋の従弟兄に當る別府晋介が、其方を引受けることに決した、明治十年の役、西郷が岩崎谷に於て、官軍の銃丸に中つた時、終に起つ可からざるを悟り、別府に命じて、己れの首を割せたといふ、熊本城を圍んだ時の詩に『植木嶮田原坂壘、崎嶇百戰草皆殷、義師東定中原後、踏破朝鮮山又山』といふのがある、土州からは別に北村長兵衛を、別府に同行せしむることにした、長兵衛は後に重頼と稱して、陸軍部内では評判の男になる、この四人が、二手に別れて、北清と朝鮮の事情を、調査して歸つて來た時は、恰も征韓論の破れて、西郷以下五參議辭職の際であつた、何の爲めに、視察に行つたのか、徒勞きになつて了つた、四人の遺憾は、他の人より

も一層はげしかつたのは、決して無理では無い。

武市熊吉は剛腸義烈の武士である、後進であつたが、七州出身の武士の中では、屈指の人物、板垣は嘗て武市を評して、満身すべて是れ膽、とは熊吉の謂である。迄、激賞した位である、しかし、粗豪自ら任じて徒らに強きを誇る底の、皮相的の剛者ではない、明治元年に泉州境浦で、佛國人を殺害した部下の罪を、一身に引受けて、妙國寺で切腹の際、立會の佛公使代理に、自分の腸を引裂つて、ぶつつけたといふ、箕浦猪之吉と比られたほどの人物であつた、この熊吉が、朝鮮から歸朝つて、征韓論の破れたことを聞いた時の、憤怒は實に甚太かつた、征韓之義に不及この朝旨は止むを得んとしても、一旦廟議で内定したもの、岩倉等の歸朝に依つて再議に附せられ、太政大臣の三條實美を、病氣で引籠らせて、岩倉自ら其代理となり、事を左右したのは、許す可からざる不都合の處である、かゝることを打撿置ては、將來國家の爲めに宜しくない、といふので、岩倉を憎むこと、蛇蝎よりも酷しく、身を潜め呼吸を呑むで、段々容子を窺ふて居る、民選議院論の建白が出る、握り潰しになつて了つた、さア堪まらぬ堪忍袋の緒が断れた、これも偏に岩倉等の所爲であらう、かくては、國家の前途も思ひ遣られる、人生僅かに五十年、七十は古來稀としてある、長命をした所で知れたものだ、こりやア一番惜くもあらぬ、生命一つ

を抛つて、好物退治と出かけ、天下の惰眠を覺して呉れやう、と此に始めて怖るべき暗殺の計畫に掛つたのである。

其五

現時の新富町が、その頃の島原、江戸時代には却々盛大な花街であつた、藝者も今では、新橋の方が、幅を利かして居る、けれど昔は島原とか深川とか、言へば其方が本場としてあつたのだ、明治六七年の頃は、未だ幾分か、全盛の面影が残つて居たもので、その嶋原に、鈴木屋と稱ふ宿屋があつた、武市は姿を變へ、名も改めて、山田寅之進、ひそかに其機會の來るを待つ、同志として既に集まつたものは、山崎則雄、下村義明、嶋崎直方、岩田正彦、中西茂樹、澤田悅爾太、中山泰道の七人である。

手を分け分ては、毎日出かけて岩倉の出入を窺ふ、時節柄とて其筋でも、油断なく警戒して居るから、八人が八人揃ふての出入は出來ない、場所と時間に依つては、揃ふて待つことも出來ない、さればとて、一人では至難かしい、馬車に乗つて來るものを、一人で抑へつけて斬るといふことは、恐らく出來ることではない、といふて邸へ斬込むのは、尙更ら面倒である、而て見ると、往

来より外に手をつげることには出来な、此に於て、その出入を逐視ふ必要がるものだ。

明治七年の十一月十五日、この日は寺町から、近傍の料理屋で、武市始め下村島崎岩田中西澤田中山の六人が、一ぱい飲つて居る、山崎則雄は探偵の爲め、出かけて未だ歸つて来ない、彼是れ五時過ぎのと、山崎は呼吸を迫ながら歸つて来た、宿屋で聞いて、直ぐ其料理屋にかけつける。

『山崎さんと仰やる方が、わいでになりました』樓婢の言ふを聞いて『ツム……左様か、すぐ通してもよい』武市の答を聞くに樓婢は出てゆく、入れ違ひにはいつて来た、山崎は『やッ』付釋も待たず『うまい話でもあるか』『そのとで急ぎ歸つたです』思はず一同は膝を進める『例の奴が、今日夜にやらなければ、例の所から歸らぬさうで、それは確かなとです』さうか、それはうまい話だが、さういふ理由で、さう遅くなるのか』流石に武市は首領丈けある『毎月の例になつて居る宮中の宴會へ出るのださうぢや』歸途は……道順はどうなるか』赤坂見附の喧途が出るのが道順であるから、潜伏するにも、要撃するにも、至極都合である、と思ふです』『フーム』武市は手を拱んで考へに沈む『よしッ』膝を打つて『それに決しやう』それぢやア支度にかゝらう』一同立上らうとする、武市は之を制して『マア、急ぢやア不可ん、今から支度してう何する、暗撃と決定つたら、うむと沈着なきや不可ん、急ぢやア人を斬れるものぢやない、マア飲んで食ふて、緩々出

かけやう』事に臨んで他迄も沈着のは、そこが武市の真價である、他のものも、自然それに誘れて沈着やうになる、面白く世間の話に時を送り、さらに此大事を控へて居る人のやうでない、やがて點燈の刻限になつた『ア出かけやう』勘定を済ませて立上る武市、跡からついて一同は、宿屋へ歸つて、長刀は懐袖にかくし、その他のものは、それく包みとして、一人出かけ、二人出かけ、ぼつ／＼出かけた、道も各自勝手の方面から、落合ふ所は、例の赤坂喧途、そのうちに一同集まつて来た『拙者が合圖の一聲をかける迄は、決して手を出しては不可ん、引上げも、これと同様、すべて拙者の合圖を的にするのぢや、まづ合圖があつたら、馬の前足を拂ふ、これは山崎の役ぢや、馬丁と馭者は、可哀さうぢやが斬伏せる、これは下村と澤田、拙者が岩倉を引出して、一刀斬る、アトは御隨意ぢや、よいか、氣を沈着けんぞ不可んぞ』一切の打合せが済む向ふからピカ／＼光るものが来る、そのうちに、馬の足音が聞へる、たしかにソレだ、居合腰になつて一同はまち受ける。

其六

武市が『遣れッ』と一聲かけた、山崎則雄は闇中跳り出で、腰の一刀抜く手も見せず『やッ』電光

一閃、馬の前足を拂つた、馬丁は「人殺しく」と駈け出すのを、下村義明は飛びついて、一刀後背から斬りかける、馬丁のかけ足意外にはやい、背筋をスーッと、皮をひくやうに斬つた、取者の太郎が、空から飛下りるのを、澤田悦彌太が「えいッ」と斬る、肩口へザツクとばかり新込まれた、さつと逆る血潮と俱に「ウーム」と迎返る、負傷の馬は、荒れ廻りながらガタ／＼、馬車をひきゆく、武市等は逐すがつて、車函を覗けば、こは如何に、中はいつしか空蟬の蛻の売だ、岩倉の姿は更に見當らぬ、さては逃げられたかと、一同の驚き、四方に散つて、捜しもとめたが何處へいつたか分らない、流石の武市も、傍の捨石に腰かけて「失敗つた」と思はず溜らす吐息、山崎は「何でも、慥かに居たに違ひないがイヤ、天未だ吾等に幸ひせずちや」と何うしたものか、一同の騒ぐを武市は押し止めて、猶も四邊を憚かるやうす、折柄聞へる人聲、つゞいて光る提燈の火影、もう駄目だ、武市の指圖に。一同は開夜を僥倖いづくともなく逃去た。

宮中を出る時に乗つて居た岩倉が、何うして居なかつたか、實に不思議な理由だ、が、岩倉とて何も魔法を使ふのではない、人間の幸運なのは、大底かうしたものか、岩倉は馬車へ乗ることから、頭痛がする眩暈がする、それは／＼氣色が悪くて、とても堪まらぬ、霜月中旬のことであるのに、何となく蒸れるやうに上氣して、工合が悪いので、車函の戸を細目にあけて、風を入れ

頭を冷して居たのだ、所へ「ヤツ」バタ／＼と唯ならぬ物音、はやくも戸を推して、ヒラリ飛び下る、大地へそつと腹をつけ、四通になつた儘、暗いを幸ひ土堤の方へ這ひつけて、曲者等の騒いで居るうちに、土堤を向ふへ這下り、漆の中へソーツとはいる、石崖へしツかり、しがみついて、首筋まで水の中へはへり、呼吸を殺して曲者の去るを待つて居たのだ、寒い冷い、そんなことは、もう生命がけだから何でもない、そのうちに静かにはなつたが、しかし、未だ油断は出来な

い、手は凍へて来る、石崖につかまつて居ることも、長くは堪忍が出来ないやうになる、岩倉は心のうちに「ア、情ないことになつて来た、水に溺れざらんとするには、堤上に出づるの外なし萬一曲者の侍つあらば、これもまた生命を失ふ所以である」と、今は只だ、石崖にしがみついて、天命を待つの外はない。

岩倉邸に於ては、ソナ騒動の持上つたことは知らず、最早御歸邸に間もないことと、待ち受くる所へ、馬丁の重吉が、血染けになつて駈け込んで来た、玄關の敷登へ、マツタリ倒れた「も、も、も、申し、あ、あ、上げ、ま、ま、ます」見るより家來共は、敷登へかけ下りて「どうした、重吉どうしたのぢや」とた、た、大變、た、た、あ、くるしい「これッ氣を落付ら、どういたしたのぢや」と「へい、た、だいま、御前様が、き、き、斬られた」と「エーッ、御前が、何處ち

や〜』く、く、喰違で』そりやア大變だといふので、我れを先きに、喰違返へして駈け出す、槍を持つものもあれば、刀を掲げるものもあり、根柢木刀拵古木拵木、獲物を逃ぶの暇もなく、各自喰違を指して駈けつける。

其七

岩倉家のものが駈けつけた時は、もう近傍の人が大分集まつて居た、これは馬丁が、途中を怒鳴りながら行つたのと、通りかゝりのものが見付けての騒ぎで、何が何やら分らずに集つたものが多いのである、所へ岩倉家のものが、遣つて来たので、事情が分つた、騒ぎは一段と酷くなつた、斬られた馱者は、倒れて呻吟つて居る『オイ太郎、しつかりしろ』家令の藤川が、肩に手をかけた『うむ、うーむ、ア、痛い〜』しつかりしなさい、藤川だよ〜』やア、藤川さんか、ア、痛い〜』御前は如何遊ばしたか』うーむ、うーむ』これッ、何だ之れッばかり斬られたッてしつかりしなさい、御前は御無事か』自分が斬られねへからッて、酷いことを言ふな、御前は何かも無い』ナニ、御前は御無事だと、それは何よりだ、さうして何處にたいでになるか』そりやア分らねへ』何を言つてるのだ、仕様が無いな』何處とも知れず』コレ〜』と聲がするやうだ、

思はず一同耳をすますと』コレ〜藤川何うしても呼んで居るやうだ』ハイ、何處で』オイ藤川、漆の中ちや』ア何だか氣味が悪い、化かされたやうな氣もする、皆な眉毛に唾をつける』藤川ッはやく来ないか』ハイ』藤川は慥々もので、そッと土堤へはい上つた、提燈の火影に照して見ると、御前に違ひない、水の中から首丈げ出して居られる』やッ、御前様』これ、何をして居る、最前から呼んで居るのに、はやくせんと凍へて了うは』ハイ、只今』自分等の帯を解いて下げる、岩倉は漸く之れに絶がる、大勢で力を併せて引上げた、霜月の寒風の吹く晩に、一時間も水につかつて居たのだ、ガタ〜身内をふるはして御座る』さうも意外のことで驚き入りました』そんなことは何うでもよい、何か着るものを』ハイ』その用意がないから、無據く家來が着衣を脱いで、上衣ばかり三四枚合せて』火急の場合で、甚だ汚うは御座いますが、さうぞ之れを』身體を拭つて着替へる、後れ走せにかけつけて、邏卒に圍まれて、漸く屋敷へ歸つて来た、家内のものも其無事を見て喜ぶ、三條實美はじめ、段々かけつけて来た。

殊に』三條は特別の間柄とて、その喜びも人一倍、木戸大久保等は腕を拱んで黙して居る』まア、御無事で可かつた、しかし兇漢は何者ぢやらう』さア、それは、不意のことぢやツたから、よくは分らんが、さうも言語の内に土佐証があつたやうぢや』木戸と大久保は眉をよせた』なにッ

土佐訛が「思はず叫んだは木戸、大久保も膝をすゝめた」ハ、ア、して見ると、矢張り噂のあつた通りぢやツた所へバタ／＼と急ぎ足の家令が、敷居外に「ハッ、只今警視局より御目通を致した」と申しまして、大警部が見へました「ウム、よろしい此處へ通せ」かかることについての警視局の責任は、實に普通大抵のことではない、殊に、その警戒の不行届からの出来事、只だもう恐縮の外はない、大警視中警視も最前から来て居る、今度来た大警部は、その方の主任者である、案内をされて通つた大警部は、只管恐縮して居る「あまり事を荒立てぬやうに、出来るだけ秘密にせにや不可んよ、世間が動揺すると面白くない」ハッ、現場の様子を一應承りたく伺ひましたので「ウム、話さう」岩倉は記憶だけ話した、警視局は之から總掛りで、捜索にかかつた。

其八

警視廳の昔が即ち警視局で、明治政府となつて、表面の所は、天下泰平だが、その實は、未だ諸藩のうちでも、向背の不明ものがあつて、尙ほ徳川の舊恩を思ふ士族も少くない、それから薩長の跋扈に憤慨して、心ひそかに機會を窺ふものもある、動もすれば、一波動いて萬波激するの恐あり、同じ閣臣の中下さへ、嫉視反目、互に油断のならぬ折柄、政府の危機さは、恰で火山

の上に坐つて居るやうなものである、此に於て、専ら謀叛の氣あるものに對して、充分の警戒を加へる必要がある、警視局は之れが爲めに設けられたのだ、國家を泰山のやすきに置く爲めの警視局が、多く薩長藩閥の瓜牙となるのは、その起原が、斯ういふ理由だから、如何も致方がない、そも山下房親の昔から、今日の警視總監に至る迄、全く其傾きのあるは、實に止むを得ない譯だ、極く公平に言へば、今日のやうな世の中に、最早警視廳の必要はない筈である、殊に内閣の直轄の下に、こんなものゝあるのは、有害無益である、之れが爲めに、警察事務の進歩を害すとは普通でない、一昨年の焼打事件から、警視廳の廢止論が、大分やかましかつたが、結局曖昧のうちに消へて了つた、それにも又情實のあつたことで、今之れを詮議する必要はないが、兎に角、警視廳なるものは、警視局の昔から、さうした理由のものであるといふことだけは、此に鳥渡断つて置く。

その警視局が、喰違の事件を、未發に知ることにも出来ず、尙更に防ぐこともならず、こんな騒ぎに仕て了つたのは、内閣へ對しても相濟まぬ次第である、此上は、草を分け土を穿つても、犯人を捜し出して、その埋合せをせねば申分けがない、江戸時代の岡ッ引から、探偵掛りと言ふ名の下に、働いて居る犬共が、鶴の目隠の目で、犯人を捜し廻る、その嚴重なることは殆んど例の

ない位であつた。

(78)

武士等は、下駄の一遇とも言ふ可き機会を得ながら、それを取脱した残念さは、今更らいつてもない、一人二人と分れ々に歸つて來たのが、島原の鈴木屋である、まづ酒肴の用意をさせて「うも骨折ぢやつたが、彼れの悪運つよく、この失敗は残念なことぢやつたよ」流石の武士も思はず練習を漏した、岩田正彦は「イヤ、左様落麻するにも及ぶまいと思ふ、明日といふ日もあることぢやから」一語よく同志を慰め得た、明日ありと思ふ勿れ、とは怠惰者を戒める好例の格言ではあるが、失望したものを慰めるには、また明日の日もあるといふほど、結構な語はない、かうとても思はねば、心の慰めやうはないのである、岩田は巧いことを言つたものだ、しかし、暗殺の蒸返し杯は、あまり感心したものでない、それに、まア大抵は一舉にして遣れば格別、失敗して亦やつて見るといふやうなとの、必ず成就するものではない、その當人になつて見れば、成し遂げやうといふ慾があるから、二度でも三度でも幾度でも目的を達する迄は、遣つて見る氣はある、今度は方法を變へて、斯ういふ手段でゆかう、イヤそれよりは此方が、といふやうな譯で毎日集つては相談に日を送つて居た。

其筋では敏腕の探偵が、殆んど競争の如くなつて、夜の眼も合はさず、必死の探索、遂々この鈴木屋に目がついた、ごうも、彼の連中か臭い哩と、氣がついて一足ふみ込んで見ると、山田寅之進とは假の名、土州の武士熊吉といふことが分つた。

其九

(79)

武士熊吉と言へば、豫て評判の高い剛のもの、殊には征韓黨の有力者で、朝鮮八道を股にかけて來た男である、板垣後藤の二人とは、同じ土州の出身、朝鮮行も畢竟は此二人の顔で決定つたことだ、その熊吉ともあらうものが、暫らく行衛を暗まし、山田杯と變名して、都下に潜伏んで居るには、何か行細がなくては叶はぬ、集つて來る連中も、皆な土州人で、いづれも過激粗暴なものゝみ、武士の配下について、進退を爲るものばかりである、段々探偵の力を進めて見ると恰度、喰違事件の晩には、夕方から出かけて、歸つて來たのが夜半の頃であつたといふことが分つた、愈々汚散な奴である、もう大抵これであると目星がついて、全力を擧げてかゝる、一つ二つと集まつて來る、零細な事實を綜合して見て、まさに之れに違ひないと決した、が容易には履込めない、人数も多いし、それに何れも是れも、腕利のものばかりだから、下手なことをすると、傷者が澤山出來る、本人に負傷をさせても面白くない、されば、都合よく一人一人に捕まへたい

それも可成は、凶器を有たぬ所でなければ不可ぬ、注文が至難かしいから容易に好機を伺われな
い、唯だ遠い方から取巻いて、それとなく容子を覗ふて居る、勿論、探偵と探偵の聯合はついて
居るから、いざとなれば、二十人や三十人は集つて来るやうになつて居るのである。

かく迄の手配がついたとは、神ならぬ身の武市は、さらに知る由もなく、今日は方面を割振つ
て、一同を出してやつた、無論岩倉の出入を窺ける爲めである、宿屋の二階に獨り残つて、もう
讀書にも倦むで、晝寝といふ時刻は少し通り過ぎて、彼是れ四時過、霜月の下旬のことよて、日
の暮もはや、入顔の定かに分らぬといふ、誰そか彼れかの夕まぐれ、手拭さげて入浴、に出か
ける武市の姿をチラリ、見た張込みの一人が、それからそれへと通知をする、さアしめた、この
機会を脱しては、再び得難かる可しと、各自身支度をして、萬一を慮かる用意の鐵棒、腰にぶッ
込み、手に唾つけて、浴上りを待ち受ける、武市は悠々温まつて、漸くに濡手拭を下げて出て来た
二三軒歩を移す途端、軒先から現れた一人「モシ、貴君」武市は思はず振向へる「貴君は土州の
武市さんですな」恠としたが何喰はぬ顔「イヤ、拙者は山田といふものぢや」隠しても駄目で
す、武市さんといふことは知れて居るのです「馬鹿なことを言へッ」早足に行過ぎんとする「お
待ちなさい」袖を控へる、バラ／＼／＼彼處此處から現はれた十三四人、武市は猶ほ招扱けんと

する、もう之れ迄と一人が「御用ッ」右の手を抑へやうとする、濡手拭をふわりと抛げた、探偵
の額に擴がった儘。ビタリとついた「おッ」と手拭を取る隙に「あッ」一突に當られた「うーむ」
とぶツ倒れる「御用」組付いて来る奴を、身體を縮めて空を抱せる、足を拂ふと同時に、ドターン
と地響うつて倒れた「抵抗するか、御用だ」鐵棒ぶつて肩口を打つ、引脱しながら、流れて来る
手先を、ケヨイと引く、はづみを食つてヒヨロ／＼、代つて二人が同時にかゝる、ヒラリ
／＼と身體を變化すること飛鳥に異ならず、見るうちに七八人は打倒された、武市は疾風のやうに
この中を駆け抜けやうとする、ヒューツと飛んで来た、一本の檜棒、哀れ武市の足にからむ、ス
トーンと轉ぶを、得たりと折重なり、終に辛ふして捕縛した。

跡の連中は、歸宿を待つて、これも其晩の十一時頃迄には、残りなく捕縛して了つた、警視局
は徹夜で調へにかゝる、武市等の壯圖こゝに空しく、志士徒らに鐵窓の下に天を怨むも、今は龍
の爲、死の運命は刻々にせまるばかりだ。

其 十

警視廳の訊問所も、今では大分西洋式になつて来たが、その昔は、却々そんな譯にゆかない、

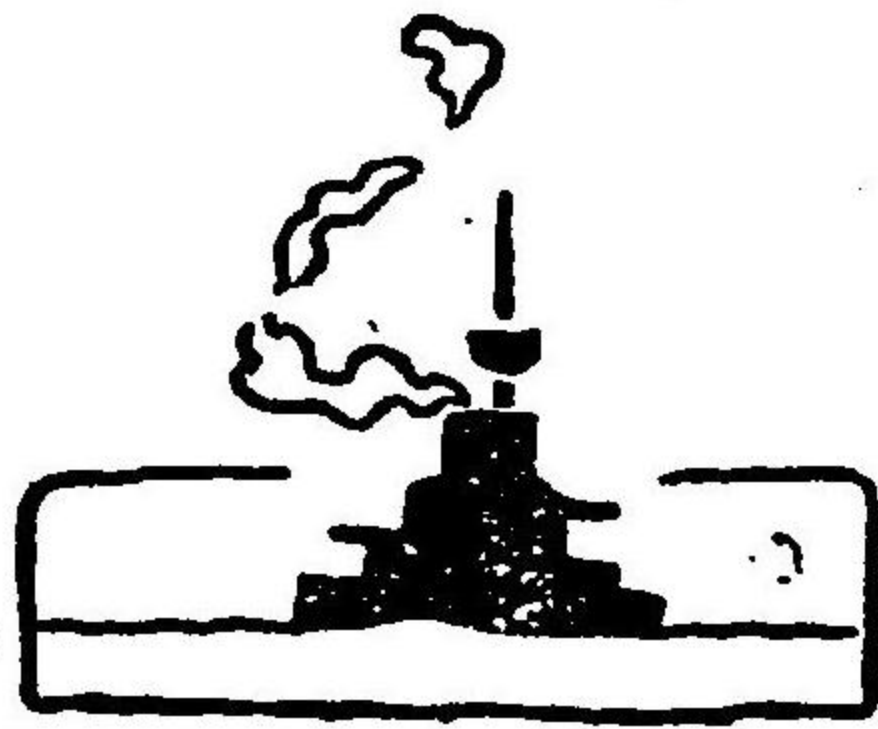
百事が舊幕式で、随分無理な訊問法をやつたものだ、拷問は明治十二年から断然用ゐられぬことになつたが、その前は公然の秘密で、黙許されて居たものである、併し、拷問が差止められても秘密では、廿年頃まで、チヨイ／＼やツて居た、表面は嚴重に禁止られて居たのであるから、假し之れを用ゐても、後日に痕跡の遺るやうな致方は爲ぬ、それは實に研究したものであつた、その中の一つを舉げて見ると、まづ被告人に大きな板を、足を揃へた儘穿かせるのである、一枚の板の上に足を二本揃へて、足首を緊と縛られるから、足の活動を全く停止せられて了う、同時に兩の手を、前の横木に括しつけられ、こんなことがあつても、手足を腕くることが出来ない、それから探偵掛が、左右より漢竹のヘナ／＼する先へ、綿を包んだ布片を結へてある、それで横腹をグ／＼やるのだ、さア肉痺つたい、腕かうとする、手足が動かぬから何うも出来ない、動ければ幾許か樂であるが、動けないで肉痺つたいのは、此位苦しいことはない、疑はしくば誰れでも試して見る可した、僕杯も一度これに引か／＼つて苦むだものだ、大抵な奴は、これで閉口する釣されるのも苦しいが、これは堪忍が出来る、肉痺つたい苦しさは、決して堪忍の出来るものでない、これも拷問の一種である、しかし、少しも痕跡が残らないから、公判へ廻つてから、拷問にかゝりましたと、主張した所で、證據がないから採用はされない、形式で威迫のも、拷問に類

似しいが、本式に言へば、それも善いこと、は言へない、訊問所杯も、昔風の厭に陰氣な、態で見せつけの爲めに、手錠や細繩、漢竹の類が室の一隅に、取散らしてある、何となく薄氣味の悪い、警視局の訊問所へ引出されたのは、武市熊吉である。

『其方は武市熊吉か』『左様』『岩倉公を赤坂喰違に於て暗殺しやうといたしたのは、其方であらう、もはや遁れぬ所ぢや、有體に申立ろ』熊吉は冷然として『左様』と云ちや、相違ないか『くの通り』一語凜として侵す可からざるの風姿、掛官は聊か空を打つた貌である『如何なる仔細で凶行に及んだか』國家に害毒を流す奸賊であるに依つて、斷り捨てやうといたしたのぢや』國家に害毒……その奸賊とは如何なる次第でいふか』黙して答へぬ、再三繰返へして訊ねる、尙ほ黙して居る、掛官は少し激して『こらあツ……聞へぬか』卓子をトンを打つ、熊吉は徐かに頭を上げて『それを聞きたいのか』申立てろツ』『フン』鼻の先で笑つた『これツ……何が可笑しい』『そんな至難かしいこと聞いても分るまい』何を言ふか』暗殺の理由を聞きたくば、岩倉が自身に来て、訊問ねたら可からう、下級の小役人が、何で國家の大事が分るか、熊吉は天下を憂ふるの志士である、心ある役人なら、多少は禮節を以て待つ可し、鼠賊偷盜を訊問ぶると同様の方法を以て訊問るとは、無禮千萬な、もはや此上一言も吐く必要はない、熊吉の首が欲し

くば、このまゝに斬つたら可からう、何の小役人風情で……」大喝して睨みつけた、眼光人を射て、何とも言へぬ恐ろしき顔、これから先きは、何を言ふても黙して考へぬ、こんな男には拷問も甲斐がなからう、下村以下のものも同様、十数日の後、終に其罪状は決定して、悉く斬罪に處せらるゝことになつた。

これが爲め、土佐派の政治家、殊に板垣後藤の二人と、岩倉大久保木戸の一派と折合が悪くなつて、愈々國會のことは思ひも寄らぬことになつて了つたのである。



時代 板垣退助

其 一

土佐國高知の城主山内豊信の家來、乾榮六正成といふ人があつた、温厚にして人と争はず、文武の心掛も浅からぬ、家中の評判も誠に善い人で、殊に能書の譽あり、家格は馬廻役である、正成年十八の時、所用の爲め馬上で城下へ出た「ハイヨウ」馬を急がせ遣つて來る、向ふから來る一群の人は、身分のあるものらしい、正成は馬を成る可く左側の方に寄せて、とつとつとやつて來た、何に驚いたか馬がヒーンと嘶きながら卒立になつた、これはとつと、正成乗鎮めんとする、馬は益々荒れて、狂ひながらにかけてゆく、驚破といふ間もあらばこそ、彼一群の人の真ん中へ……左右へばつと開いた、馬は其中を駆け抜ける、雨降り後のこととて泥濘があつた、馬の後足がスポリはまると、泥水が四方へ散つた、その儘に馬は逸して、遂々邸へ歸る迄、荒れ通して了つた。

その晩のこと、平生から交際の深い友人が遊びに來た、種々の話の序から「時に乾氏、實に無禮の奴もあるもので、今日のことぢやツたが、君公微行の城下巡視の際、通りかゝりの馬上の武

士、如何に馬が荒れたればとて、畏れ多くも、君公に泥水を蹴上げて、その儘に行き過ぎたものがあつたさうぢやが、何といふ不埒な奴か、御家來の中にも、左様いふ不心得のものがあるとは驚き入つた次第では御座らぬか』正成は氣色をかへた「エツ……それでは彼れが君公の微行であつたか』彼れが、とは、足下は其事御承知か』イヤ、そりや知らぬが、さういふ話も聞いた』フム、しかし、君公の宏量いつもながら恐れ入つたことかな、その無禮者は姓名も分つて居るさうだが、後日の沙汰には及ばんどの御言葉ぢやさうだ』なにッ……姓名は知れて居る』明瞭知れて居るが、過失なれば致方はない、殊に馬の罪で、本人の心ではない、と仰せになつたさうだ、馬上の武士の不埒に引返へて、君公の思召は恐れ入つたものぢや御座らぬか』話して居るうちに正成の顔色は段々青くなつて來る、對手の目にもそれと知れる位だ』何うかなされたか』イヤ別に』でも、顔色が大層悪い』腹痛の加減で、少しは悪いかも知れん』それは、た氣の毒なことを致した、これで御無禮を致さう』マア、御緩くりなされ、それほどは御座らぬ』さうでない病氣の時は誰れも同じこと、堪らへるのが一番悪い、随分ともに御養生をなされ』引留むるも肯かず、友人は立歸つた、跡に正成は、一人腕を組んでボンヤリと、思案に沈む容子、今の話は何の氣もなく言ふたのではあらうが、自分の身に取つて見ると、何だか感刺られたやうな氣が爲る

好し馬が逸したにもせよ、君公か他の人かの區別さへつかなくなつたことは、實に我ながら不埒の至りである、殊に泥水まで蹴上げて、その過失さへ詫びる暇なく、知らぬこととは言ひながら、ア、不甲斐ないことだ、君公の御心に有難き御思召がある丈け、猶ほ更ら申譯がない、姓名も知れて居るといふからには、この正成を武士らしくも思召まい、この上の御奉公も思ひやられる、我も板垣駿河守の末葉である、かくなる上は、切腹の外はあるまい、イヤ切腹したればとて、この汚名の灑がれる譯はない、さりさて生き永らへて顔見らるゝも面目なし、はて何としたら可からう、哀れ、正直一途の正成は、今や心も亂れ氣も狂ふばかり、顔色も漸々蒼白くなつて來た。

其二

翌日の朝、寢床の上へ起上つて『何共申譯のないことを致しました、何卒ひとへに宥免を願ひたい』兩手をついて詫入る様子は、恰で人でも居るかのやう、潜々と泣き出した、驚いたのは妻である最前から目は覺めて居つたが、夫のやうすの平生ならぬに起きもやらず、只管その様子を窺ふて居ると、この有様、もう堪まらなくなつたと見へて『モシ、旦那様……モシあなた』正成は端然と座つて『ア、正成の武道も廢つた哩』モシあなた、さうか遊ばして』正成は答へませず

スーツと立上つた、障子を開いて廊下に出る、オヤ／＼變たと見て居ると、雨戸を外して庭に飛び下りた、妻も後から従つて来る、衣類を脱いで池の中へはいつてゆく、何うも變たとは思ふが解らない『モシ、あなた……何を遊ばします』始めて氣のついたやうに、池から飛び上つて、庭石の上にビタリ坐つた、勿論裸體の儘である『ハッ……申譯もない次第で、武士にあるまじき不覺の至り、何とも申譯もない次第で御座ります』妻は呆氣に取られて『その有様は何事で御座ります、家來の目に留まると宜しくありません、さア衣類を』手拭を持って来て身體を拭ひてやる、衣類を着せる、まるで子供の仔儀『アッハ、ハ、何を申すか、人として過失のないものはあるか何の馬鹿なッ』今度は狂ひ出した、妻を押送けて座敷へかけ上る、床の間にある刀を取つて、キラリ引抜いた『あれッ、危なう御座います』妻の留めるを突倒し『えいッ、ヤッ』と柱へ一寸ばかり斬込むた『アレ誰れか来て』絹を裂くやうな聲を振絞つて叫ぶは妻、かけつけて来た家來も此有様に吃驚した、平生が極めて温厚な人丈けに、家人の驚きは尙更である、狂ひ廻る正成の前に立塞がるものはなく、縦横無盡に荒れ出した勢ひ、却々に凄まじく、見る／＼うちに障子襖を斬り倒す、あれよく／＼と家人は、呆れて騒ぐばかり、そのうちに隣家の人も駈けつけて来た、正成も草臥れたと見へて、刀を投出しドツカと坐した、妻は涙に眼も曇り『何がお氣に召しません

か、どうぞ仰せを願ひます』お前は何處の人か』こりやア驚いた、妻の見分がつかないのだ『エッ……妾で御座います』御前體よろしく御取做下され』何を仰しやるのですか、妾で御座います』どうぞ、お氣を正確に願ひます』ハ、ハ、よく辨するのう、何處の人か知らぬが、よくしやべるのう』これは全くの狂氣だ、妻は聲をあげて泣伏した、家來の知せに、追々はせ集る親戚友人この有様に、手もつけられず、早速醫者もやつて来たが、愈々狂氣といふことになつた。

さアこれから一日増に重るばかり、多くは沈鬱んで居るが、時として荒れ狂ふ、その時の勢ひといふものは、實に凄まじいことで、如何とも押へやうがない、そのうちに、原因も分つた君公に無禮を加へたのは、知らぬこととは言ひながら申譯がない、といふので、それが嵩じてのこととは、漸く解つたが、もう取返がつかない、然るに、妻の實家では、之れを見聞して段々協議の末、離別を求めて来た、乾の一族は、非常に憤激したけれど、それには妻も同意らしいから、そんな性根の腐つたものを、側につけて置けば、却て病勢の暮るばかりと、此に相談が纏つて、終に離別と言ふことになつた、さしも名家の流れを汲んだ、乾の家も、實に悲惨なものとなつて了つた。

自分は發狂して、妻には見捨られる、斯んな不幸のものが、世に多くあらうか、毎日のやうに人が従いては漫然散步に出かける、何處へ行かうといふ目的はないのだ、従いて居るものも、無が氣ぢやアない、併し、本人の心のゆくやうに仕てやつたら、少しは精神も鎮まるだらうと、親戚が集つてからの決定だから、永年使へた老僕をつけて、出入は自儘にしてあるのだ。

かくて、一年餘りを過すうちに、大分氣も靜かになつて、狂ひ廻るやうなことも少くなる、従いて居るものも、自然馴みがついて、此頃では、却つて奨めて出かけるやうにする、本人も出歩行くことは、一番氣に入つて居るらしい、或日のこと、何うした油斷からか、正成を見失つた、さア大變、正氣の人ではなし、萬一のことでもあつてはならぬ、老僕は必死になつて捜したが、何うしても見つからない。

爰に、元は家老を勤めた人で、今は中老でこそあれ、内外に却々の勢力ある林勝重といふ人があつた、その支關へ立つて、頻りに案内を請ふものがある、用人が出て見ると、乾正成がニヤニヤ笑つて居る、評判のキの字だから「これは乾さん、何かね」ニヤ／＼笑つて、口の内でブツブツ

ツいつて居る、何だか氣味が悪い「何か用事ですか」拙者の妻が、當家へはいつたのを見届けたすく渡して貰いたい」用人は驚いた、成程狂人といふものは、實に不憫なものだ、妻に愛想を盡かされて出てゆかれたのを知らないで、こんなことを言ふて来る、が何を間違へて斯んなことをいふて来たのか「貴君の御家内は、當家には居りません、何か間違でせう」イヤ、間違ではない、足下は當家のものではなからう」拙者は當家のもので、貴君の御家内が當家に居られる理申がない」黙れッ……隠し立をするを許さぬぞ」腰の小刀に手をかけた、これが狂人に及物、危険なことだ、段々人がふへて来る、奥へも之れが知れたので、主人の勝重が出て来た「これ／＼何を騒ぎ居るか」ハイ、實は只今」斯ういふ次第であると、事情を申述べる、勝重は笑を漏らして、「これは乾殿、勝重で御座る、まア其處は端近ぢや、こちらへお通りなされ」家來は驚いて「發狂して居りますので、何を申しますやら」まアよろしい、拙者に所存がある」正成はズカ／＼と昇つて来た、座敷に坐つてニヤ／＼笑つて居る「お手前の御家内は……」辭の終らぬうちに「永々御厄介に相成つた、今日連れ歸ります故、御引渡しを願ひたい」イヤ、おいでがないのぢや」「中老とも言はれるものが、虚偽を言はしやるな」勝重を中老と心得て居る丈け不思議だ「何か證據でもあつてのことか」最前、當家へはいつたのを見届けたので御座る」何うも間違らしく

ない、しかし、其らしくないのが間違つて居るのだ、勝重不圖氣がついたのは、最前娘が供人をつれて歸つて来た、間もなく正成が来たのであるから、事に依つたら、その供人の中で、妻に似て居たものがあつたのだらう、よく見せて安心させて歸してやりたいと、情のある勝重が、手を拍つて、女共に皆な出て来いと命じた、女共の驚きは容易ならず、飛んだことになつた、もし、見直して愈々それだといはれたら、何としよう、主人も詰らない悪戯をするものだとは、思ふやうなもの、否とも言ひかねて、ドヤ／＼出て来て並んだ「サア、乾殿この通りぢや、よく御覽下さい」正成はズーツと見て、頭を振る、違ふといふのだ、女共は漸く安心した「解つたら、たかへり下さい」老へて居る「違つたで御座らう」未だ一人居つた、それが妻で御座る「この他の一人といふのは勝重の娘の外にない、さてこそ一大事と、女中は顔を見合はせる、勝重は思案に沈む、正成の眼光は、異様に輝いて来た。

其四

勝重は元來、温厚の人で長者の風があつた、正成が名家の末葉でもあり、山内家にも由縁あるといふことを知つて居るので、發狂した後も、人傳に聞く毎に、それとなく同情の涙にくれたこ

ともあつた、今日のごとも、何を見誤つてのことか知らぬが、折角かうして来たものであるから慰めて安心を興へて歸してやりたいとの情から、ほどよく對手になつて居たのだが、娘まで見せやうとは思はなかつた、しかし、かういふ以上は、見せずには濟むまい、之れを拒んで騒がれでもした日には、それこそ、今までの信切が何にもならない、といふて、本人の娘が何といふか解らない、そこで之れを侍女に申付ける、侍女は驚いて奥へかけ込んで来た「大變で御座います」「まア、お前は何といふことです、女の身で荒々しい、ちと戒んだら可からう」「ハイ、恐れ入りました、あんまりのことと思ひまして、ツイ……申譯が御座いません」「用事とは何ういふこと」「この頃、評判の狂人、あのう乾さまが、只今おいでになりまして、なんでも、あなたさまにお目にかかりたいと申しますので、旦那様もお困り遊ばして、あなたさまに申上げて、お逢ひ遊ばすか、どうか聞いてまゐれ、とたッしやるので御座います、馬鹿々々しいでは御座いませんか、狂人なんぞに、ねへ、あなた……」「前の話は、よけいなことが多いから、よく分りませんよ、乾様が何ういふ理由で、妾に逢ひたいと仰やるの……」「まア、それが可笑しいので御座いますよ、彼の方の御新造が、當家さまに居るから逢はせろといふので、旦那さまが、た逢ひ遊ばして種々ど申しましたのですよ、さういたしますとね、なんでも居ると仰やるのでせう、今多勢で這入つ

たのを見たといふて動かないのです、段々たはなしのするに、妾達が皆んな顔を揃へて見せることになつたので御座います、馬鹿らしいぢや御座いせんか、狂人なんそのお見立に預るなんてほんとうに腹も立ちますし、可笑しくもありましたが、旦那さまの仰せつけで御座いますから、顔を列べましたのですよ、スルトに前達ぢやない、そんな汚ないのぢやないと、いふんですよ、マア腹が立つぢやありませんか、けれども、これは嫌はれた方が結構なんで御座いますよ、それから何うしても、あなたさまがた逢ひなさることになつたので御座います、狂人なんぞといふものは、飛んでもないことをいふもので御座いますよ、それでは、妾が妻君に似て居るゆゑ、逢ひたいといふのかへ、似て居る位ではないのです、それだといふので御座いますよ、流石の嬢さんも顔を赤くした、所へ又もや侍女が、はやくと迫りて来る、無嫌く嬢さんも立つてゆく、待ちかねた勝重は「迷惑ぢやッたらうが、かういふ場合ぢやから堪へてくれ」正成の方を向いて「これは拙者の娘ぢや、れ手前の思ふ人とは違ふぢやらう」正成は眼を据ゑて、じつと見るその見られる面白の悪さ、いやでも自然俯伏工合になる、正成は愈々のぞき込む「乾殿……分りましたか、違ふ……違ふ……これでも宜い……これに致さう」これでも宜いは驚き入る、嬢さんはツイと立つて奥へはいつた、その日は、勝重が漸く宥めて歸した、林の家の迷惑は容易でなかつた。

其五

乾の家でも、正成の行衛が分らないから、それ／＼人手を分けて詮索する、何うも分らないで困つて居る所へ、一人で歸つて来た、その背後から林の家人がついて来て、すツかり事情を話したので、早速親戚の一人が、挨拶にゆくやら何やらして事済にはなつた、所が、困つたことが出来たのは、これからといふものは、正成が毎日林の家に行くことで、やるまいとすれば荒れ狂ふやれば嬢さんに逢ひたいといふ、逢はせなければ動かない、林の家でも迷惑な次第だ、これは全く正成に見染られたに違ひない、乾方の親戚が俄に集會をすることになつた。

乾正成の親戚が打寄つて相談の結果が、斯ういふことになつた、段々正成の意中も糺して見ると、狂人の意中といふのも可笑しなものだが、鎮靜まつて居る時は、さう酷く間違つても居らぬから、一通りは聞いて見た、何でも彼れでなければ不可んこのこと、るれに話が込入つて来ると、何うしても、彼れが妻だと言張る、そこが間違つて居るのだ、さうなると、親戚の人達も、痛ましいやら可哀さうやら、何ともいへぬ心になつて、無論謝絶りは言はれるに違ひない、正氣の沙

汰ども思はれまい、けれども、一應申込みをして、その上で本人の宥めやうもあらうと、此に急々表面結婚の申込みを仕た、天下無類の珍談ではないか。

勝重も流石に一度は憤はつたが、熱々思ふに、目役は馬廻格で、中老とは遙かに劣つて居る、けれども、家格を言へば、名にし負ふ、甲陽の名將武田家の廿四將の一人とも言はれた、板垣駿河守の系統を引いて居る、若し之れが正氣の人であつたなら、文武の心掛けにも淺からぬ、立派な武夫、二つ返事で承諾もするが、何分にも狂人では仕様がな、といふて不愛想なことも言へない、向が正式にやつて来たのだから、此方も正式にせねばならぬ、親族を集めて此相談にかかると、親族は呆れ返つて、相談をかけた勝重の丁見を疑ふ位である、無論謝絶といふことに決した、所へ、侍女がやつて来て、嬢さんが一同に逢ひたいといふ、無理もないことで、必ず心配して居るのに違ひない、すぐに此方へと申つける、間もなくはいつて来たのが、嬢さんである、化粧を終つたばかりの娘盛り、しどやかに席についた。

『失禮を……』一同も丁寧に會釋する、勝重は『何か用事があるとのことぢやが、遠慮はないから言ふて見るがよい』やさしい父の言について『ハイ……今日の御寄合は』お前も聞いたであらうが、彼の正成の親戚から、お前を申受けたいといふて来たのぢや、それについて、斯く親戚の

方々を煩はした譯ぢやよ』妾を申受けたい……そりや何の爲めで御座います』驚いては不可よ、嫁にといふのぢや、が、それは絶謝ことに只今取極めたのぢや、決して心配致すには及ばん』妾にた尋ねもなく、お謝絶になりますので御座りますか』尋ねる迄もないさ、謝絶るのが當然ぢや』『いゝゝ、妾は参りたう存じます』オヤこれは大變だ、狂人が染つたか知らん、一同は顔を見合はせた限り、開いた口も塞がらぬ』お前、何うかしましたか、氣を静めなけりや不可んよ』何うも致しません、申受けたいといふ上は参りたう存じます』へ』父も黙まつて了つた、母は堪まり兼ねて』お前は、まア何事を言ふかと思へば、飛んでもないことを』

母は疾や涙ぐむで居る、娘は平氣なものだ、流石に眼の邊は紅をさしたやうになつて、胸の動悸も、何うやら高いやうである』父さんも、母さんも、御聞下さいまし、人様の嫌う狂人を好くといふ次第では御座りませんが、假令狂人にも致せ、妾を……と思召て下さる其れ心が嬉れしう御座います、況て妾に捨られて一厨の御不幸、勞つても上げたう存じます』これ／＼何を言はつしやる、困るのう……お前は』勝重は恰も娘の氣の狂ひでも仕て居るかのやうに嘆息をする、母は猶ほ更らること』お前は後先を善く考へて、ものを言はないと、取り返しつかないことになりまますよ』父さまも、母さまも、決して御心配遊ばしますな、妾はヨク／＼考へての上のこと

其六

で御座ります』それでは、お前は正氣で乾の所へ行かうと言ふのか『ハイ』これには一同いよいよ驚いた。

その後、幾たびかの集會も開かれ、至難しい相談もあつた、正成は例の通り、毎日必ずやつてくる、拙者の妻に逢はせろ、といふて動かない、それを娘が慰めて歸す、勝重夫婦は、これも何かの因縁だらう、寧ろやつて仕舞ふといふ氣になる、親戚も我を折つて、此に黄道吉日を卜んで、めでたく結婚の式を挙げた、城下の評判は豪いことである。

結婚式の晩、酒宴も未だ開いたばかり、三々九度の式丈けが終つて、例の高砂屋がはじまると、何を思ひ出したか、正成がフイと立上る、それ婿殿がといふうちに、庭へ飛び出す、腰の小刀引抜いて、之れを張廻すといふ騒ぎ、いやはや、式も何も滅茶々々になつて了つた、かねて覺悟のことと言ひながら、嫁さんは平然たもので、靜かに綿帽子を脱いで、自ら之れを取鎖めて、宥めすかして臥かして仕舞う、また嫁さんの言ふことは、すぐ承知するやうだ、これでは夫婦中は善さうに思はれる、一同は引退つて其晩のことは終つた。

城下の評判は區々で、褒めるもあれば貶めるもある、しかし、心ある人は嫁さんの志に感服して、神様の子のやうにも言ふ、そのうちに、嫁さんは妊娠した、實家で此事を聞いた時は、嬉しいやうな、亦た羨ましいやうな氣もしたといふ、彼是れ人の取沙汰はあつたが、嫁さんは一向それ等に耳もかさない、夫大切に善く世話をする、雇人も實に感心して、忠實によくつとめる、一家の治りは誠によろしい、目出度い五月帯も疾や濟むで、十月十日の期満ちて、至のやうなる女の子を産むだ、極めての安産で、實家から母のかけつけた時の喜び、それは例ふるにものがないほどだ、七夜になつて、今日は子供に命名する日である、勝重は未だ初孫を見ない、それをかねてやつて来た、産房にある娘も、至極経過がよい、自分では最早離れやうといふのを、醫者や産婆から、輕はづみは宜くないといふて、留められたのであるといふほどである、勝重はニコクして愛孫の顔を見ながら、頻りに語つて居た、バク／＼とはげしい足音、アレー誰れか、旦那様がツと叫ぶ聲、さては又た始まつたのかと、勝重が振向く刹那、正成は手前を提げて突ッ立つて居る『オー正成のか』已れッ……拙者の子供を』言ひながらビューツと突いて来る、勝重ヒラリと體を變じた、槍は空を流れて、正成はトン／＼と泳いで来た、手元へ躍り込んだ勝重の早技、槍を打落す、正成をしつかと膝下に組敷き、下緒を取つて早速の縛め、嫁さんは驚い

て立上る『これッ……お前は其儘にして居れ、如何に狂人なればとて、現在の舅に對して、眞檢を向くるとは怪しからぬことぢや』今までの喜びに引換へて、勝重の怒りは甚しい『父さま、それは御無理ですよ』何が無理か、父を討たうとするのは不將のことではないか』さ、それが狂ふて居る人の平生、只今突いてかゝる時の一言に、子供のことを申したのは、あなたのお耳にもはいりましたらうと思ひます、子供を奪られてもするかとの懸念から……父さまの見分がつかないのは、病氣のことで致方が御座いませぬ、どうぞ、當分のうち、父さまは御出で下さらぬやう願ひます』勝重も癪にはさわるが、聞いて見れば、それも尤も千萬、その日は其儘歸つた、乾の親戚も之れを聞いて、林へ詫にゆくやら、正成を座敷牢へ入れやうとする、それも又、嫁さんが拒んで了つた。

正成の狂態日に増して酷くなるばかり、赤子の世話と、その監督と二つながら、甲斐々々しくやつて居る、見る人として感服せぬものはない、悲しい辛いと思ふ日のないこともあるまいが、少しも様子には出ない、かくて一年半ばかり過ぐるうち、またく妊娠した、聞く人は不思議の思ひをする、今度も産は軽い、生れたのは男の子である、名を猪之助とつけた、父の正成は、三十貫も體量のあつた人だが、此子は極めて小さい、掌の裡の玉といつくしむ、然るに、正成の此

子を愛すること普通でない、段々氣が落付いて来る、少し位狂ふて居る時でも、此子を抱かせると静まる、不思議と子供の愛が深い、どうも狂人とは思へない位である、外の見分けはつかない迄も、妻子の見分けは、チャンとついて居る様子、狂人でも斯ういふのは取扱ひが樂である、子供の健康も、小さい割には善い方で、はやくも、悪戯盛りの七つ八つ、猪之助の育つに従ひ、正成は益々落付いて来る、この猪之助こそ、即ち今日の板垣退助その人である。

其七

掌裡の玉と慈しんで、自分の老年經ることは打忘れ、偏に猪之助の成長を待つ、春の花秋の紅葉と、幾たびか梢の色も染め變へて、猪之助此に十二の歳を迎へた、體格は父と異なりて、脊も高からず肉もつかぬ方ではあるが、悪い病氣にも罹らず、健康に育つてゆく、悪戯は日増に長じて、いつも子供の遊大將、母は一切叱言をいはぬこととして、爲すが儘、思ふが儘に捨て置く唯だ泣いて歸ることがあれば、その時こそ、思ひ切つて叱言つける、すべて男子は泣くものではないといふのが、母の教訓、強くどばかり育てゆくの、その悪戯も一段とはげしい、近所の人も随分迷惑することがある、隣家に雷嫌な人が住んで居た、或夏の日のこと、猪之助は同じ位の

歳の子供と、川遊を仕ての歸途、雨雲開く蔽いなくなり、今にも夕立の降り出でん有様、遠く轟く雷鳴の、段々はげしくなるにつれ、大粒の雨が、ポツリポツリ降り出して来た、颯々と吹き来る風は雨を送りて、ざあツツと降つて来る、雷鳴は益々はげしく、電光は閃々として、恰も煉獄の眼を射る如く、その物凄さは言語にも盡くされず、猪之助は頭から、びしょ濡になつて隣家の前庭かけて来た、何を思ったか足を留めて、垣根のうちを覗き込む、未だ暮れても居らぬに、雨戸をピツタリ締り返つて居るのは、かねて噂さの雷嫌、猪之助は連れの腕白子僧に手傳はせ、大きな石を荷はせて、垣根の破れから庭の中へ運び込むだ「さア、いゝか、一二三だよ」彼の大石を二三人で抱へた「ゴロ〜」山の假聲をつかいながら、ドシンと戸に打ちつける、ミシ〜と戸の端が破れた「はやく、そつちのを、もつと打つけるのだよ」合図を共に、又もドシンと打つつけた、メリ〜〜雨戸は一枚、遂々毀れて了つた、ワイ〜〜嘩しながら逃げ出して家へ歸つて澄して居る、夏の雨は馬の脊を分けるといふ通り、さしもの強い夕立も、いつか降り止んで、雲の切れ間から青空が見えて来た、隣家でも雨戸を明けにかゝる、と、一枚メチャ〜に破れて、大きな石が二つ三つ廊下に轉つて居る、下女は驚いて「旦那様……大變ですよ」「どうした」誰れか石を投込んだものが御座います「エッ……石を投げ込んだ、誰れだ」誰れです分

りません」主人も蚊屋の中から這出して来た、見れば雨戸がメチャ〜だ、忌々しい奴だ、それぢやア最前子供の者が仕たやうであつたが、また隣家の頑童が、悪戯を仕たのに違ひない、忌々しい奴だ」怒つたが證據のないことは致方がない、殊に父は狂人にしても、母は中老林勝重の娘である、評判の女丈夫、うっかり叱言をいふて、しつべい返しに押へられるのも、氣の利かないものである、と黙と堪忍して、早速大工を呼び修繕に取りかゝつた。

「叔父さん、何うしたの」垣根の破目から覗いたのは、例の猪之助である「坊ちゃん、何ぢやア叔父さん、何うしたの」雷さまが落ちてな、この通り雨戸が毀れたのぢやよ「さうかい、坊は雷さまの落ちたのを見て居たよ」フォーム、見て居たつて「ゴロ〜」と言つて、その戸へビシャーンとぶつかつたのだよ「雷さまは何んな顔を仕て居たね」大きな石のやうだつたよ「石なら坊ちゃんお前さんだらう」真正は左様だよ、吃驚したらう「何故そんな悪いことをする、馬鹿子僧がッ」餘まり癪に障るので叱りつけると、猪之助は「へー」と言ひながら、指で眼の下の皮を引張る、舌をペロリと出して、大人を恐にするも程度のあつたもので「己れ子僧ッ」と思はず駈け出す、猪之助も駈け出して、背後を振向き、尻を叩いては手招きをする、その面憎さといつたら、もう堪忍が出来ない、衣服を改めて乾方へ出かけた、無論談判の爲めである。

其八

如何に子供とは言へ、餘りのことに隣家の主人から嚴重の掛合に及んだ、猪之助の母は、左迄氣の毒らしい顔もせず『子供と言ふものは何うも腕白で困ります、そんな悪戯を致しましたことは、少しも存じませんで、お氣の毒で御座いました』何しろ、雨戸が一枚繕ひも出来ないやうな毀れ方で、今大工に申付けてある位で御座る『それだけの入費は、當家にて辨へますれば、そのものを使し下さるやう願ひたいもので……』ちよつと、おまら下さい、拙者は金子を彼是れ申すのでは御座らぬ、かういふ譯になつて居るといふ迄の、お話をするので御座る『左様で御座いますか、それは失禮を申しました、出すなどの仰せなれば、差控へませう』隣家の主人も少し憤然とした『イヤ、あなたは拙者を愚弄なさるか』『いゝる、さういたしまして、愚弄する杯と、ソナとは御座りませぬ』否、愚弄して居る、最前からの御挨拶振は、まさに愚弄して居るのぢや『左様ですか、それでは強て申譯は致しません、何とでも御勝手に思召せ』と、それが既に愚弄して居るのぢや、自分の子供が、斯様な悪戯を致して、それでも不良とは思召さぬか『不良と思へばこそ、お詫を致して居るでは御座りませぬか』御挨拶が拙者の腑に落ちぬことばかりぢや』

『それでは御隨意に遊ばせ、私方では之れより御挨拶の致し様は御座りませぬ』何、隨意にせいと仰せらるゝか』『ハイ』暫くは双方ともに無言、睨合の姿である、次の襖が少し開いた、見るに猪之助が、ペーを仕て居る、流石に母が『これッ叱れると、ビツシヤリ襖をしめて』弱虫やアい〜』『あれぢや、あなたは母として何と思はッしやる』『全體、貴君が弱いから子供に迄、馬鹿にされるので御座います』『弱い……何が拙者が弱い』『さればで御座います、貴君も二本抜む武士では御座りませぬか、たかが雷鳴位で御座います、子供心にも、ア〜弱い御方だと思へばこそ、悪戯も致すので御座ります』し、しかし、好嫌は人間の情として致方御座らぬ』いざ、君の御爲めといふ時に、雷鳴が致したら何と遊ばす』『ウーム、それは』雷鳴が致すからとて、まさか逃足にもなれますまい』イヤ、あなたの様な亂暴な方とは、お掛合いたしても詮のないこと、これで御免家ります』ブン〜怒つて歸る、門を出て振り返ると『弱虫や〜い〜』猪之助が玄關で歸つて居る。

猪之助の悪戯は、こんな調子で日に増ひてくつて来る、母は決して之れを咎り懲すやうなことはせぬ、眼にあまることは、數日経てからよく、胸に銘るやうに言ふて聞かす、父の正成は瘡つたといふのではないが、前から見れば大分落ついて來たやうで、頃日では少しも狂ふやうなこ

とはない、時候の加減で、これは變だと思つた時は、すぐに猪之助を見せる、腕白のくせに猪之助は、また此父に事へる時は、實に從順であつた、よく其心を迎へるので、忽ち病勢が回復つて了う、然るに、猪之助の身に取つては無論のこと、乾家の一大災厄が起つた、それは此賢夫人が感冒の心地と打臥したのが原因で、段々容體が悪くなつて来る、三四ヶ月するごと、もう枕を自分で代へることが出来なくなつた、醫師の説にも、今は見込なしのことに決した、流石悪戯ざかりの猪之助も、これには閉口したものか、外出もせず甲斐々々しく、看護をつとめる有様は他の見る目にもいぢらしい位である、實に人生は、草の上の露の如く脆く果敢ないものである、醫藥看護に疎略はなかつたが、金の力でつなげないのは人の命、病夫と愛兒を遺して終に此世を逝る、猪之助此時十三歳であつた。

其九

藩主豊信は名君であつたから、家來に對する平生の教訓が善い、従つて文武の研修怠るもの無く他藩への聞も却々よかつたが、武に狂するの青年は、常に蕪を樹て派を結び、各自其田其原の争ひに、腕を揮ふて屢々格闘することがある、城下の武士屋敷が、方角から割出されて、南組

北組上組の三つに分れて居る、何も喧嘩を仕るといふて、分けてあるのではないが、自然の勢、己がといふ意氣のある以上、何うしても刺戟は免れるものではない、また年に一二度は、必ず備さるゝ武藝の競争にも、いづれの組から出たものが、一番に強かつたとか、弱かつたとか言はれるので、それか一つの觸みになる、誰にしても、弱いといはれるのが厭だから、懸命に勉強するのが嵩じて来て、終には互ひに喧嘩腰になる、強いといふ名譽を得たものが出た組は、それを無上の誇として、組の氣勢を張る、果は路上に偶然出會して、道を譲らぬといふやうなことになる、それが爲めに格闘することもある、しかし、重役から嚴重に申渡されて、たごへ格闘は爲ても、刀槍棍棒の類を用ゆることを許さぬ、これを犯すものは、相當の處分を受けるのである、格闘は毎度のことであるが、決して生命を落すものはない、腕力のあるもの、殊に柔道の心得あるものが、いつも勝利を得るのである、世間に言ふ所の決闘とは、全く違ふては居るが、それでも、青年壯者の元氣は、之れが爲めに大に振るのである。

猪之助既に長じて十七歳、南組一方の旗頭、體格は寧ろ見すばらしい位だが、いつも意氣で人を壓して居る、それに柔道は却々やれるので、他の組と喧嘩があれば、何時でも陣頭に立つて、眞みの花を咲かせて居たのである『やア……皆な居つたか』二十三人集つて、腕押し景氣をつけて

居た連中が『乾か……何うした』現在、中組と北組の奴が、七十八人やつて來居るぞ』『フーム、それア愉快ぢや』『腕を捲くり腕を張つて乗出するものもある』拙者が、中組の山田に途中で逢ふたのぢや、退けと……でも退かんから、斯う胸倉を採つてな……』『ウム……愉快々々』『やツと聲をかけてな、抛げつけてやつた』それから何うした』山田の奴、却々強いから、起き上ると、組附いて來たさ、右の足を入れて、斯う體格を曲げて捨身すると、それが極つて山田は倒れたさ』ありやア、貴様の十八番ぢやからな』そこへ北組の奴が通りかかつて、口を出し居つたから、一喝してやつた』愈々愉快ぢやな』段々談判の末之れから組の勝負といふことになつたのぢや』『やる可しく』『一同ゆくな』そりやア行くさ、千載の一遇ぢや、二組が一つになつたのをやりつければ、南組の譽れぢや』『血氣の壯者、事あれかしと待つて居たのだから堪まらない、忽ち準備が出来る、それツと、一同に押出した。

中組北組にも弱いものばかりは居ない、相當に腕力のあるものも居る、事は北組から始まつたのであるが、南組の平生威張るのが、洵瀨にさわつて居る所だ、中組は自ら進んで、北組と協力して、南組を捻つて仕舞うといふのである、既に日の暮れて、道の暗いのは此上もない好機會と勇みに勇んで繰出す、兼て猪之助と打合せた、城の西南に當る野原へやつて來た、人の居る様

子だから、足を留めて控へると、闇中にすくと立上つた一人』よくやつて來居つたな、乾ぢやさア來い』跡には幾人か立つて居る』それツ』號令をかけたものがある、乾の前には三四人でつめよつた』やツ』えいッ』ドタン、バタン、はや格闘は始まつたのである。

其十

闇中の格闘、いづれが敵やら味方やら、少しも解らないので、中組と北組の苦みは普通りでない、殊に人数の多い丈け、却つて不便を感じる事が多い、猪之助は豫め之れを謀つて、合語をつくつて一同に吞込ませたのである、それから左の平首に、白布が巻いてある、味方は直に見分けのつくやうにして、合語と白布を目的に、味方を扶けて敵と闘う、人数の少ないのは、各自の決心を強くする唯一の味方である、格闘の時間も長かつたが、敵の方に進足のはやいものがあつて思つたよりは速く勝敗は決した、如何に柄物がないからといふて、野原の格闘であるから、双方ともに負傷人はあつた、南組は凱歌を奏して、その夜は、家にも歸らず、鯨飲する馬食をする、あらい騒ぎで一晩を明かした。

然るに北組の中に、重役の子供が居て、生憎にも右腕を折つたので、歸つてからの騒ぎが大き

くなつた、夜が明けてから、段々詮議をすると、悉皆仔細が解つた、格闘は藩から許した譯ではないが、自然黙許の事になつて居たのである、負傷を仕たからといふて、今更に騒ぎ出すのは、感服の出来た話ではないが、さればとて、自分の子供が負傷を仕て見ると、親の情として黙止つても居られないものか、嚴しい詮議もはじまつて、結局南組のものが、曲いといふことになつた、喧嘩の發頭人が乾猪之助だといふので、まづ奉行所へ呼ばれる、平生から亂暴の名あるものも二人呼ばれて、調べを受けることになつた、所が、少しも悪びれた様子はなく、腕を折つたのは拙者である、三人が三人皆な自白に及ぶ、折られた腕が一本で、折つたものが三人、これには調べの役人も弱つた、兎に角、重役の指圖ある迄、禁足といふことになつて、親族のものに預けられた。

罰せられても南組は評判がよい、北組と中組は、格闘に負けて藩府に訴へたといふので、到處に悪評紛々、子供の喧嘩に出る親の馬鹿面が見たい杯と、口々に罵るといふ、禁足されて、閉門同様の猪之助には、諸方から見舞のものがやつて来ては、頻りに懇請て呉れる、猪之助の鼻は高くなるばかり、之れに反して、負傷人の方は、義理一遍の浮世の交際から来る、見舞の人ばかりで、門前を通る人は、皆な冷笑してゆくといふ有様だ。

人並はづれた悪戯者の猪之助は、禁足の命令を受けて、その體屈さは一方ならず、恰も、それが夏季であつたから、邸の裏手に流るゝ小川へ飛込んで、游泳のを此上もない樂みとして、毎日水遊びに撒尿を流して居る、水が耳へはいつて、それが原因で熱が出る、耳の底が何とも音はれぬ痛さ、一晚は堪忍で通したが、翌日は醫者に診て貰つた、療治は受けたが、何うも癒らない、そのうちに禁足も解かれて、何處へでもゆかれるやうになつた、けれども耳の坎々といふのは癒さない、今では費者も同様、醫者も少し持餘した『これは癒らんですか』左様……どうも少し至難かしいですな』さうしても不可んですか』左様、質問がイヤに皮肉で、醫者も閉口して居る猪之助は膝を立て直した、醫者は何をされるかと少し退いた、猪之助は、右の手指で鼻と鼻を掴んで、スーと呼吸を内へ吸ひ込んで、ウーンと力身ながら、呼吸をふいた、ウーンと鼻にひびいて、耳の底を何かで突かれたやうに、ピンと音がした、と思ふと、鼻が詰つたやうに、氣が清々して、耳が行通しにでもなつたやうに、その心地のよいこと、それに今迄聞へなかつた耳は、はつきりして何でも聞へる、蟻の嘯きでも聞へるやうになつた『先生……醫者は不自由なものです、獨り療治が一番利きます』流石の醫者も口を開いた限り。

(112)

自分免許の荒療治が、意外の効を奏して、一旦聞へなくなつた耳が、悉皆癒つたのは不思議のことである、けれども時々發病しては惱む、すぐに例の療法を用ゆる、かくて廿四歳迄は、耳の爲めに苦むだが、それから、少しも發作らなくなつた、猪之助の病氣に對する行爲は、すべて斯んな風であつた、一日のこと、日比忠平と言ふ友人が遣つて來たので、鰻飯を馳走した、庭内の梅樹に半熟の實が繁々として、美事に枝も揺むばかりに附いて居る『オイ……日比、あの梅を見ろッ』『ウム……却々立派なものだな』『一つ喰るか』『可らう』猪之助は庭へ下りて、枝のまゝ、四五十附いて居るのを折つて來た『さア、うまいぞ』。

一つ取つて日比に渡す、日比は然ももうまそうに、之れを喰りながら、鰻飯を食ふて居る、猪之助が手を鳴らしたので、乳母が遣つて來た『何か御用で御座ますか』『鹽を持つて來て呉れ』『普通鹽で御座りますか』『この梅の實を食ふのちや』『オヤこの梅は、お庭ので御座います』『な様ちや』『そりやア大變です、何が大變か』『自分のものを取るに、さうして大變か』『いとゑ、梅を取るのには御隨意ですが、食へては不可せんよ』『何故か』『何故か』貴君、梅と鰻は禁物ですよ、同

(113)

時に食へると、生命にかゝはるといひます、それを食へるとは、飛んだことで御座います』哀れ日比は、もう大半食つて了つた『生命にかゝはると言ふが、そりやア大變だ』『何を言ふかッ、オイ日比、そんなつまらんことに驚くと、人に笑はるとぞ、乳母も思なことを言つては不可んよ』『思なことは御座いせん、世間で悪いといふことは、決してなされるものちやありません』『ウム……よし、もう爲んから、彼方へ行つて居てくれ、』押問答のうちに、日比が下腹を押へて顔色を變へて居る『オイ、どうしたか』『何だか腹が痛いぞッ』乳母は、それ見ると言はぬばかりの顔で『それですから申上げるのですよ、さア疾く醫者へ……』猪之助は立かかる日比を制して『まア待て……いゝ藥がある』前にあつた梅の實を二つ三つ頬張る、バリ／＼と核を噛み碎いてグツと呑み込んだ、乳母も日比も、眼を圓くして見て居ると、鰻飯をムシヤ／＼喰いはじめた、『まア貴君は何といふ亂暴なことを……』『亂暴ぢやない、少し待つてくれ、日比が死ねば已れも死ぬのちや、さうしたら、日比の氣も濟むぢやらうし、これから、他のものも氣をつけるぢやらう』乳母も流石に呆れて控へて居る、日比は腕を組んで、猪之助を見つめた『何うしたか、腹の痛いのは』『少し癒つたやうだ』『今に何ともなくなるさ』『暫らく話すうちに、日比の腹痛は、悉皆癒つて了つた』どうぢや乳母や、病氣は心一つのものぢや、解つたかい』乳母は一言もなく、苦

笑ひをして「貴君には叶ひません」。

猪之助の生長したのは意氣のみであつた、進するが如き才氣、縦横の辯説は、まさに天稟でも言はうか、氣と才に任せて、讀書杯は更にせぬ、所謂書は姓名を記するに足るで、一向に頓着しない、尤も兵學は、頻りに研究して、人に後れぬやうと心懸けた、されば、青年の中でも、何處もなく傑出した所があつて、いつも重役の噂にかかるやうになつて來た、時に安政二年猪之助は十九歳となる、突然藩命に依つて、江戸詰といふことになつた、鬱勃たる雄心、滿腔の才氣、ともに動いて、旅装も匆々、住み馴れし高知の城下を後にして、八百萬石の御膝下、大江戸の巷へ足を入れることになつた。

其 十 二

江戸の藩邸へ勤番となつた猪之助、弱年ではあるが、深く天下の事に眼を注いで居る所から、自然交際する人物も、他のものとは異つて居る、見聞は廣くなるし、人格は高くなるばかり、この江戸詰こそ、猪之助の身に取つては、此上もない利益であつた、藩主豊信の耳にも、いつか猪之助の名は響いて來た。

安政二年十月二日、勤務を終つて自分の小屋に下つて來ると、折柄友人兩三名が訪ねて來たので、酒肴を取寄せ、談論に時刻を移して居ると、何處ともなく、ゴーツと音がする、バタ／＼ドタ／＼戸外へかけ出す騒ぎ、『オヤ』と思ふ間もなく、マシンと一つ持上げて、グラ／＼と揺り出した、棚のものが落ちるやら、膳が踊り出すといふやうな譯で、非常揺れかたで、思はず猪之助も友人と俱にかけ出した、見れば、彼處此處火の手も上つて居る、ガラ／＼グラ／＼屋根の瓦は落ちる、家の潰れる音は物凄く。人の泣き叫ぶ聲は胸に響いて、大地の龜裂して人を吸ひ込むあり、倒れ家の下に挟まりて、親子相救ふに道なきもあり、その状況は、實に酸鼻の極である、名し負ふ開闢以來の大地震、戸外へかけ出した猪之助等も、一時は唯だ驚いたばかり『あッ……しまつた、猪之助は叫ぶ同時に、グラ／＼揺れて居る家の中へかけ込まうとする、友人は驚いて之を擁へた『危ない／＼』イヤ、お放下され、腰のものを忘れて來たのちや』見れば成程九腰である、しかし、瓦がバラ／＼飛ぶほどのこと故、友人は強て留める、それを振拂つて、猪之助は家の中へ飛込んだ、危険には違ひないが、武士の心懸は、斯うありたいものだ、大小は武士の魂ともいふ、その魂を忘れて來ては、死での後の汚名である、生存へれば猶のこと、寧ろ消されて了つて

も、未だ其方が面目である、猪之助が危険を冒して、大小を探りに戻つたのは、實に武士らしい仕方であつた。

さて猪之助は大小を擲指に、腰にぶツ込んで出て來た、友人は心配して居たが、これを見るより安心して、すぐに君公の御機嫌伺ひに出る、それから、誰れに申付けられたといふのではないが、東西に奔せ廻つて、火の元の注意をする、燈火は一切消させて、火鉢には總べて水をかけさせた、その迅速の働きは、後になつてから豊信大に感服して、猪之助を呼出して賞辭に及んだ、二十歳前後の青武士としては、出來すぎた沈着である。

この大地震の災禍は、實に慘憺たるものであつたが、殊に高名の人物が、枕を列べて斃れたのは、惜みても餘りあることであつた、現に、水戸藩の名士で、齋昭の烈公に侍して、常に奇抜な意見を吹込んで居た、藤田東湖が戸田忠太夫と俱に、小石川の藩邸で潰されて了つた、此二人と武田耕雲齋を、世に水府の三田といふ位である、東湖は一旦遁れて戶外へ出たが、母親の居らぬに驚いて、また取つて返し、母を扶けて出る所へ、ハツサリ上から潰れて來て、その儘になつたのである、地震ばかりなら未だ可いが、同時に火が起さる、それは何の邸でも皆な同じであつた、然るに、土州邸には火災がなかつた、それは猪之助が、さそくの働きからであるといふので、

猪之助の評判は豪い、加之大小を取りに返つたといふことが漏れる、ア、矢張り名家の末葉は違つたものだ、彼れは必ず名を爲すものになるであらうと一藩の評判がよくなる、年が若いから、幾分か増長の氣味で、長上と争ふこともあれば、同輩と衝突することもある、終には、國元へ返歸へさるゝことになつた。

其 十三

高知の城下を距る一里許の所に、神田の里と稱する、幽邃閑雅の地がある、猪之助は歸國を命ぜられて、高知へ到着すると、重役から謹慎の沙汰が下つた、此に於て、神田の里に閑居の身の上となつた。

嘉永から安政に引續いて、追々外夷が遣つて來る、通商貿易を迫られて、幕府も之れを拒む辭柄に盡き果て、終に條約訂結と迄なつた、長い間、鎖國令の下に在つた國民は、實に一驚を喫したのである、何うして徳川幕府が、如上弱音を吹いたものだらうか、何故一戦を試みて、我武威のある所を示さなかつたらうか、思へば齒痒いことである、見るさへ汚はしい外夷を近づけて、此神州の正氣を穢すとは、皇祖へ對しても相濟まぬことである、假し、幕府が條約を結んでも、

吾人が呼喚あるうちは、外夷などは、一步でも國內へ履み込ませるものでない、殊に朝廷の思召も如何あるか、その邊も分明らぬに、幕府が先んじて條約を結ぶ杯とは、以ての外のことである、正直に、如斯考へて憤慨するものもあつたが、中には之れを好機として、幕府を倒さうとするものもあつた、攘夷派にも却々種類があつて、分解すれば随分面白いものもある、しかし、その種類は幾つあつたにもせよ、攘夷論なるものは、幕府を倒すに於て、此上もない辭柄にはなつたのである、竟畢幕府の權威も衰へ、諸侯の心も放れて来た、自然の大勢は、幕府を倒さうとして居たのだ、そこへ外夷が来たので條約を結んだ、それに反對するものが出て来た、幕府を喜ばぬものが、わつと集つて来た、攘夷が看板で、倒幕の機運が此に開いて来たのである、然れば攘夷派が起ると、倒幕論がポツ／＼はじまつて来た、朝廷の思召は言へば、無論攘夷にあるのだ、其朝廷を笠に冠つての攘夷派であるから、鼻息の強かつたのも無理はない、それに可笑しいのは、元來鎖國主義といふのが、徳川幕府の方針で、既に二代秀忠三代家光と續いて、鎖國の布告を出して、諸侯を戒め、國民に嚴令して居る、日本人も昔は海外の志さかんにして、八幡船は屢ば山東省の沿岸を侵し、威海衛附近には、現時も猶ほ倭寇の碑なるものを留めて居る位だ、獨眼龍政宗の臣支倉某は、墨其古や羅馬まで、行つて居る、實に昔の日本人は豪かつた、それを、何の

了見か、段々やかましくして、徳川の代になつては、一層嚴量に取締つて、自國のものも海外へ出さないが、海外からも這入つて来ることはならぬ、大きな船をつくることさへ禁じて了つた、かうして國民を萎縮するやうにと育てる、國民も善く其命令に聞いて居た、其處へ、外國から段々やつて来たので、最早致方がない、餘儀なく條約も結ぶといふやうな事になつた、今度は國民の方で承知を仕ない、逆振に攘夷論を擔ぎ込む、幕府が困るといふ段取になつて来たのである。

諸藩に於ても、攘夷倒幕の議論が、追々やかましくなつて来る、一面には開國佐幕の説も出る、議論の分るゝ所、自然に派を結び黨をつくる、勢ひ軋轢も闘争も起きて來るといふ譯、土佐も其範圍は脱し得なかつた、猪之助は神田の里に閑居を仕て、頻りに天下の形勢を見て居る、集つて來るものは、眼の寄る所へ玉で、年少氣銳の若殿原、半夜ひそかに劔を採つて舞ふの有様、いつしか人の知る所となつて、神田の里は鶴の目鷹の目、重役からの密偵が油断なく警戒して居るやうになつた。

當時、山内藩の参政を勤めた人で、吉田元吉と言ふ傑物があつた、號を東洋と稱して、和漢の學に通じて、一見識あつた人物だ、この人の子が、現時の吉田正春である、明治十七八年頃に、外務權大書記官を任つて居た、妻君が獨逸人で、一時は正春も、外務省中の評判男であつたが、生活餘りに豪奢を極めて、終に負債山の如く、悪い罪名で入牢する、妻君は歸國するといふやうな譯で、可惜好漢も今は、那邊へ行つたやら、知る人さへ無い位である、父の元吉は、そんな華美な人ではない、殊に参政といふ重い役を受けて居る身の、憤みもふかく、藩中の評判も高く、所謂吉田黨と人に見られるほど、味方も多く従つて居たのである、學問もあり才識も群を抜いて居た丈に、時勢の刺戟を受けて、何事か爲さんの覺悟はあつた、それだけ、味方を求め人物を得んとに汲々として居る、猪之助が弱年者にも似ぬ、不敵の振舞あるを見て、心ひそかに望を屬して居た、江戸表から歸國の命を受けて、今は神田の里に閑居の身の上を見て、元吉は一日ぶらりと猪之助を訪ふて來た。

不平の蟲は抑へやうとするだけ、猶ほグイ／＼こみ上げて來る、滿腔の野心は制するほどに、一層高ぶつて來る、類を以て集る友人と相會しては、酒に議論に、日を送つて居る猪之助の閑居へ、参政ともあらう身の吉田元吉が、前觸れもなく、突然訪ねて來るとは、實に意外のことである。

ると、思ひながらも、取敢へず客室へ通して面會する『汚穢しき茅屋へ善くこそ御出下されまし
た』イヤ、その御挨拶では痛み入る、實は郊外散策の序と、申しては御無禮ぢやが、鳥渡た訪ね
申した次第で御座る『御重役の御尊來は、猪之助の面目で御座ります』今度の不慮の御災難か
ら、御不自由の御身の、何とも申上げやうも御座らぬ、しかし、御謹慎のほごも見へたれば、
不日よき御沙汰も下ることで御座らう『身の不肖が招いたる今度の御沙汰、謹んで赦免を待つ
外は御座りませぬ』畢竟は、不風の御精神あつてのこと、武士の魂は、左様ありたいもので御座
る』元吉は頻りに愛嬌をふりかけて、猪之助を慰める、誰れにしてからか、斯う持つて來られて
嬉しくないものはない、猪之助も、心のうちでは『ハ、ア何か仔細があるな』とは感じたが、ほ
ごよく會釋て居た、天下の事を論じ、時勢のことに話が移ると、多く猪之助の考へと違つて居
る、何うも佐幕開國の意見らしい、開國の是非は暫らく措いて、佐幕論とは怪しからん、苟も朝
廷今日の御有様を見て、徳川の専恣横暴を憤らざるものは、逆賊に均しい輩である、ア、元吉は
ごの人でさへ、かくも本末順逆の道を誤つて居るか、情ない次第である、ご胸のうちに嘆息し
て、元吉の談論を唯だ聞けばかり、自分は態と避けて意中を語らぬ、そのうちに元吉は再會を約
して歸つた。

四五日経つと、後藤良輔が遣つて来た、良輔は後日の象次郎、吉田とは肉身の問柄、猪之助が退助となつてから、俱に内閣へ列した一人である、頼りに吉田の爲人を賞揚するので、猪之助は直ぐに感じた、さては良輔も噂の通り、吉田黨の一人だなと、言を勵まして吉田黨を罵る、文弱の徒は俱に天下の事を爲すに足らぬ、士は馬革を以て屍を裹むの概が無ければならぬ、と迄に喝破して、吉田を滅茶々にやりつけた、良輔はニヤク笑つて聞いて居る、良輔その日は、それで空しく歸つた、敢て争はぬ所に良輔の巧味はある、翌日になつて赦免の沙汰が下つた、猪之助は案外の思ひをした『吉田といふ奴、却々喰へん哩』。

其十五

吉田元吉は非常の傑物であつた、然れども猪之助とは、何うも折合が悪かつた、吉田の方は、先輩でもあり、學者でもあり、猪之助に比較すれば、幾段か上級の人であつたから、務めて猪之助を引付けて、他日の用に供へやうと仕たのである、猪之助は亦吉田の人物には服して居るが、その主義が合はない、接近して来れば来るほど、吉田の味方にはなれない氣が起る、陰忍にして根氣強い吉田は、更に後藤良輔を以て、猪之助を引付けやうと仕たが、これも失敗に終つて、文

弱の徒は俱に天下の事を語るに足らず、吉田黨を罵り元吉を嘲ける、吉田は後藤から、このことを聞いて、却つて心ひそかに猪之助を味方に引入れんと焦るやうになつた。

吉田の祖先といふのは、永い間、戦國時代の歴史を賑はした、長曾我部元親の宿將吉田大備後といふた人が、それである、長曾我部の亡びて後も、此地に残つて居つた、山内一豊が遠州掛川から移封つて来て高知の城主となつた後も、長曾我部の舊臣は、到る處に割據して、屢ば再興を謀つたけれど、いつも計畫は水泡に歸して、終には土民となつて、山内の粟は食まんの覺悟然るに、山内は一豊の智に亞ぐに、二代忠義の勇と膽を以てして、よく國民を撫育し士人を禮遇したので、いつとは無しに、不平の徒を治めて了つた、大備後の子も終に屈して、忠義の臣となつて、馬廻格に召出された、爾來幾代か子孫相ついで、元吉に至つたのである。しかし元吉は吉田の正統ではない、百々の姓の家から出たのである。

嘉永の年、亞米利加のペルリが、國書を齎して渡來した、その國書の漢譯したものが、幕府から廻附されて来た、所が、情けないことには、藩臣の中で、一人として之れを満足に解釋し得るものがない、甚太しいものは、讀み下すことさへも覺束ないといふ有様、流石に藩主の豊信は驚いて、如斯こさちや到底仕様がなないと、はやくも氣がついて、藩廳の改革を爲る決心を興したの

でわる。

豊信とは、後日の容室のことである、この人、普通の諸侯と異つて、頗る決断を爲る方で、進取の氣象にも富んで居た人であるから、此一條に就て、ふかく嘆息して、何うも心細いことである、これ位いのものが、解釋し得ぬやうなことで、果して何事を爲すことが得るであらうか、畢竟するにこれは武の一方にのみ、心を傾けて文事の心掛けを欠くからのことである、武備あるもの必ず文事なかる可からず、他藩へ聞へても心苦しき次第である、其所で、學問の獎勵は、之れから充分に致すとして、まづ差當り、門閥を撰ばず、學識ある相當の人物を拔擢しなければならぬ、それには亦それで反對もあらうが、そんなこと今更いふては居られぬ、大決断を以て改革を行ふに非ざれば、他日の悔悟を残すのであると、此に於て、老臣に謀るの逸もなく、老公へは承諾を求めて、迅雷の如く、微臣拔擢を断行した、坪内求馬大崎謙藏片岡範三郎の三人を、まづ採用して左右に侍せしむることに仕た、謙三郎は下院議長を勤めた健吉の祖父である、さア驚いたのは、頑冥なる老臣共、打揃ふて豊信の前に出て、大に之れを争ふといふやうな譯、豊信は豫ての覺悟なれば、一々辯明して老臣を抑へつける、最後に登用したのが吉田元吉である、これには尠からず老臣も激昂して、各自決心の上で、御前へ罷出るといふ騒ぎ、豊信の鋒銜漸く此時より現れて來たのである。

其十六

土佐は元來長曾我部の所領で、その養ふ所の郎等は、世に聞へたる勇士多く、家康の陰忍深智を以てするも、之れを制御すること容易ならず、殊に主家の滅亡は、ふかく家臣の含む所である、本土と離れて、海一つ隔て居る丈、何うも始末が悪い、家康が天下統一の後、心にかかつたものゝ一つは、必ず此土佐であつたらう。

この土佐へ、しかも廿四萬石の大領へ、遠州掛川の六萬石から、一躍して跳込だのは、實に破格の昇進である、山内一豊なる人、非凡の功名あるに非ざる限りは、かかることのある可き筈は無い、探尋て見れば次第はあるのだ。

抑も、一豊の祖先と申すは、鎮守府將軍秀卿朝臣である、その十代の孫首藤刑部丞義通が後胤、但馬守盛豊の次男に生れたのが、即ち此一豊である、盛豊の生國は丹波であるが、尾張の國に移つてから、上四郡の領主織田伊勢守信安に仕へ、一豊に至つて更に信長に仕へることになつた、信

長は下四郡の領主織田大和守の奉行彈正忠信秀の子である、海道一の饒將今川義元を、桶狭間の一戦に討取りて、近國の大名多く其威に恐れて降り、猶ほ降らざるものは直に進んで討ち、信長の勇名今や天下に隠れなきに至り、勢ひに乗じて上洛した、即ち右大臣に昇進して、安土に城を築く、當時一豊は未だ微祿なれど、信長について安土に移つた、英雄豪傑は雲の如く起りて、朝に夕に干戈の止む時はなき、戰國の時代とて武士の表道具たる、刀槍又は乘馬に、競ふて良器を求むる風がある、或時、奥州から一頭の良馬を牽ひて來たものがあつた、安土の城下に開けた馬市へ來て、よき買主を求めたのである、今しばらくは事なきも、何時はじまるか知れぬのが戰爭である、聞けば奥州から良馬が來たさうだ、願くば之れを求めて、いでや一朝の役に立てんと、各自さきを争ふて見には來るが、誰れとて手を出すものはなく、價金を聞いて立去るものばかり、一豊も噂を耳にして、ひそかに見に來た、群集する人の後にかくれて、密と見る、見れば驚く可き天下の名馬、ア、此馬に乗つて戰場に一働き仕たならば、さぞかし、と思つて見て居ると、これも馬主の一人か「やア、佐吾市か、未だ其馬賣れましねへかね」駄目なこつて御座やすよ、天下に聞へた荒犬名、織田様の御家來ならと思つて、持つて來て見やしたら、矢張り買へねへさうで御座へやすよ「高價くは無いかね、黄金十枚と聞いては、二度と見る人は御座りましねへよ」

かね、兎のやうな馬の方が、賣れ行きは善うがすかね」さうで御座へやすよ、織田様の御家來に、此馬買ふ人の無へのは驚きやしたよ」四邊を憚からの高話し、一豊は今更に立寄りねば可かつたと思へど、後の祭りて致方はない、顔を隠して其場を去る、家に歸る途次も、熟々考へた「如何にも良馬である、何うかして彼の馬を手に入れたいものであるが、黄金十枚といふては、今の身分で何とも仕やうがない、それにしても情ないことは、織田の家來には買へまいと言はぬばかりの今の高話しである、他國に聞へても織田の汚名、ア、殘念な次第である」と、疾や立歸る我家の門邊、悄然として内に入る、妻は見るより甲斐々々しく「今日は又おはやいた歸り、さア火桶に火も澤山おきてをります」夫の顔を見て「お顔の色も普通ならず、退くに退かれぬ争ひの、胸を押へておかへりか、それとも氣分でも悪いのか、どうした理由で御座んすか、連れ添ふ妻に話せぬことも御座りますまい」膝を進めて尋ね問ふ、妻の顔を見詰めて、一豊は臆に宿る玉の露、拂ひも敢へず「斯うい理由ぢや」。

其十七

一豊が僅かに一頭の馬を購ふ金の無き苦みは、顔の色にまで現はれて、連れ添ふ妻に、根掘り

葉問されて、今は包みがたく、實は斯ういふ次第と、有りし始終を打明けての物語、妻は笑を漏らして『妻は又何事の起りしかと、胸を苦めましたるに、只だ一頭の馬のことで御座りまするか』一豊は稍や氣色ばんで『女子から見れば、僅かに馬一頭のことなれど、武士としては、却々の大事なり、た前の身に取つては、并一本ほごにも當らぬことながら、拙者の身には此上の苦痛はない、殊に近々、君公の御前に、馬揃の儀式もありとのこと、あれほどの名馬に跨り、御前に出でなば、嘸や肩身も廣きことならんに、さて許さぬは貧苦なり、残念ながら歸る外はなし』と、鬼をも挫ぐ一豊も、思ふに任せぬ金のことで、首うなだれて手を拱んだ儘、しばしは、無言になつて思案に沈む、妻は何を思ふてか、すつと立ち上り、奥の間へゆく、轉て再び出て來ると、右の手に一面の鏡を抱へて居る、縁端の所へピタリと坐つて、履脱石の上へ鏡を置いた、はて變なことを爲ると思つて居ると、すぐ側にある手合の石を取つて、ガチ／＼と、力にまかせて叩いた、磨き上げた鏡の裏へつけた木がバラ／＼になつて取れる、まさに狂人の沙汰だ、一豊は走り寄つて『これッ……女子の魂とする鏡を打割つて何とする、狂氣でも致したか』といふ、狂氣は致しませぬ、仔細あつてのことで御座りまする』と、如何なる仔細あつてのことか』と、これを御覽下さりませ』打割れた鏡の裏から出た紙包、手に取つて振へば、ピカリと光る山吹色、ヒ

ラ／＼と散るは黄金十枚あまり、それはど驚く一豊、妻は莞爾、妾が當家へ参りまする時、實父の申しまするには、この鏡の裡に用意の金あり、身にも生命にも代へられぬ、一大事の時は開き見よ、假し生活に差向への起ればとて、決して手をつくるなよ、と深き戒を今日まで打守て居りましたが、承れば織田様の威勢にも拘はる大事の場合、一つには亦本夫たるものゝ出世の端緒かねて、實父の申付は、如斯る時のことこそ、と思ひ定めて打割りました此鏡、秘め置かれし黄金は、實父の赤心臨し土産で御座りまする』始終を聞いて一豊は、男が心掛けの厚くして、妻も流石に其子のこととて、今迄に幾度か、飢渴に迫つたこともあつたに、ヒツと堪へて、鏡のこと杯、噂にも言はなかつた、その氣丈には、我妻ながら天晴なりと、心からなる喜びの色を見て、妻は獨更嬉しさ限りなく『ア……はやく此黄金を以て、その名馬を求め、他日の御出世祈りまする』と、それでは、之れを借り受ける』妻のもの、貸すも借りるも御座りませぬ、時刻の延びぬ内に、はやくたいで遊ばせ』急ぎ立てられて一豊は、彼の黄金を懐裡にして、早速名馬を求めて來た、これから毎日乗馴して、いざといふ時の役に立たうの覺悟、その後、間もなく信長よりの沙汰があつて、馬揃の式を行ふことになつた、家臣は何れも愛馬を率ひて御前に出る、さしも廣々たる馬場も、空地なき迄に詰めかけし武士の、乗りたる馬に、難を言ふ可き駄馬のあらう筈

はないが、中に一際眼につく馬がある、乗試むる武士の姿も雄々しく、信長はるかに之れをみて何者ぞとお尋ねあは、山内一豊にて候と、左右のもの答ふるを聞いて、さても心掛の武士よと感賞の沙汰あつて、一豊の面目此上もなく、數度の戦功を重ねて、遠州掛川の城主となつて、六萬石の大名になつた、本人に力もあつたらが、第一に妻が内助の功多きは、歴史に通ずるものゝ知る所である、これが土佐の山内家の祖先である。

其十八

慶長四年の七月は、家康自ら大兵を率ひて、上杉景勝を討つ可く、奥羽兩州へ出陣するといふ素晴しい勢で、江戸を發した、山内一豊は、其先鋒を申付つてすでに、秀忠に従つて、野州宇都宮に迄來て、滞陣して居たのである。

景勝の帷帳には、直江兼繼と言ふ名將があつて、これが亦決して侮ることの出來ぬ人物で、家康の恐るる所は、景勝よりは寧ろ此兼繼の方にあつたのだ、兼繼は景勝に臣とし事へて居たが、初め謙信に事へ、景勝に至る二代の臣である、膽氣人を歴して夙に天下の志あり、秀吉の亡き後は、石田三成と深く結び、先づ家康を討つて、豐臣の天下を安くせんのか考、景勝に説いて之れ

に同意せしめ、家康を謀つて、景勝を討つ軍を出させ、その處に乗じて、三成は西國に兵を擧げ、家康の狼狽するを待つて、東西併せ撃つ策を講じたのである、流石老翁家康の如き人ですら、これには一ばい喰はされて、愈上杉征伐といふことになつたのである、家康の本營は、小山驛に在つて、先陣は既に宇都宮に進むた、この時、一豊の妻から密使が到着する、その密使となつたものが、頗る氣の利いた男で、それとも、一豊の妻が工夫を仕たものか、密書を捻つて、冠笄の紐に結び交て、願に結びつけ、人に悟られぬやうにして遣つて來た、一豊は之れを受けてひそかに思ふやう、之れは確に大阪の變を報じて來たに違ひない、それは出發の時、妻と約束がある、大阪に變ある時の外、決して何の音便もせぬと言ふことになつて居る、然るに、今この使者は、如何にも一大事を齎した容子だ、笠の紐から離した密書を開かず、その儘、小山の本營へ來て、家康に謁して之れを渡す、家康は開いて見ると驚いた、石田三成が事を起したこのことである、豫て覺悟のことと言ひながら、かく迄に迅速の手等を、三成がつけやうとは思はなかつた、殊に、前には上杉の大敵を控へ、氣のゆるせぬ佐竹も居る、一步を誤れば、則ち狹隘の難義に陥るのである、加之に、大阪に此變が起つては、従いて來た武將のうちにも、大阪城に妻子を質とし残して來たものもある、はやく知つたればこそ、曲りながらも處置は決かう、まづ他に

知られてから、自分が知つたのでは、處置もつきかねる、一豊が之れを開かずして、手渡しに仕て呉れた、此信切と功とは、家康の忘れかねる所である、秀忠に跡を任せて、家康は一步さきに引返へす、直江兼継は大坂より報を得、且は家康の陣營の稍や動けるを見て、逐討にやりつけるつもりであつた、然るに、景勝が此策に不同意だ、謙信以來の義を以て立つ上杉が、かゝる時の逐討は、チト卑怯である、戦に勝つても、不義不仁の名は取りたくない、といふので、兼継の意見を用ゐず、終に長蛇を遣して了つたのである、兼継が胸中の煩悶、思ひ見る可しである。

關ヶ原の一戦、天下の事此に定つて、愈よ家康の世となつた、けれども、人心未だ全く家康に歸せず、到る處に、反抗の氣は燃へて居る、殊更、四國には蜂須賀があつて、豊臣の舊恩は、如何なる場合に叫ばれるか判らぬ、長曾我部の遺臣は、慄慄惴惴にして、敢て家康に降らぬ、恐る可きは、差當つて四國である、此に於て、一豊の働きに酬ひ、併せて四國の鎮撫に爲るの考案から、改めて土佐の太守として、廿四萬石の大名に取立つることにして、詩人頼山陽の所謂「一條笠繁八行字、博得海南千里山」とは之れを吟つたものだ、これぞ山内家の武運が開けた創始である。

其十九

一豊の土佐に入國するや、直に城地の撰擇を爲て、舊の長曾我部の築きし、大高城の跡に構ゆることと仕たのである、江之口川と鏡川の間に挟まつて、動もすれば、出水の爲めに苦むことがある、元親も之れに依つて、浦戸に居城を移したほごであつた、然るに、美濃國岐阜の城主織田氏の國老たる百々越前と言ふ人が、關原の一戦に志を得ずして、浮浪の身となつて居るのを、傳手を求めて召抱へた、それが多年、岐蘇川の水に苦むで來た経験から、治水のことに詳しい、大高に築くとすればまづ豫め治水の策から仕てかゝらねば不可ん、地理の上よりすれば、海陸の利あつて、四通の便が備はつて居る、この地より他に、土佐の領主として、城を構ゆる所はない、此に於て越前は、自ら地を相し水流を調べて、一大土工を起し、江之口川の上流を堰き留め、堤防を長く繞らして、大高城の南方に、水を回流せしめて、此に愈よ安全なる高知城は築かれたのである、表高は二十四萬石でも、實收に於て四十萬石位はある、しかし、之れが戰場の功名から獲たものでなく、畢竟が關ヶ原の變を、家康に耳語したからであるといふので、自然武將の間に輕蔑の氣が充ちて、山内の家來も、何となく之れが爲めに面伏の風がある、何時か機會を得て立派に武功を建て、此耻辱を除かねばならぬ、と只だそればかり心掛けて居る、二代の忠義と言ふ人は、一豊の弟、康豊の長子で、これは亦、武力一遍の人であつた、山崎闇齋は嘗て忠義を評

して、榮紘の亞流也といふた位である、一豊入國の後も、元親の遺臣が、到る所に勢力を張つて更に藩命を用ゐぬ、何うしても、此輩を一掃して了はねば、國內を治めることが出来ない、忠義は一策を設けて、種ヶ崎の濱に、角力を催させた、腕力自慢のものは、遠きを厭はずして集まつて来る、忠義のそかに、武道の心得あるものを幸ひ、群集のうちに隠れて待つ、元親の遺臣も追々集つて来た、目星をつけて置て、それツといふ一令の下に、忽ち數をつくして捕縛した、抵抗の甚だしかつたものは、その場に斬捨てる、事固より不意に出たので、さしも頑強なる連中もむざむざと手込になつて、終には殺し盡くされた、角力場へ行かずに居て、思はず危急を免れたものが、これは怪しからぬと、彼處此處に寄合つては、秘密に相談をはじめた、忠義は自ら部下を率ひて、その密會を物色すといふ譯、一日城の追手先に、國政の非と忠義の慘虐無道を鳴らした高札を建てたものがあつて、末の方に十八名が連署して居る、實に大膽な仕方である、忠義之れを一見するや、更に猶豫なく、十八名を引捕へ潮江村に於て、磔刑に行つて了つた、斯ういふ調子で、片端からミシ／＼殺して了う、元親の遺臣も、終に閉息してしまつた、此忠義が三代將軍家光の上洛に方つて、京都へ乗込んで拜謁した、二條城中の舞宴に侍しての歸途、あまりの暑氣に堪へかねて、衣冠装束を脱ぎ、赤裸のまゝ、馬上で浴中を押廻したといふ、頗る付の亂暴大

將、けれども、此人でなくては、到底土佐を平定することは、出来なかつたのだ、一豊より十三代が、即ち豊信である。

かゝる歴史を有する山内家のことであるから、長曾我部の家臣は、假し二百年の長い光陰が経つたにもせよ、あまり感心はせぬのだ、それを豊信が知りながら、吉田元吉を拔擢しやうといふのだ、老臣の苦情は、固より起るのが當然である。

其二十

長曾我部の舊臣とさへ言へば、一も二もなく忌嫌ふ習慣のある、殊には、それに備ふる爲めに、跡なからず忠勤を勵みたる人の子孫としては、吉田の榮進に一應の異論はある可き筈である、老臣は豊信の前に出で、懇々と其不可を鳴らした、然るに、豊信は名君であつたから、時勢の進むに従ひ、人材を登用することの必定を説き諭し、今は空しく舊態を守つて、四國の一隅に蟄居す可き時機でない、出来得可くんば、天下の事に與かる可き覺悟がなければならぬ、それには、外夷の書面、しかも漢譯したものすら解し得ぬやうなことで、到底何事もなし得るものでない、吉田を登用するは、彼れの奇才と學識に待つ所以である、もし、汝等の推舉するものにして、吉

田の如きものあらば、身分や家格のことは言はぬ、速かに容用いたさう、二百年の昔に於て、相争ふた憤恨を、猶ほ今日に喋々するのは、決して賞めたことではない、ふかく時勢を考へろ、と喝破した所は、流石に後日の山内容堂、豪い所はあつたに違ひない。

老臣の不平が終に収まつた位であるから、更に其影にかくれての不平は、従つて春の泡雪のやうに、今はその跡をさへ留めなくなつた、かゝる事情から抜擢された吉田は、全く豊信の眼識あやまらず、學殖ふかく、才識はすぐれて、その言行は群を抜いて居る、忽ちにして味方も出来る、爲人を見て遠く來り和するものもある、朝比奈泰平市原八郎左衛門由井猪内野中大内大崎健藏神山佐多衛後藤良輔福岡藤次杯いふ連中は、所謂吉田派と稱されたものである、良輔は象次郎のこと、藤次は今の孝悌、神山は後に豊信に代つて、政權返上の建白を將軍に提出した一人である、かくの如く、吉田の勢力は、口一日と加はつて來た、自然に専斷もある、隨て勢威に任せて他を壓すること、時としてはあるやうになる、此勢力に拮抗して、吉田をふち落してやらうといふそれに、吉田が和宮降嫁について、長州の永井雅樂と通じたといふやうな、種々の事情と、反抗的義憤に驅られて、非吉田派なるものが、何時か出來て了つた、小南五郎右衛門平井善之丞は、その重なるものゝ一人、乾猪之助も無論のことである、それを知つて居るから、吉田が屢ば、猪

之助を訪ふて學問をすゝめる、猪之助は専ら武に重きを置いて、文字に疎い傾きがある、もし、これが學問したら、自分の味方になる男だと思込んで、頻りに學問をすゝめるのだ、然るに、猪之助は其勸告を退けて「武士は武道の修練があつて、いざといふ時に、君公御馬前の一時のお役に立てば宜いものである、武士の學問は、文弱の弊に陥りて、却つて不可ぬものぢや」と言ふ議論で、一氣に斷つて了う、吉田も終に手を退いて、只だ時々後藤良輔が遣つて來る位のものである、吉田は偏へに此一派の反抗には注意を仕て居た、けれども一徹の連中が多いので、之れには閉口して居たのである。

この非吉田派の牛耳を取つて居たのは、當時江戸詰の一人で、武市半平太といふものであつた、夙に千葉周作の門に入つて、劍術は一流の奥儀を究めたものである、狀貌雄偉、一見尋常の人にあらず、尊王攘夷の大義を唱へて、諸藩の有司には疾くから知られて居た、得意の詩は「戎夷塵海事方急、驚馬加鞭馳赴難、巨礮轟々如裂地、鯨濤沸々似崩山、因循君子忽飛魂、切迫頑主稍解顏、一臂奮揮夢驚覺、孤燈明滅雨潛々」といふのである、また「花仍清香愛、人以仁義榮、幽囚何可耻、只有赤心明」といふ詩は、藩命で入牢した時の作である、この武市が、和宮降嫁の一條に激して歸國の後、終に吉田派と大衝突したのである。

徳川十四代將軍家茂が御簾中のないのを僥倖に、皇妹和宮様を申受けて、御縁組を仕やうと言ふ計畫があつて、美事に之れが成功した、京都でも随分至難しい問題ではあつたが、畢竟は前例のあることで、皇室から臣下とも言ふ可き將軍家へ降嫁するといふことは、不都合なやうなものゝ、前例があつて見れば可からうといふことに結局して、愈よ降嫁と決する、前例といふのは、正徳五年九月廿五日、當時の陛下、靈元天皇第十七の皇女八十宮様が、七代の家康に降嫁の御約束整ひ、翌六年七月御入興といふ四ヶ月前に將軍が薨去したので、哀れ八十宮様は、婚儀を行はせられずして、直に後室と相成られ、後に之れを淨林院殿と申上げた、かゝる例のある以上は、敢て差問はあるまいといふので、此に和宮様のことも一決したのである『當今の御妹和宮御方御縁組御弘め被仰出之、御下向の次第は、來春たる可く、以來は和宮様と稱し奉る可く候』これは萬延元年十一月一日、老中安藤對馬守が在府諸侯總發城の席上に於て、發表せられた沙汰書である、御縁組御用掛は、久世大和守遠藤但馬守の二侯であつた、表面から言へば、只だ之れまでのことではあるが、その實は、裏面に種々の込入つた事情が伏在して居たので、申すも恐れ多きこ

とながら、この縁談は、その事情の犠牲になつたのであつた。
嘉永安政以來、攘夷勤王の論さかんに、開港佐幕の説と競ひ争ふ、そのうちにも、亦小分派があつて、或は攘夷佐幕もあれば、或は勤王開港もある、それが議論といふよりは、感情とか野心とかいふものから、割出されたのが多くて、紛々擾々、國內の統一は紊れて、外からは夷人が頻りに遣つて來る、何うも、之れを此儘に仕て置ては、皇國の爲めに宜しくないといふ所から、この争ひも詮じ詰て見れば、江戸と京都の感情が衝突してからのことであるから、寧ろのこと、將軍に室なきを僥倖、京都から迎へることにして、縁組の上から、感情も和げ議論の疏通もはかり、皇武合體の實を擧げること仕やう、さうなれば、將軍家も安心、朝廷も御都合あしかるまじく、従つて皇國も安靜、四方八方おめでたいといふ譯である、といふやうな事情から始まつた、御縁組であるから、多少の議論も免れぬ道理、しかし、それは何うか斯うか、抑へつけて、大體の纏まりはついたが、何うしても決定ないのは、浪士や有志の處分である、これは普通の鎮撫では抑へられぬ、殊に、攘夷勤王の一派は、之れを以て、朝廷を蔑如にした致方であるといふて、非常に憤激する、皇武合體杯とは、耳にするも穢はしい、縁組から朝廷を欺瞞さて、開港の條約を定めやうとは怪しからぬ、皇武合體論者は、國賊に肉しいものであると、果は不穩の企さへあるや

うになつた。

抑も此皇武合體論は、長州の永井雅楽が、最も熱心に唱導したので、水野越前杯を説きつけたのはこの、永井の力である、されば、長州の有志にも、永井を嫉むもの多く、現に久坂玄瑞の一派の如きは、永井の歸國を待つて、途中に要撃の準備さへつけたのだが、道を取違へて終に果さなかつたのである、しかし永井は、之が原因になつて、後日に處分せられたのだ。

武市半平太も、皇武合體には尠からず激した一人である、然るに、猪之助からの言信に依つて、吉田元吉も合體論者の一人であつて、永井には無二の友である、といふことが知れた、勢烈火の如き半平太、かゝることを聞く上は、もはや黙して居られぬ、長亭短屏幾百里、三寸の草鞋に身を託して、飛ぶが如くに土佐へ歸る、腰間の秋水は鏗鳴が仕て居る。

其二十二

皇武合體論は相當に勢力ある議論であつた、事無かれ主義の人は、多く之れに同意したのである、併し、此に一つ困難な事情は、攘夷派を吸収することの出来ぬ一事である、皇武合體といへば、つまりが江戸と京都の調停方略なのだから、何とか纏りも決かうが、左様なると攘夷論は如

何するか、これが至難かしい問題である、幕府は既に外國と條約を結んで了つた、朝廷では之れを許さぬと言ふ、却つて攘夷の詔勅は、毛利島津始め廿四藩に降つて居る、それを何とするか、幕府では、無論それを宛込んでの皇武合體論、結婚一條も、それが産み出したものであるから、條約の聽許を求めて來るに違ひない、皇武合體が實地に行はれると、否でも條約は許すことになる、それでは、この清く美しき、神州の正氣を外夷の爲めに汚されることになる、こは由々敷一大事なりとあつて、攘夷黨は擧げて、皇武合體に反對すると言ふ傾きになる、幕府は之れを抑へることに苦むだ、また抑へ得るものではない、とは言ふものゝ、合體論も却々の勢力で、諸藩のうちにも、事を好まぬ溫和派の潜勢力はある、長州藩でも、吉田元吉を中心とせし、所謂吉田黨なるものは、皆な合體論に傾いて居る、吉田が聚いから、よく人心を收攬して、巧みに團結をつけてある、されば、土洲藩に於ける合體論は、随分力あるものであつた、それに山内の祖先と、徳川の關係が、前回に述べたやうな次第であるから、自然徳川の利益をはかるやうになる、これは致方が無い。

吉田の控邸へ訪れたのは、江戸から立歸つたばかりの武市半平太である、客室に通して、まず寒暖の挨拶も終つて、例の合體論に及ぶ、武市は急激なる攘夷勤王黨の一人、殊には合體論に激

して歸國したのであるから、所論の反對するは止むを得ない「今に及んで合體論を唱へるものは、我皇國の賊で御座る、誰れ彼れの容赦は御座らぬ、片ツ端から斬捨てる外はない」意氣天を衝くの存様、吉田は一向に驚く容子もなく「熱情の進る所、御尤千萬で御座る、しかし、武市氏ふかく御考へ下され、合體論の可否は暫らく措いて、それが爲めに、人物の正邪までも決めて了うのは、聊か過まつては居るまいか、合體論は徳川の御爲ばかりでは御座らぬ、朝廷の御爲にも相ならうと存する、御承知の如く、外夷の渡來も日に其數を増すの今日、江戸と京都と立別れて、互ひに睨み合ひの姿、これでは國力を一致すること思ひも寄らず、泥浪の徒は、妄りに過激の議論を吐いて、朝廷と幕府の間を割けやうとつとめる、かくては一朝事ある時、何といたす御所存か、強いはかりが武士でも御座らぬ、少しは前後の分別も無くては叶うまいと存する、元來皇武合體と申すこと、今更ら言ふは後れて居るのちや、疾くに合體す可き筈のものが、疎遠かつて居たといふまでのこと、荒立てと可否を言ふは可笑しな譯で御座る」「イヤ、それは大に誤つて居る、朝廷は何處までも朝廷、合體杯とは怪しからんことで御座る、幕府が條約の處置に窮して、一時を彌縫する爲めの皇武合體、赤心から朝廷の御爲めに働かうとの儀では御座らぬ、長洲の永井雅樂と老中の水野越前とが、攘夷を唱ふる正義の武士を、取鎮めんが爲めの窮策に過ぎぬ、斯る議

論に同意致すものこそ、國體を辨へざる迂愚者で御座る」何處まで論じても、これを繰返すまでのこと、到底決極のつく可きものでない、その日は物別れとなつた、武市は怒氣紛々、胸のうちには、吉田の不義を繰返へすばかり何事か獨り點頭いて、ニヤリと漏らした叙しい笑は、果して何の爲めの笑であつたか。

其二十三

慷慨悲歌するのは、議論ちや無い感情だ、感情は議論で融解るものでない、攘夷派には、感情の強いものが、多く集つて來る、攘夷と言ふことが、元來感情から起つて來たのだ、その攘夷派に對して、議論づくで向つたとて、それが果して何の甲斐があらう、思へば愚なことである、中には、幕府を苦むる方略から、攘夷を唱へるものもある、これには亦如何なる名論を以て説いた所で無駄なものだ、それには、勤王論と言ふ本尊もあつて、これを破ることは、絶對に出來ないのである、この二つを結びつけて、幕府に當る杯は、實に策の巧みを極めたもので、幕府は恰も、翠九と咽喉を一度に締められたやうなものだ、佐幕派の振はざるも當然の次第である、吉田元吉の才と識を以てして、猶ほ武市半平太を説きつけることが出來ぬ、吉田から見れば、小僧に均し

き乾猪之助をすら動かすことが出来ぬつまり立場が悪いからである。

半平太の立去つた跡で、吉田は苦笑して「惜いことぢや、彼れ丈けの男で、この理窟が解らんといふのは、實に遺憾である、何とか致して説きつける工夫が無いか」と心のうちに獨り考へに沈む、それより四五日を経て、例の通り登城、役目を果して下城を爲る、存外に時刻も後れて、はや夕暮の、而かも此日は、朝よりの細雨、風も加はつて横に絲を曳くやうな、花は散つたが葉櫻は今が見頃の、雨にうたれて色も若へ、眺望も飽かぬ大手道、蛇目の傘に雨を除け、長合羽に身を纏ひ、城濠に沿ふて役宅近くなつた頃、はや日も全く没して、往來の人も絶へた、最前から立樹の影に瀆むで、人や待つらん、覆面して尻細の武士一人、はるかに吉田の姿を見るや、腰の一刀に反をうたせ、居合腰になつて待ち受ける、神ならぬ身の元吉は、かかる災禍のふりかかるとぞ、と知らぬ儘に、立樹の前迄やつて來た、バラ／＼と駆け出たのは、覆面の武士、さてはど吉田も、一步あとへ退がる一刹那「ヤッ」ばかりと閃めく一刀の光、氣合と俱に肩先へ、ざつとばかり斬込まれた「うむ」叫びながらも刀の柄へ手をかける、抜かせもやらす、飛込んで二の太刀は、横に拂つた一文字、腰車へ深く斬つた、流石の元吉も、重傷に堪まらず「あッ」ぶツ倒れる上から乗かかつて又一刀、虚空を掴んで断末魔、苦しき呼吸を吹くばかり。

仲間が「人殺しく」と叫びながらの注進に、吉田の家來は、各自得物を携つてかけつけた、この時は既に、凶漢の立退いた跡の祭り、只だガヤ／＼と騒ぐばかりで、東西に手を分けて、凶漢のあとを逐ふたが、更に行先が分らない、泣の涙で吉田を邸へ擔ぎ入れる、親類や知己のかけつけた時は、もう息は無かつた、學殖ふかく、武道にも暗からず、土州の名物と迄、隣藩に噂されて豊信侯の鍾愛も普通ならざりし、傑物吉田の一生は、かくて無慘の終了を告げたのである、時に文久二年四月八日の出來事であつた。

さしも、時めいた吉田黨も、之れで全く閉息して了つた、それに引返へて、猪之助は側用人として威勢もよく、小南五郎右衛門は吉田に代つて、君側の勢力家となつた、武市は此事變の後ち間もなく、豊信に従いて京都へ出る。

藩臣の議論區々にして決せず、重役の威信さらになく、脱藩するもの踵を接すると言ふ有様、就中此に五十人組と稱する一派があつた、間崎哲馬中岡光次郎河野益彌等を始め、豊信侯警護を名として、脱藩の計畫を爲る、重役の鎮撫も功なく、終に五十人組は脱藩して京地へ向つた。

光次郎とは慎太郎のことで、益彌は後ちの敏録である、間崎は號を滄浪と言つて、學者の慷慨家である。

文久の初年に於ける、京都の實権は、全く毛利侯の手に歸して了つた、毛利は此機會を利用して、飽迄も幕府を追窮せんの考、三條實美姉小路公知の二卿は、勅使として關東に下向せらるゝことになつて、毛利島津の二藩主が、その警衛を命ぜられるといふ、豊信も之れに先つて江戸に出る、例の脱藩五十人組も引續いて出て來た。

幕府の恐怖は、攘夷の勅使である、尊號事件の當時は、朝廷を左迄に思はず、勅使でも何でも、場合に依つては、叱り飛ばす位の威勢はあつた、が、最早この頃では、それも駄目になつて、勤王派の勢力動もすれば、幕府を壓して、幕府は勤王派を怖れて、何事も控目になる、斯うなると、益々つけ込まれる、従つて、幕府の貫目は日に薄れゆくといふ有様、所へ、三條姉小路の二卿が勅使として下向した、しかも毛利島津がその尻押とは、幕府に取つて之れほどの迷惑は無い、殊に毛利の働きは素晴らしいもので、攘夷論の吹込み法が巧みを極めて、諸侯の意は漸々動いて來る、勅使は嚴重に攘夷の沙汰を下す、即時お受を爲ると迫る、お受が出来なければ、違勅であると言ふ、幕府の當惑普通ならず、只だ一時免れに返事を延すばかりである。

今の時世から思ふと、實に腹の皮の捻れるやうなことがある、攘夷論杯は慥かに其一つであつた、斯う言ふことを眞面目に唱へたものだ、征夷大將軍と言ふからには、攘夷の御沙汰に従はねばなるまい、征夷は即ち攘夷である、斯様に言ふたものだ、それを又幕府の方では、立派に辨解が出来なかつたとは、何と面白い話ぢやないか、攘夷を征夷に共通させて附會する所は、勤王派も却々隅へ置けない、外からは勅使が迫る、内部では毛利が刺戟く、これぢやア幕府も堪えられない、終に兜を脱いで、攘夷の御沙汰を請けた、條約を結んで、通商貿易を許す一面に於て、攘夷の沙汰を請けるとは、幕閣に一人も政事家はなかつたものか、ホントも甚しである。

勅使の江戸へ着すると同時に、攘夷の氣焔は、愈々高まつて來る、殊に、毛利家の武士には、急激なる攘夷派が多かつた『敷島の大和心を人間は蒙古の使斬りし時宗』村田清風の歌を精神として、極端な攘夷論を唱へて居る、清風は吉田松陰の師であるが、その松陰の門下として、すでに同志の間に重きを置かれた、久坂義助高杉晋作の二人、さては周布政之助杯いへる傑物、いづれも、さかんに攘夷論を唱へたもので、幕府の因循、勅使の往來、かかることに日を送つて居ても、攘夷の實行は、いつのことやら分らない、寧ろそのこと、手短にヤツつけて仕舞へといふので、秘密に寄合つては相談を仕て居た、結局が、横濱へ乗込んで、夷人館へ火を放つて、片ツ端から斬

り捲くれといふことに一決した、實に其意氣は旺んなものである。

晋作と義助は、松陰門下の二俊と言はれた男で、晋作は勢烈火の如く、義助は冷静水の如く、晋作は兵を行るに巧みで、恰も天馬空を走るの概があつた、義助は文事に長じて議論に富む、周布に至つては、實に一代の奇才、麻田公輔の名は、當時の歴史を讀むものゝ知る所である、麻田は即ち周布の別名である、この三人が、手を取つて一つに働けば、何事も成らざるなきの趣きがあつた、井上聞多や伊藤俊介が、初めての洋行については、この周布が、その裏面にあつたので、充分目的を達することが出来たのである。

悉よ、實行と決したのが、文久二年十一月十二日の夜であつた。

其二十五

今日から思へば、攘夷の如き愚論が、何うして勢力を有つて居たかと、思はれるほどだが、つまり時代の關係から來た議論で、攘夷論は時代精神の發揚に外ならぬのである、之れに少しばかり色付を仕て、今様の理窟を附會たものが、先年議會を騒がした、條約履行論なるものである、だから、時代の變遷するのを、後年から見て、冷静に時代と人物の關係を見てゆくと、實に面白

い感想が浮ひて來る、彼の人、何うして彼様馬鹿な主張を仕たものか、この人も昔は、随分迂闊な論議を爲たものだから、種々の考へが出て來る、その間に、世態人情の遷移りや、社會と人物の關係状態や、極めて趣味の多い、活た歴史の研究が出来るのである。

現時の我邦に於て、實業家の巨傑と言はれ、第一銀行の頭取を爲て居る、澁澤榮一の昔を見たまへ、横濱の夷人館に焼打を仕かけて、幕府の狼狽する虚につけ込んで、上州高崎の城を乗取り、關八州を足場に、攘夷勤王の旗を上げ、自ら陳勝吳廣たらんことを期した、同盟の士は、僅かに百人未滿である、計畫の中途に破れて了つたが、よし破れぬに仕てからが、何うして百人未滿の人数で、こんな大望が出来やう筈が無いぢやないか、しかし、この意氣があつたればこそ、武州榛澤郡の藍玉屋の子伴が、一躍して大藏大丞となり、それから今日の地位を占し得ることになつたのである、それから、品川の東海寺に火を放つて、夷人を斬つた事件、これが今の伊藤博文井上馨田中光顯の遣らした仕事だ、彼等の今日を見て、この話を聞いた所で、果して眞正と思へるだらうか、彼等も亦澄したもので、文明の魁、開化の先達は、乃公であると言はぬばかりの顔付を止て、昔の放火殺人犯は、僕不關焉と澄し込んで居る、高杉晋作が、雨のしよば降る中を、差圖役になつて、彼等を率ひて行つた時のことを思ふて、さらに、彼等が此大事を眼前に控へな

から、品川の青樓に一夜を明したとや、事果て後ち、井上が唯一人、前夜の樓に引返して、暖かき春の夜の夢を食りたることや、彼れや是れやを思ひ廻らして、今日の彼等を見ると、轉た今昔の感に堪へぬであらう、時代の爲せる仕事には違ひないが、彼等の元氣も又た衰いものであつた、その元氣の産み出したものが、彼等今日の地位である。

閑話休題、高坂久坂の一連は、愈々横濱の夷人館焼打を決して、これを引ッ掛りに、幕府と外國に兵端を開かせ、動王攘夷の目的を果さうの所存、それには同志の糾合を充分につけなければならぬ、土州の武市半平太は兼て相談の間柄でもあり、氣節胆力、群を抜いて居るので、まづ此一舉を話して同意を求めた、流石の武市も之れには少し驚いた、計畫が餘りに突飛であるから、熟考の時間を與へて呉れど、其場を退き、漸々考へて見ると何うも面白くない、焼打が巧くゆくにもせよ、その後のことが、單に夷人と幕府との關係に留まるか、それとも、延いて朝廷に迄及ぶか、その邊の考へが何うもつかない、いづれにしても之れは穩かでない、何とかして中止させたいものだと、ふかく考へた末に、之れを小南五郎右衛門に打明けた、小南も、その無謀に驚いて、早速豊信に拜謁して、このことを言上に及ぶ、豊信は此時すでに退隱して、藩主は豊範である、豊範は毛利大膳太夫の養女を内室に仕て居る、その縁故があるから、小南が豊信に此ことを

言上したのである。

流石の豊信も、暫らくは考へに沈むだが、やがて一書を裁して、小南に使者を命ずる、小南は委細承りて、馬に跨り一鞭加へて、飛ぶが如くに毛利邸へ向ふ、さア雨が降るか風が吹くか。

其二十六

長防二州の領主毛利大膳太夫は、流石名家の末裔のこととて、三百諸侯のうちにあつても、評判の賢君である、島津は専ら勅使の警護をつとめ、毛利は偏へに幕府をして、攘夷の御請を爲さしむる爲めに、内部の周旋に力を注ぎ、越前の松平春嶽を説きつけて、閑老を抑へ將軍に勅使請を爲せやうと、それにばかり奔走する、幾たびか破れんとして、終に綱りをつけて了つた、幕府は外夷に對し、一面に於ては、開港貿易を約しながら、今また、攘夷の御請を爲る、實に前後矛盾も太甚しいものである、しかし、幕府に此矛盾を爲さしめたのは、毛利侯の壓力が強かつたからである、と思へば毛利の働きは衰いものであつた。

秘密は絶対に守れぬものと見へて、これが何時しか外へ漏れる、さア、攘夷派の氣焔は天を衝くばかり、幕府が此弱點を示したので、自然つけ込まれるのも致方がない、乍去、幕府は心から

の御請ではない、外からの壓迫に餘儀なくされたのであるから、御請は仕たが、いつ攘夷を實行するか、それは一向信用にならぬのだ、攘夷派のうちでも急進突飛なものが、焦りに焦つて、横濱の寄留地焼打を企てる杯は、これは何うも有りさうなことである。

「ハッ……松平土佐守殿使者小南五郎右衛門と申しまする者、只今見へまして御座りまする」老臣は之れを慶親侯に取次ぐと、早速御面會と言ふことになる、小南は案内に連れられて、御前に出る、遙か末席に控へて頭を下げた、「土佐殿使者……大儀ハッ使命の趣きは、何事であるか」「恐れたがら……」差出したるは、豊信の手簡、慶親は何事なるかと、開いて見ると驚いた、自分の家臣が、横濱へ焼打にゆく、と言ふのである「こりや、一大事ぢやが、他に何か土佐殿の御話は無かりしか」「大殿申付けに依りますれば、恐れながら、事天下の一大事に御座りまする故、臣下を以て御留あるは、却つて宜しかるまじとの儀、且は彼の人々の決心、鐵石の如くに御座りますれば、御當主様御自身に御出向の上、御留め然る可くとの儀に御座りました」「ウム、御尤の儀と存する、かゝる大事を、早速の忠告、満足に存するとの旨、よく申傳へ下され」「ハッ……委細……」小南は辭して歸る、慶親は直に老臣を以て、長門守忠廣を招く、豊信の書面、小南の陳述、委細を話して、直に麻布の屋敷へ駈つけ、一同を説諭し、暴擧のなきやう計へとのこと……

めつた、忠廣も之れには驚いた、一つ間違へば、天下の大事、家の覆滅、乗馬の用意をさせて、飛ぶが如くに麻布の屋敷へかけつけた、然るに、高杉久坂等は、既に出かけた跡である、時刻を謀るに、未だ品川を越して、いくらも行く間がない、それでは跡逐かけてと、一鞭加へて乗り出す、勿論従者も何もない、馬丁さへ間に合はぬ、馬は逸物、騎者は長門守、さすが巧者なもので、鞭を加へて、乗り立て、砂烟を蹴立て、駈け出す、鞍上人なく、鞍下に駒なきの有様、疾風の如く走せゆくほごに、はや鮫津も後に、鈴ヶ森の刑場も通り抜ける、左りは品川灣の海波靜かに、十三夜の月は、折柄の雲に掩はれて、朧にかすむ安房上總の山々、岸邊を洗ふ波の音、右手は一面の田畑にて、中央をかけゆく、馬上の武士一人、これが長防三州の若殿忠廣とは、何んなものでも氣がつくまい、飛ばすがほごに、大森もいつしが過ぎて、蒲田も近く、向ふに見ゆるは、馬上の武士十人あまり、さてこそ、高杉久坂の同勢なりと、はやくも見て取る忠廣は、咽喉も張さくばかり「オーイ〜」と呼びかけながら、益々馬を煽り立てる。

其二十七

この時の定廣と言ふのは、即ち後日の元徳侯のことである、山内忠信が此一條に就て、藩侯自

ら往いて留めよ、と言つたのは、抑も注意の行届いたものであつた、前年伏見の寺田屋に於て、薩藩士の同士打があつた、久光が自身に留めれば宜かつたが、同じやうな家臣を遣つたから、遂々斬合になつて、可惜有爲の武士を亡つたのである、豊信ふかく之れに省みて、藩侯自身に往いて留めよ、と促した所は、さすが後の容堂である。

定廣が漸く蒲田附近で、焼打連に逐付いた時、後背の方から、馬の足音はげしく逐來るものがある、これは大殿、慶親の命に依つて、定廣を補佐る爲めに、根來上總寺内外記山縣半藏の三人がやつて來たのであつた、この山縣は、明治になつてから、実戸璣と稱して、子爵になつた人である。

却説、焼打連は一切の手筈を定めて、武市半平太等の來るを待つたが、徒らに時刻ばかり移つて、更に來り合さぬので、然らば、と一同出發に及んだ、同志はすべて長州人ばかり、高杉晋作久坂玄瑞品川彌次郎赤根幹之允山尾庸三白井小助有吉熊次郎寺島忠三郎志道聞多長嶺内藤太和彌八郎の十一人、志道聞多は現時の井上馨である、途中から二手に分れて、品川志道寺島等は、先發隊として一足さきになる、久坂高杉等の後れた連中が、蒲田の梅屋敷の前まで來ると、後背の方から馬でかけつけるものがある、頻りに呼びかけられるので、一同待受ける所へ、段々近づ

く、見れば、これは如何に、若殿の定廣侯である、思はず一同「ハッ」と頭を下げた「しばらく待つ、申聞かす仔細がある」ヒラリと馬を下りた「此處は往來……那邊かに休息いたして……」定廣しきりに四邊を見廻す、山縣半藏進み出で「恐れながら言上いたします、この先に一つ梅園が御座ります、これで御休息遊ばしては……」「ウム、それは可からう、汝然る可く計へ」「ハッ」山縣は梅園を借受けの爲めにゆく、定廣一同を見て「久坂」「ハッ」汝等の組は之れ丈けではあるまい、人数が不足のやうぢやが「久坂も最早これ迄と諦めて高杉を見る、晋作は首肯いた、久坂は「他の者共は先發して、はや鶴見も越へて神奈川近くで御座りませう」「やッ……それは一大事ぢや、こりや、外記ッ、其方上總と俱に、早々かけつけ、一同連れ來るやう取計へ」「ハッ……委細」と語を残して馬でかけ出す、急ぐほどに、漸く神奈川の宿にはいらうとする所で逐ついた、一同は頻りに故障を言ふ、却々歸りさうもない、上總と外記は、交るく利害を説き、殊には若殿が、夜を侵して梅園にたまち受けの事を告げて、兎に角一度立歸るのが、臣下たるものゝ道である、懇々諭したので、終に屈服して歸ることになつた。

山内豊信は毛利家へ注意は仕たが、猶ほ心配のあまり、若殿の豊範と相談の上、林總吉誦訪助左衛門小笠原唯八山地忠七の四人を御見舞として、定廣の跡を逐はせた、忠七は元治のことであ

る、鬼將軍の名は、明治廿七八年の征清役に轟いた、子供の時、木登の悪戯を仕て居て、小枝に眼を突ツかけて、一目眇して居る、豊信は常に之れを愛して、侍臣として居たのだ、綽名が「ガンチ」即ち片眼のことである、或時豊信が忠七を呼ぶに「ガンチ」と言つた、忠七は他を顧みて返事をせぬ、「忠七……何故返事をせぬか」「私は山路忠七と申します、ガンチとは申しませぬ」豊信グツとまいツた、これから一層忠七を愛することになる「阿虎其名、面猛於虎、賤岳揮槍、蔚山嘯土揮槍嘯土肯言勞、驅敵乘勢如風雨、更有至誠報君恩、懷中匕首貫乾坤」とは豊信が忠七に與へた、自作の詩である、清正に比べられた忠七は、果して明治の鬼將軍となつた。
此一行も、やがて蒲田へ来る、神奈川へ行つた途中も歸つて来た、此夜の梅園こそ、實に意外の珍客に充たされて、さぞ梅の精も喜んだことであらう。

其二十八

焼打連の身にとつては、この上もない不思議のこと、何うして若殿が御出になつたか、この企てが露現筈が無い、何う考へても疑は暗れぬ、いづれにしても、若殿御自身の御出馬は恐れ入つた次第である、と一同は偏に恐縮して居る。

廣々とした梅園の中央に、涼臺を置いて、その上に若殿は座つて居る、神奈川迄行つたものも歸つて来て、十一人の頭数は揃つた、若殿の背後には、根來寺内山縣の三人が控へる、時は今霜月の中浣とて、梅枝に一點の花も見へぬが、却つて老幹古木の寂しい姿を、雲の切間から月が照らして、何となく趣味を添ゆる「余は定廣ぢや」思はず一同は顔を見合せた、毛利の家來たるもの若殿を知らんことがあるか、此一語には無量の意味を含むで居るのだ、即ち藩主あることを忘れたかの一喝である「幕府が攘夷の御沙汰に逡巡して居るのは余も齒痒く思ふのぢや、しかし、此際は忍耐するものの勝利と思へ、僅かに一諸侯の身を以て、破格の御沙汰を賜り、國事に盡力す可き旨の御委任あるといふ、かかる名譽を荷ふ上は、猶ほ更、一舉一動を慎まねばならぬ、お前方は今浪士の身の上なれど、公儀から見れば矢張り家臣ぢや、余と雖、決して浪士とは思はぬ、家の忠臣とこそ思ふ、攘夷の一事は、お前方の方を借りて始めて、その目的を遂げられるのぢや、藩主と家臣は、假會ば親子の如きものである、余は深くお前方を頼りとして居るに、お前方は却つて、余を疎んじて今宵の事に及ぶも、余に何等の打合せもなきは、長く怨みと思ふぞ……」「ハッ」と一同の頭は下がる、ア、何と言ふ難有い御言か、恐れ多いことであると、今更のやうに君恩が身に沁る「殊には今勅使藩府の折柄、かかる暴舉を企つるは、朝廷へ對し奉りても恐れ多き

事なり、假し、浪士とは言へ、お前方の過失は我家にも拘はるの大事である、まづ此際は思留まつて貰いたい、その成らぬと言ふ上は、止むを得ん、余は此場を去らず割腹いたすに依り、速かに此首を刎ねて、然る後に横濱へ赴く可し』と一語一涙、情迫り、感極つて、今は若殿も、言つきて一同の顔を、濡む眼元じつと見つめる、十一人の連中も、兩手をついて落涙に及ぶ『何共申分御座らぬ、此上は割腹いたして御詫致す外なし、御免ツ』と席を起つものあり、一同は之れを見れば、高杉晋作である、驚いて志道と寺島が取りついて『高杉氏まア待つしやい、それは餘りに短氣で御座る』久坂も進んで『死ぬ時は同じて御座る、お手前一人さきんすることは、兼ての約束に違ひ申す』しかし、只今の御一言を承はつては……『晋作待てツ、古人も、過つて改るに憚る無しと、暴擧と覺つて、余の言を容る以上は、何を苦むで割腹いたすか』高杉は悄然として座につく、久坂は靜かに席を進み『はッ……難有き君公の御思召も思はずまた勅使御滞府中の暴擧、何共恐れ入り奉る、ふかき御思召のほども相分りましたれば、このたびの一儀は、斷然之れにて思ひ止まります』若殿の喜びは普通ならず、久坂の手を取るやら、高杉を慰むるやら、一同へも御言を賜はるといふやうな譯で、そのうちに、東の方が明るくなつて來た、曉の風、一しほ身に沁て寒さは覺へるが、梅園を出て數歩を移せば、海波穩かに、房總の山々を一目に見る

景色、やがて旭日は山を離れて、その光りも新らしく眩ざばかり、若殿は山縣に命じて、朝餐の用意を爲さしめる、海邊に沿ふて一軒の茶屋がある、勿論毛利侯のはいれる家ではない、しかし、今はそれを撰ぶの時にあらず、一同引連れ此家にはついた。

其二十九

平生ならば、假し若殿の御前に酒宴を開けばとて、盃幾枚かを隔て、頭を下げて窮窟な酒を飲むのだが、今日は機會が機會、場所が場所とて、主従殆んど膝を接するばかり、酒肴も極めて兪末なものではあるが、斯う打解けて飲む時の愉快さは、亦た格別なものである、献酬漸くさかんになつて、耳熱し情激するや、高談放論、君前に在る身なるを忘れて、時事を慨き幕府を罵る、その痛快なることは、筆紙にも述べ盡しかぬるほどであつた。

戸前に聞ゆる馬の足音、はてなと思ふ所へ、はいつて來たのは、周布政之助である、政之助は岩見の人、幼小の時、父母を喪ひ、長州に移つてから、頻りに學問して、古今の歴史に通じ、經書に詳しく、藩に召出されて國學都講となる、後ち累進して終に政務座役となる、その時が未だ二十五歳であつた、膽氣人を壓し、才鋒屢ば現はる、此に於て君寵益々加はり、長藩屈指の人物

となつた、攘夷勤王の派は、皆な此人の率ゆる所である、惜む可し、元治元年の京都九門の役と、下之關の夷人との戦争に就て、自ら責を引き割服して相果て了つた、高杉久坂の兩人は、殊に此政之助と善交があつたので、起つて之れを迎へる、若殿も御覽になつて「政之助なるか」「ハッ」「何事が出来たか」「御勅使より御沙汰で御座りました」「フーム、如何なる御沙汰か」「横濱寄留地焼打の一條に就て、堅く思ひ止まるやう、家臣の者共へ申諭す可しとのことで御座りました」「その儀は最早心配なし、御沙汰とは、それまでの事なりしか」「別に久坂に對しまして、勅使よりの御手書で御座りました」「政之助は若殿へ、勅使の手書を差出す、宛名は久坂玄瑞とある、若殿でも開封は出来ぬ」「久坂」「ハッ」「これを」玄瑞進んで受取り、開いて見ると。

急使を以て申遣し候 今朝來同藩の士より承り候へば其許等一昨夜來同士の衆を糾合し何事か企つる處有之趣 自然横濱斬夷等の擧に出るが如き事あらば甚た心配能有候 抑も我等雨使下向之事は誠に十年來の叡慮今日仰出さる可き大機會到來にて着府近々入城の期に相成幕府尊攘の臣節を立つるか立てざるか最早一句の間には有之候臣子たる者の節義相勵候上之にある可くと存候 只今善惡に拘はらず事を擧げ候ては我々大命を奉じ下向之趣意も相立たず即時に外患相發し忽ち戦争に及び候は必定の事左候ては未だ勅命も相達せず一時に事は失敗に相成

第一攝海の備も無之不時の朝廷の御勅搖と可相成痛心此事に候 依て折角の大志暫時猶豫せられ近日勅命傳達の上幕府の舉動見定め候て義舉當然の事と存じ候左も無之ては忽ち我々の不覺共相成給命を辱め候様相成候ては甚だ安からず存候間此義篇と熱慮を加へられ今度の一擧暫時相止め候様有之度進退適義候はゞ他日大意を遂げられ候事必然に候間能く思慮有之度候 依て急使を以て申遣し候

十月十三日

實美 公知

久坂玄瑞殿 始め

流石の久坂も一讀し終つて、思はず涙は泣然として下る、まづ若殿の御覽に供へ、それから高杉始め一同へも示す、鬼さも組む可き人々も、斯ばかり我等を重んじ下さるか、と思へば坐る感涙の留めもあへず、袖を濡すばかり、さらに若殿よりも慰諭の語ありて、之れより再び酒宴に入る、高杉は劔を取つて立上り、久坂の吟聲に應じて劔舞を始めた、意氣昂然として天地を吞吐するの概がある。

山内豊信の注意から、御見舞の使者として遣はされた、林龜吉諏訪助左衛門小笠原唯八山地忠七の四人は、馬を揃へて大森まで駆けつけた、この時は、例の茶店で酒宴の折柄、早速この儀を毛利侯へ申入れる、若殿は拜調を許して四人を座敷へ通す、唯八より御見舞の口上が終つて、若殿よりも御挨拶がある、これから、新事が加はつて酒宴は、一層賑かになつた、もう大概の所で切上げやうと、山縣等の計ひで、此に酒杯を收めて、一同揃うて外へ出た、若殿は根來上總寺内外記山縣半藏の三人が衛つて一步さきにゆく、十一人は土州の四人と揃つて出かけるつもり、後れて出て來たのが、周布政之助である、宗十郎頭巾を冠つて馬に跨る、四人の前を通りながら「イヤ、土州の御家來、大殿は御巧者の方で御座るのう、ハ、ハ、ハ、唯八は思はず馬を寄せて「周布氏、何と仰せらるる」「容堂公はチャラカシの方ぢや、と言ふのぢや、アツハ、ハ、ハ、」性急の忠七、大刀の柄に手をかけ、「無禮なるぞ周布氏、今一言いふて見よ、その分には差置んぞ」「言ふに何の難きことが御座る」さてこそ一大事と、双方つめ寄る、晋作は破るるばかりの大音あげて「周布……無禮ぞ」腰間の秋水閃くかと思ふ間に周布の馬を打つ、久坂は「ハッ」と聲を上げる、

周布の馬は逸して、はや一町ほごを離れた、忠七は満面朱を瀝いで「君辱しめらるる時は臣死す無禮の周布待ッ」馬を煽つて駆け出んとする、唯八は忠七の前に立塞りて「マア待ちなされ山路氏」「何で御留めあるか」「掛合は後刻のことになされ、今は君命を蒙れる大切の身彼れ一人斬るに何の事がある、徒らの争闘は使者として慎む可き事で御座るぞ」理の當然に山路も留まる、そのうちに、周布の姿は見へなくなつた、高杉の即智は人皆な舌を捲いて驚いた、理否を問はず、周布の斬られんには、十一人も其儘にならぬ、自然土州の四人と斬合ふことになるのだ、馬の尻を叩いて、周布を逃がす杯は、まさに非凡な遣方であつた、久坂玄瑞は腰を屈めて「周布政之助は泥酔して、前後も不覺の折柄の失言の段は幾重にも謝罪申す、この場限りにお忘れ下さるやう残る一同より……」「イヤ、その御挨拶しばらく、一度ならず二度までも、繰返しての暴言、よも泥酔とのみは申されまい、この儀については、歸邸の後、屹度おかけ合に及ぶ可し、只今は無事に引取り申す」唯八の一言に、流石の久坂も黙して了つた、これで別れることになる。

小笠原の一行は、歸邸の後、まづ豊範に拜謁して、毛利侯の御挨拶を申述べ、周布暴言の次第を上申に及ぶと「何と申す、周布の暴言を聞流して立歸りしとか、其方共の腰の大小は、何の爲めにするのぢや、君辱しめられて臣未だ死せず、不甲斐なきもの共ぢやな」父君を言られたる怒

りの餘り豊範侯思はず、切齒しての一言、四人は面目を失ふて御前を下る、段々相談の上これより長州邸へ赴き、周布引渡の談判に及び、承諾を得ざるに於ては、斬死しても君公へ申譯を爲す可し、このことに一決した、門前に出ると、本山只一郎に出逢ふたので、これを話すと、こは面白し、自分も之れに加はる可し、とて五人揃つて長州邸へやつて来る。

小南五郎右衛門は之れを聞いて、打捨置かば珍事にも相成る可しと、早速箱崎の邸に來り、此旨を豊信に上申した、しばらく考へて居た豊信は「乾は居るか、猪之助を呼べッ」聲の下から小姓が立つて、役部屋へ來た、殿の招ぎを聞いて、猪之助は早速御前へ出た、この時は、退助と改めたが、殿は矢張り幼名を呼んで居る。

其三十一

退助は豊信の用人である、豊信が隠居して容室と稱して後は、殊に退助を愛して、殆んど左右を離れぬ位であつた「ハッ……御召に依つて退助罷り出ました」「ウム……退助か」「ハッ」其方、これより外櫻田の長州邸へ參り、前日の大森一條に就て、然る可く計ひ參れ「ハッ」「小笠原山路等に過失さすな、申出の一分相立ちなば、それにて引上げまいれ」急ぎ立てられて退助は、支度

も勿々、箱崎の邸を出る、容室が用事の申付やうは、いつも之れだ、何うして來いといふことは決して言はぬ、然る可くと言ふ丈けで、他のことを言はぬのが、所謂容室一流の命令である、されば才識ある家來は、自分の器量に應じた働きを爲て、君公の御威に預るが、平凡の奴は、いつも失敗つて、お目玉頂戴、他の使ひ方は、實に巧妙殿様であつた。

却説、山路小笠原諏訪林の四人、自ら進んで仲間入を仕た本山を加へて、都合五人の者は、外櫻田の長州邸へ來て、まづ重役に面會を申込むだ、山田右衛門が出て應接することになる「手前は山田右衛門と申すもの、何御用で御座るか、一應承まはり度し」小笠原は一列中の年長、殊に膽識ともに備はつたる傑物、膝を進めて「拙者は只今申上げたる小笠原唯八、御掛合の次第は、昨日のこと、大森濱にて御當家の臣、周布政之助と仰せらるる人、我が君公に對して」斯様々々の次第と、有りし始終を物語り「さて斯く迄、君公を罵言せられては、我々臣下としての一儀相立ち難く、是非共周布氏の首を頂戴いたすか、さもなくば、本人を其儘に御引渡し下さるか、御返辭に依つては、我々に於ても覺悟が御座る、御即答のほど待上る」山田も之れには驚いた、山路忠七の如きは、今にも飛かからんの勢、その他の二人も、同様の氣勢を示して居る「イヤ、驚き入りたる次第、仰せの如くんば御立腹御尤千萬、誰れに致せ主公有つ身の武士は、然ある可き

等、しかし、一應は本人共に聞糺し、君公の御思召も伺ふたる上、何分の御挨拶に及ぶ可し、暫し時たまち受を願ひたい『承知いたした、何時までもたまち受をいたす』これで山田は奥へ引取る跡に五人は、若し此請求に應せざるに於ては、假令斬死するとも一歩だに退く可からずと、それは豪い覺悟で控へて居る。

山田は、當日の出来事に關係ある、高杉久坂を始め例の十一人を呼んで、事情を糺すと、小笠原の言ふ通りである、今更に周布の無禮には呆れたが、何うも致方が無い、其所で、十一人の意見を、各自に聞いて見ると、假し周布が悪いにもせよ、むざ／＼と引渡すことは出来ない、しかし、本人も酔ふて居たことであるから、一通りの挨拶は仕やう、それで承知しなければ、我々は浪人するも、周布の爲めに庇護せねばならぬと言ふ、ことは十一人が同じ口上である、山田の考へでは、何うしても、これは捨置けぬ、一步を誤れば、双方の息込が息込丈けに、何を仕出來すか分らない、こりやア飛んだことが出來た、と思ひながらも、尙ほ本人の意中も聞いて見る必要がある、周布を呼んで、何うするか尋ねる、切腹の外は御座らぬと答へた外は、何を聞いても言はない、山田も此處分には大閉口、折柄、小姓が急がしやうに遣つて来て『山田様に申し上げます』何事ッ』上がお召で御座ります』若殿の御召、これは猶豫ならぬ、一同に短氣を出さぬや

其三十二

うに申置で、君前へ出ると、また驚いた、容堂公の用人、乾退助が御前に控へて居る、さては、少し狼狽の氣味で、御前に平伏した。

容堂公の命を蒙つた時に、退助は私かに思ふ、こは一大事なり、豊範侯の奥方は、現に毛利家の養女である、然るに、この一事から双方の感情を悪くして、絶交にでも相成つては、折角の御縁組も空しくなるの道理、こりやア此使者は、容易なことではない、と心を苦めながら、長州邸へ遣つて來た、退助は屢ば使者になつて來たことがあるので、大分お馴染になつて居る、毛利登人、中村九郎の二人に面會を申込むだ、一人は早速面會する、一應の挨拶も済むで、さて何事の用件かと尋ねられて退助は『實は斯う言ふ次第』と大森一條を詳細物語つた、二人も之れを聞いて驚いた、小笠原山路杯が來て、何か至難しい掛合に及んで居ると聞いたは、たつた今のこと、退助の物語で要領も分つた、が扱て左様して見ると、何うしたものか、これは却々むづかしい問題だ、退助の膝を抱いての話でなければ不可んと極めた、流石のものだ、『乾氏、何と致したもので御座らう、周布の首一つで治まらうか』お言で恐れ入る、無論周布殿切腹の御沙汰は當然の儀で

は御座るが、左様致したくないのが拙者の所存、御當家と拙藩との間柄は世間にも知れて居る、萬一にも此事に依り不和にでも相成りては一大事でもあらう、失態は働いても惜む可き才幹ある周布殿、こりや殿様同士お逢になるのが上策と存するが、貴所の御意見は如何で御座る」飽迄も前後を考へた退助の意見には、二人も頗る同意であつた、此に於て、君公に申上げる、忠廣も驚いて、兎に角、退助に面會すると仰せある、二人の案内で、退助は御前へ出た「オー退助か、よくこそ」ハツ、いつも御健勝の體を拜し、恐悦に存じまする」豊範殿にも、御隠居にも、御變りなうて頂戴々々」本日の使用は……」「イヤ、聞いたく、余の取締が届かすして、かくの始末、何とも土州殿には申譯が無い、政之助は殿前に行ふつもりぢや、余に二心なき證據には、鍛冶橋邸へ自身能出ると申傳へて貰いたい」流石は大藩の當主丈けあつて、事理は善く判る、退助は靜かに「御指圖がましくは御座りますが、周布殿御制敗は、拙藩へ成らせられてからの俄然る可きかと存じまする」ウム、注意は辱けない、山内殿は良臣を有たれて幸福ぢやのう」周布を救はんとの退助の注意、それは忠廣にも善く呑込めた、うれしさの餘りの世辭、退助は面目を施す、登人は進んで、小笠原等四人のことを申上げる、これにも面會すること、そこで直に山田を呼びにやつた、山田は來て見ると、退助が居たので、これはと思つたが、事情を聞いて安心する、

四人を早速招いて、長門守から改めて挨拶がある、それは、退助に答へたのと同様、四人も之れには恐れ入つた、斯う言ふ次第で、その日は無事に済むだ、翌日は長門守自身に、まづ鍛冶橋邸へ來た、容室は退助の復命を聞いて、此邸まで來て居る、長門守より改めて詫を入れた、容室は一笑して、却て周布の爲人を賞める、これで周布は助命になつた、けれども、遠慮して當分謹慎、改めて麻田公輔と稱し、これよりは周布の本名を捨てる、忠廣からも許されて、終生變名を本名に爲て了つた。

何ちらの殿様も、周布の命を助けやうと思つたればこそ、現に助かつたには違ひないが、退助の使の仕方も善かつたには違ひない、容室の御最負は一層ふかくなる。

それは先づ片付いたが、例の脱藩の五十人組、それが跋扈して、勤もすれば、君命をも輕んずる傾きがある、容室の痛心一方ならず、左右を連れて退助に、その鎮撫法を御相談になつた。

其三十三

談緒は、脱藩五十人組のことに返る、前回には、鳥渡その一端だけを現はしたに過なかつたが、今度は、少し詳細く述べることゝ爲やう。

三條姉小路兩卿が、勅使として關東へ下向することになつて、毛利島津の二侯が、警衛して行くことになる、山内侯も亦東下といふことになつた、武市半平太も、同時に江戸へ出たのである、さて國元に残つた、勤王派の連中は、燃ゆるが如き胸の思ひを、ヂツと抑へては居るが、京都や江戸のことが、氣になつて堪まらず、モチ／＼して居る所へ、種々のことが耳にはいる、訛傳は更に訛傳を生み、風説は愈々風説を傳へ、何分にも、國元に引込んで居ることの残念さ、何うかして、京都なり江戸なりへ出て、大に活動して見たいと思つて、ひそかに其機會を窺つて居た、然るに、幕府の改革を主張したと言ふ所から、山内侯が非常に佐幕派から憎まれて、登城の途中、瓦や礫を投げつけられたとか、途上に要撃されたとか、この噂さが、段々高くなつて来た、それを聞いた連中の喜びは、非常なものであつた、彼處此處に集會が催される、島村壽太郎河野益彌中岡光次郎杯いふ、急進過激派を以て目されて居る連中、まづ主となつて奔走盡力した結果、此に同志五十人を得た、そこで連署の上藩廳へ差出した書面は、江戸表の状況を見るに、最も氣遣はしいのは容堂公の御身の上である、自分共は之れを外に見る譯にはならぬ、これより一同出府致す、費用は勿論自分共に於て支辨するのである、と言ふ意味であつたが、餘程過激なことも認められてあつたさうだ、凡そ、かゝる書面に對しては、何とか沙汰があつて、それから出かけるのが、

藩臣たるものゝ平生である、けれども、それを待てば、必ず差留めらるゝのは必然つて居る、肩放して、ドン／＼出立して了つた、書面は出したにもせよ、これでは恰で脱藩である。

この一列には、所謂輕輩のものが多かつたので、それだけ意氣も亦さかんものであつた、途、中何の話もなく、先づ無事に京都へ着した、この時に方つて、土州兵は乾作七手島八助が率ゐて、この一列が着京と同時に、住吉の方面へ移つた、乾手島の兩人は、中岡等に面會して、何時でも緩急相應す可き約束を仕て、それから移つたのである、土州から五十人組の過激派が乗込んで来たと言ふので、その評判は、到る所に喧しく、今にも何事か起すやうな噂さばかり、各藩の勤王派ども、追々聯合がついて来て、五十人組の名漸く、洛の内外に高くなつて来る、ひそかに時機の來るを待つと言ふ有様である。

豊後國竹田の城主中川修理太夫が、今度老中になるとか言ふので、愈よ出府するといふ噂さ、それについては、種々の訛傳も聞へて来る、番に老中とばかりでなく、その他にも、勤王派の感情を害することも少なくない、現に、同藩の勤王家小川彌右衛門の一派を禁錮したことに就て、朝廷よりは、速かに其禁錮を解く可しとの御沙汰が下つた、にも拘はらず、藩王中川は、其命に従はず、却つて、幕府の老中になる、と言ふやうな場合、さア、これが勤王派の癪にさわつて、ま

薩長の二藩が騒ぎ出した、中川修理太夫をして。無事に江戸へ到らしむ可からず、宜しく途中に之れを要して、京都に連れ來り、參朝せしめんといふ計畫、もし應ぜずんば、兵力を用ゆるも苦しからずといふの意氣込みであつた、土州は土州で、別に計畫を立てる、いづれも中川を無事に通さぬといふのである、例の五十人組は、はやくも之れを耳にして、さらば我等の時期來れりと、雄心勃勃、刀の目釘に濡をくれて待つて居る。

其三十四

乾作七が住吉の陣から遣つて來た、五十人組の集合所へ來て、中岡光次郎に面會を求めた、中岡は石川誠之助とも言ふ、後に、中岡慎太郎と稱して、陸援隊の隊長になつた男である、坂本龍馬の海援隊と、相並んで一時は、評判の高いものであつた、惜しい哉、坂本の斬られた時に、中岡も斬られて死んだ、五十人組の中では、首領株である「何時上洛れたかな」只今參つたばかりぢや「何の用事で」尊公に、少し相談があつて「フーム、何事で御座るか」作七は聲をひそめて話す、中岡は「一々首肯く、談緒は愈々住境にはいつたものか」さ、左様いふ事情で御座るから、是非御同意を願ひたいのぢや」それぢや、薩長を出し援いて中川修理太夫を奪はうと云ふので御

座るな」いつも立後れの我藩、今度こそは、美事やりつけるつもりで御座る「委細承知仕つた、同志にも然る可く申談じるで御座らう」これから中岡は、同志を集めて相談にかかつた、無事に苦む連中の、何で異議のある可き、さらば、中川を奪ふて朝廷へ突出し、佐幕派の心胆を寒からしめんと、此に於て、一同支度の上、住吉に屯集せる兵と一つになつて、伏見へ下ることになつた、かかる計畫のあることは、夢にも知らぬ修理太夫、播州路へかかつてから、このことを聞出して、これは一大事、萬一のことがあつては、藩の不名譽にもなる、はて何と致して可からうかと思案に暮れる、さればとて、今更に歸國もならず、強て進まんか、薩長土の手にかかると必定、重役は額をあつめて相談の結果、寧ろのこと、京都へはいらう、江戸へは病氣届を出せば済む、と言ふので、早馬を以て使者を京都へ立てる、上洛の届けである、かくて、修理太夫は京都へ無事にはいつたが、しかし老中の株は之れでお流れになつて了つた、之れが爲め折角の土州藩士の計畫は水の泡、されども、勤王派の意氣は、天を衝くばかりの勢ひ、五十人組の横行は、流石に薩長のものをして、眉をひそめしむることも多く、毀譽ともに起つて來た、土州藩の大監察として、小南五郎右衛門が、京都へ來て居たが、如何にも手のつけやうがないと言ふほどの勢ひであつた。

この五十人組が、國を出ると、すぐに跡から出て来たのが、井上佐市郎といふもので、一たん京都へ来て、大坂へ引ッ返へした、何うも井上の舉動が不審だといふので、段々五十人組が、探偵を遂げると、吉田元吉を暗殺に及んだものが、五十人組の中に居るといふ見込で、それが爲めに追跡して来たのだといふことが分つた、此に於て、五十人組の怒甚しく、岡田以藏といふ劍客を撰んで、井上を殺す役に爲した、岡田は早速大阪へ下つて、朝夕に井上の外出を窺つて居た、或夜のこと、井上例の通り外出する、岡田は今夜こそ遁さじと追跡してゆく、大興といふ貸席で、身分不相應の散財を仕て、やがて遅くなつてから出て来た、岡田は見へ隠れについてゆくと、九郎右衛門川岸へ出た、夜は疾や更けて、普通さへ人通り稀れな川岸端を、酔ふた足元危なげに、急ぐ佐市郎の背後から、刀の柄に手はかけたが、これしきもの刀にかくも汚れなり、と、腰にさげた手拭取つて、バラ／＼とかけ寄る、不意の足音、何事なるかと振向くと、タ、佐市、覺悟ッ、躍りかかつて、手拭を頸に引ッかけるや、力にまかせて、グーッとしめつけた、何條以て堪る可き、哀れ佐市郎の呼吸は絶へた、岡田は四邊を見廻して、人の居らぬを幸ひと、川中へ投げ込んで、いづくともなく逃げ去つた。

京都の同志は報知を得て喜ぶこと限りなく、折柄、江戸の同志から、出府を促がされたので、

一同支度を仕て、愈々江戸へ向ふことになつた。

其三十五

東海道五十三驛、武家の往來で、半は賑はつたものだ、宿場立場の混雑も、さては籠登で越す三大川、川越人足の懷裡は、存外に温かいこともある、纏まつた貨錢は、我儘も言はれるが、いつも大名の行列で取り揚る、武家の中には、随分卑者なこともあるが、大體に於て、まづ町人よりは賃になつたものだ、それも、今は昔の夢の跡、川越人足や宿場役人の末路は、果して何うなつたらうか、涼車の煤烟に、並木の松も多くは枯れて、本陣の軒端寂しく、行人稀れな宿驛の哀れさ、轉た今昔の感に堪へぬ、未だ其繁昌の、驛馬の鈴にも知られたる、徳川十四代の將軍家茂の代盛り、箱根の關所嚴かに、通行の旅人を誰何するといふ、その混雑も一層である。

大監察小南五郎右衛門を、殆んど脅迫の體度で受取つた、割符の功は、五十人組の一系列も、難なく關門を通り得て、險路峻坂八里の長きも、只だ一氣に越へて、小田原の街へはいつたのは、もう日の暮れる頃であつた、明日は山を越そうといふ人と、越へて來ての疲勞を休める連中が、落合ふ所丈けに、宿屋の雑踏は豪いものだ、中岡を頭に小伊勢屋に泊り込んで、今は酒宴の真ッ

最中、勤王の論に、朝廷を笠に冠り、攘夷の主張に、意氣天を衝くの概ある、壯士の一團、河野益彌は「時に各自方、ちと御相談の事が御座る」今まで喧騒ついで居た連中は静まつた「他のことでも御座らぬが何うも我等の秘密が漏れて、大事動もすれば破るゝの怖れあり、畢竟するに、同志のうちに、首尾両端の曲者あるに依つての事を存する、かゝることは、根を穿り土を掻いて、後日の禍害を除かずば、江戸表へ乗込んでからも、意の如く立廻ることも出来まじと存する、拙者の考へでは、互詮儀を以て、その曲者を處置するを第一と存じ申す、各自方の御所存は如何で御座るか」こんなことは、誰れにしても、言ひ出すのは厭なもので、陰口は格別のこと、表面立つて言ふものはない、益彌は流石に、農商務大臣から樞密院顧問になつて、故人の數にはいッた、河野益彌の前身である丈に、却々男らしい所はあつた、けれども、今が今、誰れが怪しいとも、それは證據のないことで、一人として他を指して言ふものはない、妙な眼を爲て、チロく、平生から怪しまれて居るものゝ顔へ、視線を注ぐばかりである。

この一列に、坂本清平と言ふものがあつた、國を出る時から、嫌疑を受けて居た一人である、どうも藩廳の間者ではないか、と多くの人は、この坂本に眼をつけて居た、今益彌の一言を聞くといや、河野氏それほごに仰せらるゝ以上、必ず御見込のあることで御座らう、固より我黨の

一大事、暖味は武士の禁物で御座る、それ仰せに相成つては如何で御座る」益彌はニヤリと笑つて、何にも言はぬ、清平は少し焦込んで「拙者の申すこととて、一笑に附せらるゝは、如何の次第で御座る、それどもに、拙者を其人と言はるゝのか」益彌は猶ほ黙して居る「今更ら黙つて居らるゝは卑法で御座らう、何とか御挨拶を承まはりたい」聞き度くば申して見やう、御身が怪しい」凜然として一喝した、坂本は太刀の柄に手をかける、益彌も立上らうとする、一座總立になつて兩人を制止へた、坂本は二三のものが有めながら外へ連れ出した。

其晩のことは、預かる人があつて静まつた、江戸へ着いてから、その裁判をつけるといふので、翌日の朝は、出立するので混雑を極めた、不思議のことには、此一列に坂本清平の姿は見へなかつた、誰れの話か、氏名の知れぬ武士一人、町外れの松並木に斬倒されて、無惨の最期を遂げて居たことであつた。

其三十六

山内家の成立が、前回に述べたやうな次第、普通の外様とは少し異つて居る、何方かと言ふと、徳川の方に近いのだ、従つて、勤王は日本國民の當然取る可き方針であると、それは知れ切つた

ことだが、それにつけても、徳川の爲めに、心勞することは、他の諸侯よりは深いのである、勤王は勿論のことであるが、去ればさて、この好問題を餌にして、徳川を苦めやう杯の考は少しも無いのである、従つて、今回の勅使沙汰に就ても、双方の感情を和けて、勅使にも讓歩をさせ、徳川にも違勅ならんやう、攘夷論の壓迫もせぬが、徳川の面目も立てやうたい、これが容堂の心事であつた、何うかすると、土州の向背が、曖昧に傾く風のあつたのは、之れが爲めである、山内家の苦心は、察するに餘りある次第だ、藩臣中の過激急進の一派は、往々にして藩廳の舉措に嫌焉たらぬ傾きのあつたのも、全く之れからで、五十人組の猛然として、脱藩出府の計畫に出たのも、一つには、藩廳に不平の結果であつた。

乾退助は、例の如く容堂の御前に伺候して居る、容堂は左右のものを遠けて、退助一人を留めた『退助ッ』『ハッ』『苦しいない、近う寄れ』退助は進んで、殆んど膝の接するまでになつた『只今、小南よりの急使に依れば、五十人組の者共、一兩口うちには着府いたすであらう、前後の思慮もなく、過激の振舞あるやうでは、余も幕府の相談役ぢや、幕府へ對して申譯もなきこと仕出來されては、由々敷大事と思ふ、さればと申して、彼の者共といへど、忠君愛國の大義を楯に致すこと故、輕々しき取扱ひも出來まい、其方何とか致して、之れに備ふる妙策は無いか、遠慮な

く述べて見よ』温言のうちに、凜として侵す可からざる威嚴を示して、尋ねられた此難問、流石退助も即答に及びかねる『ごうぢや、心得のほどを述べて見よ』『恐れながら申上ます、不肖の退助、却々以て妙策杯申して、言上いたす可きことも御座りませぬ、只だ一つ……』容堂の膝は更に進むだ『自分共の同志と稱しますもの、彼是五十人ほど御座ります、いづれも文武の二道を辨へました、立派な武夫ばかりに御座ります、之を以ちまして、彼等に備ふることの一策、諺にも御座ります、毒を以て毒を制すの譬へ、激徒に備へますには、激徒を以てするの苦肉策で御座ります、彼等のうちにも思慮深きものも御座りますれば、幾分の遠慮も起きやうかに存じます、同じ家臣の彼等の手にかゝり、無慘の最期を遂げますは、畢竟此方に充分の備へなきにも依るものと存じます、かく致しまして、別に君公より彼等の重立ちたるもの共へ、然る可く御意を賜はらば、必ず鎮靜の目途相立つことと心得ます、御語に甘へまして、恐存のほど申述べました次第、御一笑下さりますやう……』容堂は笑を漏らして『おう、よく申した、余も其考へぢや、聞けば、小田原に於ても、中川清平を討果したといふことぢや、如何にも藩廳の取締りが立たんやうで、他藩へ聞へても面白くない、それに、未だ重役共にも申聞んのぢやが、實は朝廷の思召を受けて居るのぢや、近々上落も致さねば相成らぬ、此場合に五十

人組の者共、所存違ひにて不都合の振舞あつては、朝廷へ對しても相濟ぬ次第、幕府へ對しては猶更らのごとちや、今改めて、其方に此大役を命ずる、五十人組の鎮撫法ちや、可いか、しかと申付くるぞ』『ハッ………委細承りました、御心安く思召せ』『その答へで満足致した』さア退助は大役を申付けられて、これから出府中の同志を集めにかゝる、所へ例の五十人組は、豪い勢いで乗込んで来た。

其三十七

退助は容堂の命に依つて、同志の糾合にかゝる、小笠原唯八山路忠七大黒銀次郎武市八十衛等を始め、十數人の同意を得て、之れを五十人組に備ふることに爲た、しかし、退助の胸中、敢て五十人組と争闘するの考へは無いのだ、五十人組が、妄りに殺戮を恣にするから、それを爲せないやうに、取締る心得で始めたのであるから、若し、五十人組に深く其眞意を汲取るものがあったら、却つて面白いことになるのである、元來、容堂と言ふ御方は、英姿颯爽とでも言ふべき、頗る壯快な決着の疾い人であつた、齡も未だ三十六歳、思盛りの御隠居である、威勢のよい人ではあつたが、幕府と朝廷のことについては、獨り心を痛め、頻りに其調和を謀つて居たのであ

る、然れば、毛利侯が極端な攘夷論を主張して、勳もすれば、幕府を倒さんとする、それには心中不快を感じて居るのである、縁族筋ではあつたが、毛利侯の致方については、毎に反對して居つた、却つて、島津侯に接近して居たのである、五十人組は、毛利侯の家臣と往來して、さかんに過激な振舞を爲るから、それで之れを嫌ふのだ、左ればさて、五十人組も家來なり、殊には惜む可き人物も、その中に居るので、まア成る可く過失を爲せまいの考へから、彼等の着府に先ちて、豫め警戒を加へたのである。

五十人組は堂々と鍛冶橋邸へはいつた、藩主豊範は、容堂の内意を受けて居るから、すぐに此連中へ警戒を加へて、今でいふ注意人物の扱ひに仕て了つた、さア其不平は普通りでない、所が、乾退助の率ゆる一組が、手強く敵對つて来る、これは妙な譯と、段々探つて見れば、意外千萬、この警戒の嚴重なるは、退助の取計ひといふことが判明した、不都合な奴は乾である、打ッ放して了へと騒ぎ立つ、中岡は頻りに之れを制して『まア、待つがいと、乾は元來我等と同論の人で御座る、唯だ違ふ所は、手段の一つ丈ぢや、これほどに迄、我等を遮るには、何か仔細が無うては叶はぬこと、兎に角、實情を探る間、靜かに仕て居て下され』と、流石に中岡のことなれば、まづ一同を制した後、武市半平太を訪ねて、この事情を打明けて、乾に一應談じて貰いたいと話

した、武市も實は面白からず感じて、いづれ乾に逢ふてと思ふて居た所であるから早速承知を爲た、武市は五十人組の最も尊敬する人で、陰然その首領である、けれども、表面は關係のないやうに見せかけてある、されば、この話をするには都合のよい位地になるのだ、其日のうちに乾を訪ふた、五十人組に對する致方が餘りに苛酷であるといふ意見、乾の答へは「何うも仕方がない、五十人組の行動が亂暴であるから、自然之れを抑へるには、手酷く行かねばならぬ、暗殺を以て能事とする輩には、かゝる取締を爲る外はない」とやつつけて、武市の容子を見て居る「これは意外のことで御座る、暗殺を以て能事と心得るものは、五十人組には一人も御座らぬ、何を證據に左様なことを仰せらるゝか、半平太緊と承まはりたか」大阪に於て井上佐市郎、小田原に於て坂本清平、また、國元高知に於ては吉田元吉、いづれも暗殺に逢ふて倒れたこと、御身も御承知ならん」イヤ、しばらく、これ等のことを五十人組の所爲と言はるゝか」奉行所ならねば種々證據を擧げて誰れ彼れとは申さぬ、さりながら、十日の見る所、五十人組の亂暴は、今更申すには相成り申さぬ、殊に、御隠居様の御申付け、強て背かば、君命を輕んずるの恐れも御座る」容堂の命令とあつては致方もない、武市も手を引いた。

其三十八

文久二年から翌三年へ跨けては、山内家の最も光榮ある年であつた、二年の暮には、隠居の容堂悲信が、上洛の朝命を蒙りて、その準備に忙しく、一夜明けて三年の正月三日には、當主の豊範が、禁裡御所へ參内仰せ付けられて、天盃を戴き、御衣一襲を賜はつたといふ、この無前の光榮は、昨年の勅使發衛に就て、勤向充分なりし御褒美であつた。

却説、容堂は愈々、文久三年正月を以て、上洛と事決して、二年の暮から其準備にかゝる、幕府の相談役といふのであるから、出かけるのにも、却々むづかしいのである、幕府では、また大切に爲て逃すまいとするので、今回の上洛は、事情止むを得ずとするも、變心せぬやうと、出來る丈けの便宜を與へ親切を盡くすといふやうな譯、大鵬丸といふ船を貸與へて、大阪まで送るといふ騒ぎ、容堂の歡待ることは普通ならず、退助は無論御供の中にはいる、大切なる御用は、すべて退助に於て取扱ふやうになつて居るのだ、準備も大略ついて、今は十一日の出帆と決した。

容堂は一日のこと、退助を呼んで「今度の上洛については、無論のこと、勤王攘夷の渦中に投ずるのであるから、余の進退は餘程注意をせねばなるまいと思ふ、勤王を口に唱へて、幕府を倒

す陰謀のないとも云へぬ、心にも無き攘夷を叫びて、之れを機會に幕府に對する私怨を漏らさんとするものもなきにあらず、かゝる表裏ある輩に對しては、余は飽迄も、反抗つもりぢや、其方もその心得で萬事に注意を致せ、就ては、縁族ではあるが、長州昨今の舉措、余の心に落入らぬことのみ多いのぢやが、薩藩は極めて淡泊で、是非明白ぢやから面白い、殊に大久保市藏と申すもの、却々の分別者ぢや、今日にも、其方參つて面會いたし、余の所存も打明けて、後日の約束も致し置け、諸事其方の心得たる通りぢや、よいか」熱々承はつて退助は、心のうちに「ア、この君公は實に豪い御方だ、幕府では良い御方を相談役に致して僥倖だ、薩藩の家臣も數多き中に於て、大久保市藏に目を注がるゝ所抔は、儘かに非凡な所がある」と深く感じて御前を下る、早速田町の邸に市藏を尋ねる、薩士は自然接近するやうになる、市藏も、九日に土州邸へやつて来た、この時は、小笠原唯八も同席したのである。

十一日に品川を解纜した大鵬丸は、遠州灘にさしかゝつて、暴風に逢ひ伊豆の下田へ逃げ込み、風待を致して、それから出帆するといふやうな譯で、漸く廿一日になつて、大阪へ着することを得た、藩邸の出迎は言ふ迄もないが、別に一團の武士ありて、出迎へる有様の普通ならず見へた、退助は容堂の袂を控へて「恐れながら……彼れに控へまするは、江戸表御出發の砌り、早飛

其三十九

脚を以つて、退助より國元へ申遣はし、呼上げましたる者共に御座りまする、何卒御言下し賜はりまするやう、偏に願ひ上げまする』左様か、よう氣が注いたのう』ズカ〜と進み寄つて『一同大儀ッ』「ハッ」見島勘兵衛毛利恭助、柴木源四郎、中山源太兵衛、松坂三右衛門、高屋佐兵衛を始めとして、三十人あまりの勇士は、思はず落涙に及んだ、大殿から途上の御挨拶を賜はるとは、何たる武士の面目ぞと、その喜びは、やがて死を以て君命に奉ずるの覺悟となるのである、容堂却々人を遣ふのが巧い、これから支度を整へて、京都乗込みの一段、退助の活動になるのである。

容堂の齡未だ三十六の若盛り、しかも土佐の御隠居と言はれて、見も知らぬ人は、何れほどの老年かとも思ふだらうが、馬上ゆたかに、華奢な上洛を眼前に見たものは、誰れも其齡の若いのと、威あつて猛からの男振とには、案外の驚きを示したのである、大佛の智積院へ着して、朝廷へも入洛の届が済むだ。

この時が、攘夷黨の氣焔最も盛んにして、長州の勢力は、洛の内外に響き、朝廷の百事は、長州の向背に依つて決するといふの有様であつた、毛利侯は歸國中で、桂小五郎が一切萬事を切廻